

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

■主催: **JEITA** 一般社団法人電子情報技術産業協会
■お問い合わせ: 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル5階
電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225 E-mail: contact2014@inter-bee.com

Inter BEE

International Broadcast Equipment Exhibition

International Broadcast Equipment Exhibition Inter BEE

REVIEW 2013

REVIEW 2013

INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com

Inter BEE 2013

International Broadcast Equipment Exhibition

Inter BEE 2013〔(第49回)2013年国際放送機器展〕は、平成25年11月13日(水)から11月15日(金)までの3日間、千葉市・幕張メッセにおいて、5省庁・団体の後援、31団体の協力により開催した。

■国内随一のプロフェッショナルメディア総合展

日本でのテレビ放送開始60周年となる今年、49回目の開催を迎えた「Inter BEE」は、「映像・放送関連機材部門」、「プロオーディオ部門」、「プロライティング部門」、「クロスメディア部門」の4部門に過去最多の出展者が集い、放送事業者をはじめ、関連機器メーカー、サービス事業者、コンテンツビジネス関係者、さらには、クリエイターやデザイナーなど、幅広いステークホルダーが一堂に会し、年に一度の最新トレンドの情報発信、情報交流のハブとなる機会として活用された。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催決定により、大きな期待が寄せられる放送サービスの高度化について、4K/8Kなどの超高精細映像技術、セカンドスクリーンやスマートテレビ、HTML5による動画配信等、国内外の様々な企業・団体からメディア産業の今とこれからの指し示す注目の提案が相次いだ。

■多彩なコンファレンスやオープンセミナーを同時開催

展示と共にメッセージを発信するコンファレンスでは、Inter BEEが企画・運営する「Inter BEE Content Forum」や「チュートリアル・セッション」、「Cross Media Theater」に加え、今回で50回目を迎えた一般社団法人日本民間放送連盟主催の「民放技術報告会」、一般社団法人日本ポストプロダクション協会主催の「ラウドネスワークショップ」も同時開催した。

さらに、今回初めて、米国NAB Showで同時開催されている有料コンファレンスの日本版を「Japan Post Production Conference」として、Inter BEEで同時開催するなど、国内外のトップクリエイターや第一線で活躍するプロフェッショナルがメディアとコンテンツの多様性と可能性を訴求した。



Exhibitors

過去最多の出展者が参加

世界の放送技術を牽引する企業が一堂に集結。デジタル化の先にある次のビジネスに向けて多くのテクノロジーが披露され、放送ビジネスの新しい可能性を提案した。

出展者：**918**社(過去最多)

海外出展者：**536**社(過去最多)

Trading Visitors

幅広い分野からの ビジネスユーザが来場

展示領域の拡大に合わせ、従来の来場者層に加え新しい来場者層も参加、新たなテクノロジーを求め出展者との交流が行われた。プレス取材も多く、国内外に広く紹介された。

来場者：**31,979**名

報道関係者：**324**名

International

世界が注目する最先端技術

東京オリンピック・パラリンピック開催に向けてオールジャパンで進める、4K/8K等の放送サービスの高度化に向けた先進的な取り組みは、海外からも大きな注目を集めた。

海外出展者：**30**ヶ国・地域

海外来場者：**34**ヶ国・地域

Professional Audio

心に響く音は テクノロジーで再現される

よりパワフルでより高音質へ革新を続ける PA・ライブステージ機器、効率化・多機能化が進む DAW などの MA 関連機器、さらにはデジタルマイクやラウドネスなど話題の最新機器・技術が、世界から一堂に集められた。

■プロオーディオ機器

マイクホン、レコーダ、デジタル オーディオ ワークステーション(DAW)、コンソール、ミキサ、マスタリング機器・システム、音声圧縮・伝送技術、各種コンバータ、エフェクタ(ハード、プラグイン)、アンプ、プロセッサ、イコライザ、インターフェース、スピーカ、プレーヤ、オーディオメータ、ラウドネス関連機器、音響設計・制御・施工、設備音響(映画、商業施設)、PA システム、ライブサウンドシステム、プロフェッショナル用電子楽器、PC オーディオシステム、ヘッドホン、ヘッドセット、イヤーマニター、インターカム、伝送ケーブル、アクセサリ、電源、ラック、ケース、バッグ、その他周辺機器

Production & Post-Production

創造はさらなる価値を 求めて進化する

最も注目を集めた4K映像制作技術、個性的な技術が際立つカメラ。汎用性の高い撮影から編集、送らまでの一貫したワークフローに注目が集まった。

■プロダクション関連

撮像装置(HDTV システム、スタジオカメラ、VTR 一体型カメラ、カムコーダ、4Kカメラ、デジタルシネマカメラ、3Dカメラ、クレーンカメラ、レンズ、その他周辺機器)、記録装置(ビデオサーバ、ファイルサーバーシステム、DVD システム、BD システム、VTR、メモ리카ード、メモリーデバイス、光ディスク、ビデオテープ、データ圧縮技術、その他周辺機器)、表示装置(映像モニタ、マルチディスプレイ、プロジェクタ、LCD・PDP・LED・有機ELディスプレイ、プロンプタ、その他周辺機器)、各種特機・周辺製品(キャビネット、ラック、ペダスタル、三脚、雲台、クレーン、ジブ、ドリー、ステディカム、ファニチャ、運搬用ケース、その他周辺機器)

■ポストプロダクション関連

編集・制作装置(編集機、スイッチャ、ルーティングスイッチャ、ノンリニア編集システム、VFX、カラーコレクション、ペイントシステム、字幕・サブタイトル制作システム、タイトル制作システム、キャラクタージェネレータ、合成システム&ソフトウェア、メディアコンバータ、各種エンコーダ、その他関連ソフトウェア・周辺機器)、マルチメディアシステム(CG制作システム、アニメーション制作システム、バーチャルスタジオシステム、モーションキャプチャ、ソフトウェア&システム、その他関連ソフトウェア・周辺機器)、制作管理システム(コンテンツマネジメントシステム、システム統合技術、データベース技術、ストレージ機器、アーカイブシステム、その他関連ソフトウェア・周辺機器)

Professional Lighting

光で表現し コミュニケーションする

LED 照明システムの拡張によって、最新の照明システムが集結。舞台芸術やエンターテインメントを追求した映像と音響とのコラボレーションを可能にするソリューションが紹介された。

■プロライティング機器

スタジオ照明機器・設備、舞台照明機器・設備、テレビ照明機器・設備、映画照明機器・設備、写真スタジオ用照明機器・設備、調光システム、調光卓、コントローラ、ディマー、無線遠隔操作装置、特殊効果(エフェクト)機器、サーチライト、大型エフェクト、映像投影機器(プロジェクタ)、プロジェクションマッピング、LED 機器、ストロボ、照明バトン昇降装置、配線機器、ケーブル、その他周辺機器

Distribution & Delivery

情報は多様な手段で 伝えられる

最新の符号化技術による 4K コンテンツの配信技術。その他にも、様々なデータ伝送サービスや導入事例など、次のビジネスにつながる提案が行われた。

■送出・送信システム関連

送出システム(自動番組送出システム(TV、ラジオ)、自動 CM 送出システム(TV、ラジオ)、サーバシステム、IT ソリューション(ブロードバンドシステム)、ファイルシステム(オーディオ)、ファイルシステム(ビデオ)、グラフィックライブラリーシステム、フィルム&テレシネ、グラフィックスシステム、外部情報対応システム(天気、株、交通情報等)、映像符号化(H.264 デコーダ/エンコーダ、HEVC デコーダ/エンコーダ、各種トランスコーダ)、中継システム(基地局設備、FPU、SNG、中継車、車載用関連システム・周辺機器、連絡用無線機、緊急報道システム、その他周辺機器)、送信システム(地上デジタルテレビ放送、ワンセグ放送、ホワートスペース、エリアワンセグ、V-High 帯、V-Low 帯、マルチメディア放送、ラジオ放送、FM 放送、BS 放送、CS 放送、CATV、映像配信ネットワーク、CDN、伝送ケーブル、ワイヤレスシステム、光ファイバ、その他周辺機器)

■放送機器関連製品

電源装置(無停電電源装置、定電圧・定電流電源装置、車載用電源、バッテリー、バッテリー充放電器、その他周辺機器)、測定・変換機器(試験信号発生器、測定器、信号変換器、その他周辺機器)、放送機器設計・開発・製造(開発言語、半導体、部品、設計、製造、スタジオシステム設計、施工、メンテナンス、技術派遣)

Cross Media

メディアの次世代技術が集まる

テレビとスマートフォン/タブレット端末を連携させ、新たな放送ビジネスの可能性を示したセカンドスクリーン。2012年より、CG・VFXプロダクションが出展、クリエイターの参加も増加した。

■IPTV/ ネット配信

映像圧縮技術、映像編集・管理システム、映像配信システム・サービス、クラウドサービス、データ放送システム、ビデオオンデマンドシステム、インターネット放送、ソフトウェア、その他関連技術・製品・サービス

■Mobile TV

モバイル向け映像編集システム、モバイル向け映像配信システム、モバイルコンテンツ・アプリケーション、モバイル端末機器、ワイヤレスシステム、Wi-Fi・WiMAX、LTE、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Cinema

デジタルシネマ用撮影システム、デジタルシネマ用編集システム、デジタルシネマ配信システム、デジタルシネマサーバ、映写システム、オンデマンドサービス&コンテンツ、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Signage

デジタルサイネージ編集・管理システム、受像システム、映像コンテンツ配信システム、通信ネットワークサービス、広告メディアサービス、その他関連技術・製品・サービス

■3D Image

3D 映像制作システム、3D 映像編集システム、3D 映像受像機・端末・システム、3D 上映システム、3D コンテンツ、その他関連技術・製品・サービス

■次世代映像技術

4K ディスプレイ、8K ディスプレイ、裸眼 3D 映像、モーションセンサシステム、インタラクティブシステム、バーチャルリアリティ、AR、パノラマ映像、高精細監視映像システム、高精細医療映像システム、その他関連技術・製品・サービス

■Digital Contents

実写、アニメーション、コンピュータグラフィックス、オーディオ・アーカイブ、レンタル映像、その他関連技術・製品・サービス

Forum & Symposium

最新動向を伝え、 多彩なニーズに応える

最先端技術を駆使した事例紹介や、次世代放送技術の紹介、海外の業界動向に加え、新しいエンターテインメントを生み出す国内外のクリエイターも登壇し、幅広い分野のユーザに対してビジネスのヒントを提供した。

■コンファレンス

Inter BEE Content Forum、Inter BEE チュートリアル・セッション Asia Contents Forum、Cross Media Theater

■同時開催

民放技術報告会

Exhibition Category

開催概要


- 名 称
 (第49回)2013年国際放送機器展
 International Broadcast Equipment Exhibition 2013
 (略称: Inter BEE 2013)
- 会 期
 2013年11月13日(水)~15日(金) [3日間]
- 開場時間
 11月13日(水) 午前10時~午後5時30分
 11月14日(木) 午前10時~午後5時30分
 11月15日(金) 午前10時~午後5時
- 会 場
 幕張メッセ/展示ホール4~8・国際会議場
- 入 場
 無料(全来場者登録入場制)
- 主 催
 一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA)
- 後 援
 総務省、経済産業省 (建制順)
 日本放送協会 (NHK)
 一般社団法人日本民間放送連盟 (JBA)
 一般社団法人電波産業会 (ARIB) (以上順不同)
- 協 力
 IPDC フォーラム、一般社団法人衛星放送協会、特定非営利活動法人映像産業振興機構、公益社団法人映像文化製作者連盟、一般社団法人カメラ映像機器工業会、公益社団法人劇場演出空間技術協会、3D コンソーシアム、全国舞台テレビ照明事業協同組合、超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム、特定非営利活動法人デジタルシネマ・コンソーシアム、一般財団法人デジタルコンテンツ協会、デジタルサイネージコンソーシアム、一般社団法人デジタルメディア協会、特定ラジオマイク利用者連盟、一般社団法人日本アド・コンテンツ制作社連盟、協同組合日本映画撮影監督協会、一般社団法人日本映画テレビ技術協会、協同組合日本映画テレビ照明協会、一般社団法人日本映画テレビプロデューサー協会、一般社団法人日本オーディオ協会、一般社団法人日本音楽スタジオ協会、一般社団法人日本ケーブルテレビ連盟、一般社団法人日本CATV技術協会、公益社団法人日本照明家協会、一般社団法人日本動画協会、一般社団法人日本舞台音響家協会、日本舞台音響事業協同組合、一般社団法人日本ポストプロダクション協会、一般社団法人VFX-JAPAN、一般財団法人プロジェクションマッピング協会、一般社団法人モバイルブロードバンド協会 (50音順)
- 海外パートナー

- 運 営
 一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
 〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル
 電話: (03) 6212-5231 FAX: (03) 6212-5225



Table of Contents

Topics

- Guest Interview 1 06
 Ms. Marini Ramlan, Primeworks Studios
- Guest Interview 2 10
 総務省 大臣官房審議官 南 俊行 氏
- Guest Interview 3 14
 Mr. Jason Schugardt, Method Studios
 Mr. Stuart Farley, Double Negative Visual Effects
- Guest Interview 4 18
 慶應義塾大学 環境情報学部 村井 純 教授
- Guest Interview 5 22
 Ms. Rita Cahill, Visual Effects Society (VES)
- Guest Interview 6 24
 福島「八重の桜」プロジェクト
- Guest Interview 7 26
 総務省 大臣官房審議官 渡辺克也 氏
 Community Simul Radio Alliance (CSRA) 代表 木村太郎 氏
 IPDC フォーラム 代表 中村伊知哉 氏

Ceremony Report

- Opening Ceremony 30
- Reception Party 32
- Production & Creator's Night 34

Exhibition Report

- News Center Pick up 1 36
 アストロデザイン株式会社
- News Center Pick up 2 40
 池上通信機株式会社
- News Center Pick up 3 44
 ヒビノ株式会社
- News Center Pick up 4 48
 富士通株式会社
- Exhibit Map 52
 展示会場図
- Exhibitor List 56
 出展者一覧
- Online Magazine Headline 58
 Inter BEE online 掲載記事 (展示会レポート) サマリー

Forum Report

- News Center Pick up 5 78
 映像シンポジウム
- News Center Pick up 6 82
 音響シンポジウム
- News Center Pick up 7 86
 Japan Post Production Conference
- Programs 90
 プログラム一覧

Results

- Visitor Profile 98
 来場者アンケート実施結果
- Exhibitor Profile 101
 出展者アンケート実施結果
- Publication and Promotion 102
 来場者誘致プロモーション活動報告

視聴者にリーチする番組制作とは？ 次々とヒット作を生み出す 「仕掛け」の裏側

民放がすべて1社の傘下にあるという 特殊なメディア事情

東南アジアの中で、高い経済成長と遂げているマレーシア。国策でネットワークインフラの整備が進められ、2015年には地上波のデジタル放送が開始される。

そんなマレーシアのメディア事情はちょっと特殊だ。TV1、TV2が国営のテレビ放送局で、TV3、ntv7、8TV、TV9の4局が民放。だが、これら民放4局は全てメディアプリマという会社の傘下なのだ。テレビ局以外にも、紙媒体、ラジオ局、デジタルコンテンツ制作などの会社を擁し、大規模な事業展開を行っている。

そのメディアプリマの子会社で、各局に向けたコンテンツの制作のほか、アジアのTV、映画などの配信を行っているのが、プライムワークススタジオだ。ソーシャルメディアとの連携などでヒットコンテンツを次々と生み出している。

こうしたニューメディアの責任者であるマリニー・ラムラン氏に、マレーシアのコンテンツ産業について、話を伺った。



HEAD, CONTENT INNOVATION PRIMEWORKS STUDIOS
Marini Ramlan
マリニー・ラムラン氏

■マレーシアのテレビマーケットと 視聴者に求められるもの

マレーシアでは、全土に放送がされているテレビ局は、TV3、TV9、TV2、TV1に加え、ケーブルテレビ各局といった構成だ。

なかでも、メディアプリマ傘下の局が高い視聴率をシェアしており、TV3が33%、TV9が10.5%と圧倒的。都市部では8TVやntv7も放送されるが、こちらも圧倒的なシェアを収めている状況だ。

そういった背景には、各局がビデオ、IPTV(ネットワークストリーミングサービス)、紙媒体、ソーシャルメディアをサポートしている点大きいという。当然、コンテンツ制作を担当するプライムワークスには、それらさまざまなプラットフォームをサポートするように求められる。なかでも、今一番需要があるのは、インタラクティブコンテンツだ。

そういった中で、プライムワークスでは2010年、テレビ放送の補完的な位置づけとして、『tonton』というサイトを立ち上げた。グループ会社である民放各局のストリーミング放送だけではなく、オリジナルの映像コンテンツも発信しており、現在までに330万まで契約者数を伸ばしてきている。

これら新たなメディアの責任者をしているのが、マリニー・ラムラン氏だ。自社に著作権を持つコンテンツの開発を行うほか、

ディストリビューターとして良いアニメーションのコンテンツを探すなど、多彩な仕事を行っている。

■Webから生まれたヒットコンテンツ

補完的的位置づけでスタートした『tonton』は、その後、独自のヒットコンテンツを打ち出し、メディアの在り方を大きく変えた。

その筆頭となる作品が『Autumn Di Hatiku』という作品だ。tonton内だけで見られるオリジナル映像作品で、韓国から来た学生が、マレーシアの女の子と恋に落ちるとい恋愛ドラマだ。この作品が成功した大きな理由の1つが、ソーシャルメディアとの連携だとマリニー氏は言う。

「最近の視聴者は、TVをただ見るだけでは満足できないので、コミュニケーションなり、マルチプラットフォーム的なもの考えたものにする必要がありました。そこで、Facebookやtwitterをはじめ、メディアプラットフォーム全てに対して、コンテンツを作りました。実際のロケ地の情報を流したり、アプリを作ったり……その中には、放送時に、7万5千のPVに達したインタラクティブコンテンツもあります。視聴者と双方向のコミュニケーションを図ることで、親しまれたのだと思います」

人気は爆発し、主役を演じた俳優のキム・ジンスン自体も大変な人気者に。ラジオ番組にも多く出演することになったという。

「韓国人の俳優に、みんなが恋に落ちたんです。本当に一大セ

ンセーションを巻き起こしました」

あまりにも人気が高く、ついにはテレビでも放送されることになった。Webオリジナルの1話5分(全28話)の作品だったにもかかわらず、作り方・見せ方次第でユーザーを大きく獲得できるものになったのだ。

「現在、シーズン2も予定しています。この逆転現象をとても誇りに思っています」



■現状のマーケットと今後のテーマ

現在、マレーシアで人気を獲得しているコンテンツは、主にドラマだ。tontonでの統計にはなるが、上位20はすべてドラマが占めているという。なかでも、家族との関係や恋を描いた作品や、コメディに人気が集まっている。

「ほとんどはマレーシア国内で作られたものですが、韓国やフィリピンのドラマも人気です。昔は日本の作品も人気があったのですが、『冬のソナタ』以降、すっかり韓国ドラマが人気になりました。買いやすい価格で提供されるために放送がしやすく、多く流しているうちに浸透したという感じですね」

そのためかK-POPも流行っており、イスラムのスカーフを巻いてるような女の子が、韓国語を普通に話したりするほどののだとか。

一方、新たに人気が出てきているカテゴリもある。アジアにおけるライフスタイルを知れるような番組だ。その1つが旅ものだという。

8TVで放送している『Hip-Hoppin' Asia』は、マレーシアのヒップホップスターであるジョー・フリゾーが、アジアの各都市を巡って音楽情報を伝える番組だが、こちらも大ヒット。ソーシャルメディア上で大きく取り上げられるなどして、関心が高まったのが大きな点だという。

「日本をテーマにしたエピソードも2回ほど作成しました。その時は、日本からもアクセスがあり、嬉しかったです」

このほか、俳優が8か国を巡って、各国であらゆるチャレンジをしていくという番組にも人気が集まっている。

こうした背景にあるのは、マレーシア市場におけるデジタルマーケットの多彩化だ。youtubeや、モバイルを使った視聴など、自分が見たいときに見たいものを見るというスタイルが定着してきているのだという。

伝統的なテレビのみならず、他の媒体も共に見るようになっており、それらすべての相乗効果によって新たな番組の形が生まれていっている。

そして、その先にマリニー氏が見据えているのは、世界に目を向けた番組制作の形だ。

■アジアのライフスタイルをベースに世界に向けた番組制作を

従来は、主にメディアアプリ用に番組提供を行っていたプライムワークスだが、それは国内に向けてのものでしかなかった。今後はマレーシア国外に向けて、新しいコンテンツの作成をしていきたいのだと、マリニー氏は言う。

「まずは、おなじイスラム圏であるアラブ諸国に向けて制作することを考えています。今後市場拡大が見込まれる部分ですし、そこで放送されたものはヨーロッパにも流れていくだろうと思います」

テーマに掲げるのは、アジアのライフスタイルだ。もちろん理



由がある。旅番組自体が国際的に人気が高まっている点や、最近の欧米の作品には、アジアモチーフのものが頻繁に取り入れられている点に注目したという。つまり、アジアの文化自体に関心が高まっている、とマリニー氏は考えている。

文化や神話・伝説、都市の姿。テーマとしては普遍的なものだが、その地域にいるからこそ作れる番組の姿がある。

そこで大事なのが「共同制作」だ。

「欧米諸国がアジアを紹介する番組を作っている、その地域のことを深く理解した作品を作ることは難しいと思います。自分たちがそれを作ることで、彼らと競争できるものが作れるのではないかと思います。しかし、そのためには世界の水準に達している必要があります。1社だけでは厳しいかもしれませんが、共同制作によってそれは可能になると考えます」





総務省 大臣官房審議官
南 俊行 氏

Inter BEE 2013 基調講演 4K/8Kの現状と展望 「関係者が一体となり強力な推進を」

Inter BEE 2013 (11月13-15日 / 千葉・幕張メッセ) では、4K 関連製品が一気に拡大し、新たな放送サービスへの期待の高まりが感じられた。4K / 8K 放送の実現に向け、総務省では、具体的な目標時期を示したロードマップを策定。また、4K / 8K 放送の普及促進を目的とするオールジャパンの法人組織「次世代放送推進フォーラム」(NexTV-F) が5月2日に総会を開き、発足した。フォーラムは、NHK、ソニー、NTT、スカパー JSATの4社が発起人となり、在京キー局5社、WOWOW、KDDI、NEC、パナソニック、東芝など21社が参加。全社から理事を出すフラットな態勢で、4K / 8K 放送の実施と調査・研究、普及推進を目的に活動が進められている。

総務省 大臣官房審議官の南俊行氏は、「放送サービスの高度化に向けて」と題した基調講演で、4K/8Kを中心に、放送サービスの高度化に向けた取り組みの現状と、今後の展望について語った。要旨を紹介する。



■ますます多様化する視聴者ニーズ 4K/8K実用化へコンテンツ制作支援も

今後のテレビに対する視聴者のニーズは、超高精細化による画面の美しさ、スマートテレビ化、ネットの動画配信など、多様になってくるだろう。2Kのデジタルテレビと比較して4K / 8Kの時代には、ユーザーのニーズに応えられる引き出しの多さ、さまざまな機能の組み合わせによって、受信機市場は非常に魅力的になると思う。

国内では、4K / 8K放送実現の道筋を付けるため「NexTV-F」を立ち上げてもらった。放送事業者、通信事業者、受信機メーカー、広告代理店、商社など、多様なプレーヤーに参加していただき、活動がスタートしたところだ。

4K / 8Kのコンテンツ制作は各社共通の悩みだと思うが、これをサポートするためのテストベッド環境も整える。WOWOWが『チキンレース』という4K制作のドラマを放送していたが、2Kによる視聴でもその質感の違いを感じた。

4Kで撮っておけば2Kコンテンツとしても利点が多いのではないかと。4K / 8Kで映像手法は革命的に進化すると実感している。4K / 8Kは実用化の直前になって一気に制作するのではなく、作りだめをしておいた方がいいと思う。

■NexTV-Fによる情報共有、 ローカル局の参加も期待

ただこれまでのトライアルの中で、4Kカメラはピント合わせなど、従来からの放送用2Kカメラとは使い勝手が異なる面があるということが分かってきている。NexTV-Fでは、メンバー間でさまざまな情報を共有しながら、カメラをはじめ、4K制作機器の使用面での精度を上げてもらい、プロの方々に馴染みやすい形への改善が進められている。

NexTV-Fは民放キー局が中心メンバーとなっているが、今後は、ローカル局にも参加してもらう必要がある。先般の民放大会でローカル局の社長と話をした機会があった。BSやCSで4K放送の視聴環境が進んでくると、ローカル局は取り残されてしまうのではないかという危機感を持つ経営者も増えている。

4Kコンテンツを撮りだめしておけば、後々、利点が多い。ローカル局も4K / 8Kの撮影手法や、関連技術の習得を早めに始めた方がいいのではないかと。その意味でもNexTV-Fではより多くの方々に参加してもらえるよう間口を広くしている。





■次世代の高機能テレビ、 B2Bなど領域を拡大する4K/8K

4K/8Kは、超高画質化、映像の美しさだけを追い求めているは成功しない。次世代スマートテレビと一体的に推進していくことが必須である。NexTV-Fでは、4K/8Kと次世代スマートテレビの連携を確保するための委員会も立ち上げている。

医療や設計の分野、美術館、監視カメラなど、BtoBへの展開も重要だ。そのための利活用委員会も新たに設けた。さまざまな領域で4K/8Kのトライ&エラーを実施する作業が始まりつつある。

■前倒しの実現へ向け資金面でも側面支援

総務省も資金面で支援する。テレビ放送が始まったとき、またカラー化したときも、総務省は資金的支援をしていない。今回、テストベッド構築などで31億円の補正予算を獲得して4K/8Kの推進を支援するのは、世界に先駆けて新しい放送を実現してもらうために、前倒しをお願いしているからだ。かなり厳しいスケジュールで開発を進めてもらわなければならないので、総務省も側面から支援していきたい。

平成24年度の補正予算は、急ぎよ要求することを決めて、何とか必要な額が確保できた。ただ、関係者からは、もっと大きな額を支援して欲しいとの声もあった。総務省では、この補正予算だけで支援を終わらせるつもりはない。来年度も継続できるように、こ

の分野で予算要求を行う。また、経済対策として、新しい予算も浮上してくる。ここでプラスアルファの予算が確保できないか、財政当局とも相談をしている。



■ブラジルW杯でHEVCのチップ化による 4K試験放送実現を

今回のInterBEE 2013では、NECブースに、ハードウェアによるHEVCに対応したリアルタイムエンコーダーが展示されている。これはまだチップ化されたものではないようだが、関連メーカーが協力し、1日でも早くチップ化を実現してもらいたい。

2014年のサッカーW杯ブラジル大会には、チップ化されたHEVC対応のリアルタイムエンコーダーやデコーダーが間に合い、4Kの試験放送が実施できるように尽力してもらいたい。

テレビ局での4K/8Kコンテンツ制作への取り組みも徐々に拡大している。先日、NHKが制作した8K作品を見る機会があった。『コーラス』という作品は、全編ロングショットの演出で、能や観劇を見ているような感覚だった。これまでとは全く異なる映像手法が生まれてくるという期待感を持たせるのに十分だった。

■国際標準化へ向け技術基準の策定作業

一方、総務省では、4K/8K放送の実用化に必要な技術基準の策定作業に着手している。4K/8K放送はまず衛星でスタートし、その後CATVで実現する予定であるが、現在、符号化方式や多重化方式を含めて、衛星での4K/8K放送を実現するための技術的条件の検討を進めている。

ITUなどの国際標準化の動向を見ながら、決して日本の技術が

ガラパゴスにならないようにしたい。技術的条件の検討においては、画素数やフレーム周波数、色域といった具体的な映像フォーマットの規格化も進めている。2014年3月には、衛星での4K/8K放送に必要な技術的条件をとりまとめ、その後、必要な規定の整備を進めていく予定である。

■自治体・教育現場における4Kコンテンツ利用、 医療での8Kカメラなど幅広い活用

4K/8Kは、放送関連設備はもとより、サイネージ、デジタルシネマ、さらには教育、設計・デザイン、医療、監視カメラなど、BtoBの分野でも有望な市場が多い。8Kを医療用カメラとして使いたいという要望も出てきている。自治体からも、4Kコンテンツを利用したいという意向がある。また、教育現場からは、電子黒板での4K/8K活用のニーズが出てきた。

4K/8Kの実用化には、次世代スマートテレビとの連携も重要だ。これはHTML5を搭載したテレビにおいて、放送からの制御信号をトリガーに、放送番組とスマートフォンやタブレットを連携するものだ。

サードパーティーであるアプリケーション事業者に参入してもらうことで、コンテンツのすそ野が広がる。放送局が放送リソースをオープン化すればするほど、多彩なコンテンツが提供されるようになるだろう。



Double Negativeはイギリスに拠点を構えるプロダクションで、『レ・ミゼラブル』『アイアンマン』など、主に大作映画を手掛け、監督との連携もしながら、幅広く映画制作に関わっている。

また最近では、小規模な独立系のアーティスティックな映画にも関わっているという。

現在はシンガポールにもブランチを構え、それぞれ1000人、250人という規模で運営されているが、16年前の設立時には20人ほどのスタジオだった。

シンガポールオフィスの3D部門でヘッドを務めているスチュアート・フェイリー氏は、マイクロエレクトロニクスのエンジニアだったという、異色の出身。大学ではサイエンスを学び、卒業後、イギリスの防衛省のためにレーダーの開発などを行っているエレクトロニクスの会社に就職。そこで4年勤務のうち、VFXの世界に足を踏み入れたのだ。

「クリエイティブなことをしたいと、独学でCGの勉強をしました。デモリールを作ってさまざまな会社にアプローチして、パインウッドフィルムに入りました。そこでジェリー・アンダーソンのTVシリーズのCGに携わったのですが、R&DにDouble Negativeが関わっていて、その縁もあって転職しました」

ジュニアスタッフとして採用されたのち、さまざまなパートや役職を経験した。以来12年、Double Negativeに務め、2013年の9月にシンガポールへ異動し、3Dのヘッドになって今に至る。

一方、ジェイソン・シュッガルド氏の務めるMethod Studiosは、ロサンゼルスを中心とするプロダクションだ。ニューヨークをはじめ、シカゴ、デトロイト、アトランタのほか、カナダ、イギリス、オーストラリアにオフィスを構えている。

設立から約13年。主にCMやミュージックビデオの制作を行っていたが、近年、大作映画に参入。『クラウド アトラス』『メン・イン・ブラック3』などを手掛けている。

ジェイソン氏自身は、バージニア州の大学で、ファインアートを学んだ。96年に映画業界で働きたいという夢をかなえるべく、教授の紹介もあってボストンのスタジオでテープオペレーターとして働き始めた。

その後、小規模なスタジオを渡ってステップアップし、パイプラインに関わるさまざまな仕事に携わった。そしてSony Pictures Imageworks、Weta、MPCなどで様々な経験をしたのち、Method Studiosに。現在、VFXスーパーバイザーを務めている。

ハリウッド依存型のVFX制作から グローバルな制作体制の移行へ

Method Studios
VFX Supervisor
Jason Schugardt
ジェイソン・シュッカルド氏

Double Negative Visual Effects Singapore
Head of 3D
Stuart Farley
スチュアート・フェイリー氏

大手VFXプロダクションのスーパーバイザーが VFX業界の現在と未来を語る

昨年、アメリカのVFX業界で激震が走った。『ナルニア国物語』『ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日』など、数多くのハリウッド映画のVFXを手がけてきたスタジオ、Rhythm&Huesが倒産したのだ。

潤沢な資金を背景に、VFXを多用した数多くの映画が作られてきた中、順調にしか見えなかったスタジオの倒産は衝撃的だった。また、『スター・ウォーズ』シリーズを手掛けてきた最大手とも呼べるべきスタジオであるILMが、ディズニーの傘下になるなど、VFX業界に様々な波が起きている。

そんな業界の現状とこれからの予測を、ハリウッド大作を数多く手掛ける大手VFXプロダクションのVFXスーパーバイザー2人に話を聞いた。





■VFXを取り巻く現在の状況、そしてこの先のマーケット

Q：Rhythm&Huesの倒産についてはどう思いますか？

スチュアート：業界全体が抱える複雑な背景や、国際的な経済情勢も大きく影響を及ぼしていると思います。ロンドンで仕事をしている中で、日常的に大事になっているのが、次のフィルムをどう効果的に、より速く、しかも予算通りに制作していくのか、ということです。予算内に仕上げるとい部分、以前よりも厳しくなっていると感じます。

ジェイソン：スタジオとして、より効率的に仕事をし、同時にクオリティを維持することが大事です。質の高い制作を続けていくことですね。そんな状況ですが、VFX全体としては非常に順調だと思います。世界的に見ても伸びているスタジオが多いですし、様々な市場でも売り上げが伸びていますね。特にアジアでは顕著です。

Q：アジアと言えばスチュアート氏はシンガポールのスタジオにいますが、いかがですか？

スチュアート：シンガポールに拠点を構えたのは5年前です。早い段階でアジアに進出したことで、その後の1年半～2年で、規模を拡大できました。取り組んでいる仕事の幅も広がっていますし、現地採用の有能な人材も育ってきていて、興行成績が高いハイエンドな仕事にも関わっています。投資は適切なものだったと感じます。

今後は、より多くの大作映画に関われるようにすることが課

題です。ロンドンのほうも、シンガポールのスタッフと能力に対して信頼性が増してきています。このスタジオでは、アジアをベースに、制作に関わっていきたくて考えています。

ジェイソン：アジアにオフィスはありませんが、世界各地にオフィスがあるため、グローバル化の影響を捉えることが出来ると思っています。また、様々な国や地域にオフィスを構えるメリットが2つあり、1つは税制面、もう1つは時差です。

クライアントからみれば、1つの窓口ですが、その中は各国とつながっているわけですから、24時間動いているオフィスと同等なわけですね。

スタジオ側にとっては、窓口があれば、どの国の仕事も受けられるので、さまざまな恩恵を享受出来るメリットがあるわけです。今までずっとハリウッドがVFX市場の中心であり続けたわけですが、現在はバンクーバー、そしてロンドンへ移ってきています。さらに2020年はアメリカの映画市場を中国の映画市場が抜かすだろうと言われてます。そういった時に対応できる準備をしていくことが大事だと思います。

Q：中国市場をどう見据えていますか？

ジェイソン：全世界の映画業界の売上は347億ドルです。その中でアメリカが108億、アジア全体で104億ドルです。アジア市場だけでもみると、今まで日本が2位でしたが、現在3位。代わりに2位に台頭したのは中国です。

中国の成長は非常に目を瞠るものがあり、向こう5年間で2万5千の劇場を作るといわれています。これは1日あたり13.5件の建設です。また、その設備はほとんどが4Kになるだろうと言

われていて、間違いなく巨大な市場になります。ハリウッドも関心を持っているに違いありません。

スチュアート：市場としての展開も面白いですが、どういう映画が人気なのかも大事です。昨年の1位は中国製の『Journey to the west』という映画でしたが、以降の5～6位はいずれもハリウッドで制作された『スーパーマン』『パシフィック・リム』などのVFX映画です。VFXに対する関心の高さも現れていると思います。

ジェイソン：中国では、国内の映画と競合しないように、海外映画の上映本数を制限しています。そのため、上限を気にすることなく参入できるように、多くの制作会社は中国の制作会社と提携して中国作品とすることで、その上限に触れないようにしようとしています。ところが、中国の視聴者に受けるようにストーリーを変えてほしいというオーダーが来ることもあり、難しい部分もあります。

■これからの映画、これからのVFXについて

Q：先程4Kの劇場という話がありましたが、今後解像度が向上していくと思われま。それについてはいかがでしょうか？

ジェイソン：かつては720×480のリアルタイム再生すら厳しかった時もありました。でもそれが普通になりました。2Kの時も同様です。4K、8Kのときも自然にできるようになっていくと考えます。

スチュアート：『バットマン』の制作時に、IMAX70という8K相当フォーマットの経験をしました。そうした経験を活用してい

たいと思います。

ジェイソン：iPhoneなどのメディアも出てきている中で、果たして映画とはなんだろう、という問題に帰ってくると思います。映画は解像度の問題ではなく、2時間のフォーマットのことを指すのかとか、TVは映画の30分版を指すのかななどです。

Q：VFXの未来についてどうお考えですか？

ジェイソン：今、とてもエキサイティングな時代と思っています。多くの技術が出てきており、仕事がやりやすくなったり、今まで出来なかったような取り組みが行えるようになってると感じます。

マーケットがグローバルに向かっていく中で、我々は相互にインスピレーションを与えられる関係になればと思います。例えば、中国が新しいマーケットとして浮上していく中、私たちが中国がインスピレーションを学ぶだけでなく、お互いに切磋琢磨することが出来ればと思っています。

私は、子どもの頃、日本のアニメを見て育ちました。だからこそこの業界に入って来たと思うのですが、同じようなことが起きていくといいなと思います。

スチュアート：ジェイソンさんも言ったとおりエキサイティングな時代だと思います。誰もがスタジオの規模に関係なく、まるで写真に撮ったようなリアルなものを制作していくことが出来る時代になっています。

そういったツールを手にするることによって、今まで難しいと思えた物語も伝えていくことが可能になっていますし、これからもさらになっていくと思います。

「HTML5の時代 テレビ局は動画配信のキープレーヤーに」

慶應義塾大学 村井純教授 インタビュー

Inter BEE初日の11月13日、「HTML5時代における動画配信の最新動向」と題するセッションが行われた。慶應義塾大学 環境情報学部長・教授 村井純氏は、同セッションの一環として催されたパネルディスカッション「HTML5時代の動画配信の可能性と技術課題」のモデレータを務めた。

日本におけるインターネットの黎明期から基盤技術づくりに関わり、ネット利用の可能性を自ら切り開き、啓蒙してきた。日本のインターネットの実質的な起源とされる「JUNET」(ジェイユネット)は、村井氏が個人的なデータ移動のために慶應義塾大学と東京工業大学間の接続をしたことが始まりとされている。

また、情報通信における日本の役割や規格のあり方などについても、さまざまな場面で方向性を示してきた。2008年に総務省 情報通信審議会にて提案された日本のデジタルテレビ放送の私的利用に関する運用ルール「ダビング10」の策定にも携わっている。

現在、IPTVフォーラムの理事長として、放送とIPの融合によるHybridcastを始めとした新しい放送やインターネットサービスの標準化に関する活動にも注力するなど、放送をはじめとしたコンテンツビジネスとインターネット、IPとの連携の推進役として各方面で活躍中だ。

今回のHTML5の講演前に、村井教授にインタビューし、HTML5の現状と今後の展開等について話を聞いた。



「映像コンテンツを持つ放送局が HTML5でネットの主役になる」

■放送事業者にとって、
HTML5を用いた動画配信の
位置づけ、重要性とは何か。

「インターネットの普及・高速化により、WEB上で動画の配信・視聴をする機会が急激に増えてきている。ネット上のトラフィック量とは何なのかを調べてみると、その80%以上はビデオ映像ということになる。需要が急激に映像をどこでも、共通に扱うためにもHTML5の規格策定が重要になってくる」

「HTML5はWEBコンテンツの規格で、現在、動画配信の時代に対応した新しいアーキテクチャーを含めて2014年の正式勧告を目指している。映像に関してはプラグインを必要とせず、ブラウザ自体で動画や音声、グラフの描写などが可能となる。ブラウザでは、最新のマルチメディアをサポートする言語として、特に、JavaFX や Adobe Flash、Microsoft Silverlight などのリッチインターネットアプリケーションと呼ばれる映像コンテン

ツの再生・視聴の機能が実装されている。すでに知られているとおり、Adobeは、モバイルブラウザ用のFlash Playerの開発は中止し、FlashからHTML5への変換ツールをリリースするなど、制作環境においてもHTML5移行への積極的な動きが出ている」

「民放のテレビ局はこれまで、CMの収入を主体としたビジネスモデルで事業を行ってきた。一方ネットの世界では、よりダイレクトに消費者に接触する形での広告ビジネスを展開してきている。これは従来のテレビCMとは異なる収益構造だ。今後、動画配信の利用がさらに進んでいけば、映像による双方向のリアルタイムコミュニケーションが本格展開していく。そうした中で、放送におけるコンテンツの構造自体が変わってくる可能性がある」

「また、HTML5によって映像による動画配信の視聴環境がさらに拡大することになれば、テレビ局のビジネスモデルにも変革を促す可能性があり、ネットの

視聴は、テレビ局にとってより重要度を増すだろう。すでに今、高性能なスマートフォンやタブレット端末が普及してきたことで、生活者が視聴する動画端末は、テレビ受像機だけではなくってきている。

スマホやタブレット、デジタルサイネージなどといった多くのテレビ以外の表示装置で、我々は映像コンテンツをテレビ以外のデバイスにおいても、日常的に目にする時代になった」

「映像視聴が可能なデバイスがテレビにとどまらず、拡大しつづければ、新しい映像コンテンツの創造への需要も当然高まるだろう。映像コンテンツを多く制作し、常に高い品質に挑戦する能力を持ったテレビ局の位置づけは、今後さらに重要になってくるはずだ。放送局、これまでの事業形態に固執せず、ネットのビジネスモデルの変化にも柔軟に対応していけば、HTML5ブラウザ時代におけるテレビ局は、動画制作と配信のキープレーヤーとなることができるだろう」



慶應義塾大学 環境情報学部長・教授
村井 純 氏



「多様化するテレビの視聴形態・デバイスに最適なサービス提供が可能に」

■技術・運用面での課題と解決へ向けての展望は？

「HTML5の策定によって、映像そのものの配信の仕組みが変わってくるだろう。技術的な面からも、これまでよりネットへの映像動画を配信しやすくなる。デジタル化時代の今は、低価格のテレビ受像機であっても、それなりの機能を備えているようになってきている。HTML5は、安価なテレビであっても最低限十分な処理能力を発揮できるブラウザ技術が発展する方向で標準化を行っている」

「スマホやパソコン、タブレットなど、端末によって処理スピードは違う。また、扱えるデータ量も違ってくる。これからのテレビ放送は、こうした多彩なデバイスに向けて提供していくことが前提となるだろう。そのとき、これまでの放送における、あまねく同じサービスを提供する、というスタイルから、それぞれのデバ

イスに最適なサービスを提供することが求められている。HTML5こそ、そうした多様なサービスを提供するためのものだ。HTML5を利用することによって、デバイスの性能や視聴の形態に最適なサービスを提供できるようになる。また、テレビ番組に、より高い付加価値をつける、という面でもHTML5は、放送局に新

たな方向を提示できる。今後、4K/8Kの放送を視聴することを想定して大画面のテレビが登場してくる中で、テレビのサイズや性能・機能の幅が広がることになる。そのとき、ハイエンドのテレビで処理できる映像にプレミアムな機能や画質を付加するという方向も考えられる」



「デジタルサイネージを社会インフラとして広範に活用できる可能性も」

■デジタルサイネージなどともHTML5は親和性が高いようだが。

「HTML5によるコンテンツ配信は表示する端末を選ばないので、デジタルサイネージの世界にも劇的な変化を与えるだろう。2011年3月11日、東日本大震災の発生時、鉄道などの交通網がストップしてしまったために東京都内を中心に多くの帰宅困難者が発生した。その際に駅前などの繁華街に集まった人々が頼りにしたのが、街頭に設置されている大型ビジョンの情報だった」

「東京駅・丸ビルは、帰宅困難者への宿泊場所の提供と同時に、館内のLEDや液晶などのデジタルサイネージをすべて震災関連情報に切り替え夜通し放映を続けたという。新宿のアルタビジョン、北千住、新橋など同様の対応をとった大型ビジョンも多いと聞く。しかし渋谷な

ど多くの繁華街のビジョンではあれほどの大災害だったにもかかわらず通常のCM放送を流しているままで、災害時には何の役にも立たなかったという声も耳にしている。このように、これまでは大型ビジョン事業者の対応によって、温度差のあったデジタルサイネージだが、各業界団体などが災害対応時の標準化を図り、災害時には迅速に的確な情報を町のビジョンに表示していこうとする動きが高まっている」

「東日本大震災ではまた、首都圏のターミナル駅の公共デジタルサイネージの前には、災害情報を求める人々が殺到・滞留することで事故が発生しかねない状況も発生した」

「そこで大切になるのがHTML5の規格だ。HTML5でコンテンツを配信すれば、災害時に通信が不安定になった場合、サイネージと連動したWi-Fiに接続することで、サイネージに表示される災

害情報をスマートフォンで閲覧・保存できるようになる。こうした機能が、専用アプリがなくても、HTML5対応のウェブブラウザが内蔵されていれば、スマートフォンで利用できる」

「HTML5によって、メーカーや規格の異なる大型ビジョン間でも、簡単にかつ正確に情報の伝達や相互の情報交換が可能になり、さらに、携帯電話などが通じにくい環境下でも、サイネージの災害情報を取得できるようになる」

「他のメディア、テレビやネット、ラジオ、自治体や国などが運営する災害情報などとの連携もこれまで以上にスムーズに運ぶことになるだろう。このようにHTML5が標準化されることでこのような社会インフラに与える大きな効果が生まれてくることになる。社会インフラの整備にとってもHTML5は重要な規格となることだろう」



VFXのプロフェッショナルによる情報・振興機関 『Visual Effects Society』へのいざない

アメリカのVFX業界を中心に、VFXに関わる様々なプロフェッショナルたちがグローバルに協力し合うことを目的として、非営利の専門的振興機関として設立され、活動しているのが、『Visual Effects Society』——VESだ。

その目的は、世界的な専門家のコミュニティを作ること。知識を結集し情報を共有することで、教育や認知度を向上させ、自身の仕事においてもより成長することが大きな理念だ。会員の顔ぶれは多岐にわたっており、アーティストをはじめ、スーパーバイザー、プロデューサー、エンジニア、プロモーションの専門家、映画業界の経営者など、世界中からさまざまな人々が参加している。

日本にも会員はいるが、現在24名。まだまだ少ないといえる状況だ。そんな日本のVFX業界に向けて、VESを啓蒙するべくリタ氏が訪れてくれた。



■VFX業界で働く人のために最適な機会を創造する

「VFXは、映画、テレビ、アニメ、ゲーム、Webコンテンツ、アミューズメントパークのライドなどエンターテインメントのコアを担っています。事実、世界中で歴代最高の興行成績を上げた映画のほとんどは、VFXやアニメーションを駆使しているんです。

しかし誰にでもVFXが作れるわけではなく、才能がある熟練したアーティストが必要です。コンピューターはパレット、ソフトは筆にすぎないと言えます。

これらを担う業界の人々の全体の底上げにつながるよう、教育や受賞など通じて活動しているのがVESなんです」

現在、会員数は2700人余り。世界32か国から参加しており、そのうちサンフランシスコ、バンクーバー、トロント、モントリオール、ニューヨーク、ロンドン、オーストラリア、ニュージーランドの8か所には、セクションと呼ばれる支部が設けられている。

アメリカ国内が中心ではあるもののそれだけではなく、国際的イベントを開催しているほか、上映会、セミナーなどを行い、会員やエンタテインメント業界全体の向上、教育に努めている。

例えば、2012年度だけで250回以上も上映会を開催。ただの上映会ではなく、『ゼロ・グラヴィティ』『キャプテンフィリップス』など最新の作品を上映したうえ、直後にその作品のスーパーバイザーやプロデューサーが講演を行っている。一番最新の映像や技術について制作者本人から話を聞ける、そんな場をVESは提供しているのだ。

また、VESサミットと呼ばれる交流会を毎年開催。新しいプロジェクトを探しているクリエイターや経営者が集まり、新たなビジネスにつながるよう促している。

このほか、CGアーティストのための実践的な照明技術、求職活動の準備・デモリール履歴書の検討、最善の雇用条件の交渉、ローランド・エメリッヒと学ぶVFX、などなどステップアップを図る人のためのサポートも行うなど、活動は非常に多岐にわたっている。

■最大のイベントVES賞

VESの活動のなかで、一番重要な位置を占めているのが「VES賞」だ。

「VFX、アニメーション、ゲームのプロフェッショナルは、コンテンツの創作に欠かせないクリエイティブな存在であり、エンタテインメントの未来を作り出している」というコンセプトのもと、ライブアクション映画、アニメーション映画、テレビ番組、CM、ゲーム、スペシャルヴェニュー、学生賞など全部で24部門の賞を設け、年に一度表彰式が行われている。

例えば、VES賞のなかの「ライフタイム・アチーブメント賞」部門では、2004年度にジョージ・ルーカス、2008年度にスピルバーク、2010年度はジェームス・キャメロン、2011年度はクリストファー・ノーランといった、そうそうたる顔ぶれが受賞し、式に参加しているのだ。

このVES賞、ノミネートは会員である必要はなくWebを通じて誰でも行え、毎年11月下旬がエントリー期限だ。投票は会員のみで、1月の末にオンラインで行なわれ、2月の半ばに授賞式が開催さ

れている。

こうして精力的に活動を行うVESだが、実はすべてがボランティアベースだ。「VESに何をやってもらうかではなく、自分がVESに何が出来るかを考えよう」が信念で、会員自らの自主性が重んじられているためだ。



■日本支部に向けて

現在のところ日本では、残念ながらVESの活動は活発ではない。まだ、会員が24名と少ないこともその理由の1つだ。

VESでは、会員が50名を超えると、支部を設立できるようになる。そうすると、日本での活動も活発に行える可能性が出てくる。

VESへの入会条件は、まず第一にVFXに関連した仕事に5年以上従事していること。次に、現会員2人らの推薦状が必要となる。

日本会員が50人を超え、日本支部が出来上がれば、日本のVFX業界も新たな発展を迎えることができるかもしれない。



Visual Effects Society
International Outreach Officer
Rita Cahill
リタ・ケイヒル氏



NHK 大河ドラマ『八重の桜』を中心に広がった 東北復興にかける想い

2013年に放送されたNHK大河ドラマ『八重の桜』。幕末～明治期の日本、会津藩で砲術師範をする山本権八の娘・八重の生涯を描いた作品だ。

このドラマの主な舞台の一つが福島県だ。2011年3月11日に発生した、東日本大震災によってダメージを受けた場所の一つということもあり、番組を介して、東北復興の手助けとなるようさまざまなアプローチがされた。

そうした活動の中心となっているのが、番組の制作統括(エグゼクティブプロデューサー)である内藤慎介氏だ。ドラマの枠を超えて支援の輪を精力的に広げている。

どのような想いで番組制作に携わっているのか、またどのようなことが行われているのか…、こうしたプロジェクトの一環を支えるNHKエンタープライズの菅山氏、『八重の桜』の舞台である会津若松市の職員・江川氏も含め、復興活動に向けた想いとその内容について聞いた。



会津若松市
八重の桜プロジェクト対策室長
江川 忠氏

■『八重の桜』に決まった本当の理由

そもそも2013年の大河ドラマは、福島を舞台にした作品の予定はなかったのだという。きっかけとなったのは東日本大震災だった。

内藤氏は、東日本大震災の前日まで、岩手にいた。ドラマの撮影を行っていたためだ。3月11日は移動日で東京に戻っており、そこで撮影地の大事態を知った。

8割まで撮影を終えていたのだが、制作は中止。だが内藤氏はドラマのことよりも現地の人々が気になり、被災地に足しげく通った。そこでさまざまなことに直面したという。

「みなさん力強いんです。復興に向けて大変ですねという言葉に、“いえ、今から始まったんです”と返している。希望を失ったような子供たちも、お父さんが復興に向けて頑張る姿を見て、目の輝きを取り戻している。想像できないほどつらい経験をしているの



株式会社 NHK エンタープライズ
企画開発センター 事業開発 部長
菅山 明美氏

に、立ち上がる力のすばさ、強さ。それらを目の当たりにしました。逆に、制作途中だったドラマのことも気にかけていただきましたし、楽しみにしてられた。そこで、映像で協力できることがあるのだと感じました」

この未曾有の災害、そして復興に対して映像で何ができるのか、放送局として貢献できることは何か。それらを考えて、一気に『八重の桜』に舵を取ったのだという。

すべてを失ったという部分では、会津藩も同じ。そこから復興していく人々の力強さ、正しいことは正しいと進んでいく精神力。それらの思いを込めてドラマは作られることとなった。

制作にあたって会津若松市は全面的に協力。もともと産学連携を担当していた会津若松市職員の江川氏は、『八重の桜』プロジェクト対策室室長として、番組制作を様々な形でバックアップした。

『八重の桜』では、映画のレベル以上にVFXが多用されている。当時の風景・状況、文化、激しい戦闘などを表現するために、驚くほど多くのカットがVFXで生まれている。そういった部分にも市として協力をした。

「会津大学はコンピュータ理工学の単科大学です。そこにモーションキャプチャのスタジオを持っておりまして、土佐兵、会津兵が戦う長命寺のシーンは、ここで作られたデータを使用させていただきました。産学連携で、学生もアクターとして参加させていただきました」

このほか、鶴ヶ城での戦闘で、カメラがフライスルーするカットがある。城はCGで作られたものだが、元となったワイヤフレームのデータは地元の企業が作成したものなのだ。

■ドラマの枠を超えて広がることで 復興への道も広がっていく

ドラマ外では、NHKエンタープライズが鶴ヶ城にプロジェクトションマップを行い、地元の人々に楽しんでいただいたり、観光資源としての支援を図った。『鶴ヶ城プロジェクトションマップはるか』と題されたそれは、地元や城の歴史、そしてこれから映像に込めたものだ。

「鶴ヶ城は地元の人々が非常に愛している、思い入れの深い建造物です。下手なものを上映すると“落書き”として捉えられてしまいます。地元をよく知るところから始めました。また坂本龍一さんの楽曲に負けない映像にしなければならないプレッシャー



日本放送協会
制作局第2制作センター(ドラマ番組部)制作統括
内藤 慎介氏

もありました」

と言う菅山氏。城という複雑な形状に、どれだけマッチした映像を作れるかも大きな課題となった。試行錯誤も含め準備に2～3か月を費やしたという。

結果、3月9日・10日に行われた上映では、想像を超えたものでい数の人々が鶴ヶ城に訪れてくれた。入場制限が追いつかないほどの人出となった。

大好評だったことを受け、2014年の3月15～16日、19日～23日にわたって再び上映されることが決まっている。

こうしたさまざまな活動以外に、内藤氏は『fukushima さくらプロジェクト』も推進している。森林総合研究所が開発した新種の桜を福島復興のメッセージとして全国に植樹、花を咲かせる頃まで東北の復興を忘れないでほしいという思いを込めたものだ。

「忘れないことが大事なんです。ドラマが終わっても、桜は育ち続けます。それを見守っていただいて、復興に思いをはせてほしい。『八重の桜』が何かをしたわけではなく、復興とともに一緒に歩んだんです。ドラマが終わった後も歩いていきます。みなさんも参加をしませんか？ そういう思いでいます」





IPDCで放送通信連携の課題解決へ 東京オリンピックに向けて進むサービス開発

日本の地上デジタルテレビ放送は、今から10年前の2003年12月1日に開始し、2011年7月24日正午に地上アナログテレビ放送が終了。テレビ放送のデジタル化が本格化した。これにより、これまで地上アナログテレビ放送として利用していた一部の帯域が「VHF帯の周波数跡地」となった。このうち、VHF-High帯(V-High)の207.5MHz～222MHzの周波数帯が、全国ブロック向けV-Highマルチメディア放送として主に携帯端末向けのデジタル放送に利用されることになる。具体的には、2012年4月1日から「モバキャスト」(NOTTV)と呼ばれるサービスが開始された。このV-Highに対して、VHF-Low帯(V-Low)の99MHz～108MHzの周波数帯は、地方ブロック向けVHF-Low帯マルチメディア放送とデジタルコミュニティ放送の二つの放送に利用される計画が進められている。携帯端末向けデジタル放送では、放送波にIP(Internet Protocol)パケットを乗せて一斉同報的なデータ配信を行う仕組みとして「IPDC(IP Data Cast)」が標準規格に盛り込まれている。

Inter BEE 2013の初日である11月13日の開幕とともに、クロスメディアシアターで開催されたセッション「2020年にオリンピック・ラジオを立ち上げる」は、V-Low デジタル・コミュニティ放送協議会とIPDCフォーラムの共同企画による催し。総務省 大臣官房審議官(情報流通行政局担当)の渡辺克也氏、コミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス(CSRA)代表で、逗子・葉山コミュニティ放送株式会社代表取締役の木村太郎氏、IPDCフォーラム代表で、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授の中村伊知哉氏の3名が登壇し、デジタル放送時代における放送サービスの多様性について語り合った。



CSRA 代表/
逗子・葉山コミュニティ放送株式会社代表取締役
木村 太郎 氏



総務省
大臣官房審議官
渡辺 克也 氏



IPDCフォーラム代表/
慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授
中村 伊知哉 氏

■魅力あるリアルなサービスの提供へ

今年のInter BEEでは、4Kとともに、デジタル放送の利点を活用した新たな放送についての話題がさまざまな形で紹介された。IPとの連携が進むことにより、放送の多様性、サービスの高度化がどのように進むかを見ることのできる貴重な機会だったといえる。

クロスメディアシアターにおける前述のセッションとともに、今回のInterBEEでは昨年に引き続き、IPDCフォーラムによるIPDC関連の展示が行われたほか、V-Low デジタルコミュニティ放送協議会による災害時の緊急連絡などデジタルラジオの各種ソリューションが紹介された。さらに、IPDCに関しては、DXアンテナが「IPDC WORLD 2013」をテーマに、IPDC技術を用いた展示を「ライフラインコーナー」「次世代伝送システムコーナー」「モバイル次世代放送コーナー」の3つのコーナーでソリューションを紹介した。また、NTTエレクトロニクスとアストロデザインも両者のブースでIPDCを使ったLive配信のデモを実施している。

CSRAもブース出展をし、デジタルラジオのデモを実施。木村氏も2日間にわたりブースに参加した。いずれも、V-Low帯の新しい放送サービスへ向けての取り組みとして技術面、サービス面での模索が進められているとともに、災害時の貴重な情報源としても注目を集めている。

こうした、次世代の放送のあり方の一つとして、通信と放送の融合による利点を生かす役割として、最も期待されているのがIPDCだろう。その推進役がIPDCフォーラムだ。代表の中村伊知哉氏

は同フォーラムの狙いについて、次のように説明する。

「地上デジタル放送の整備が開始されてから議論されてきた放送通信連携は20年が経過したが、明確な姿というのが見えてこない。そこで、我々は放送局側のアプローチとして、通信技術であるIPプロトコルを取り入れて、新しいサービスを開始しようと思い、各種課題を解決するために民間任意団体として5年前にIPDCフォーラムを立ち上げた」

「色々な実験やサービス開発を進め、その成果を今回のInterBEE 2013のIPDCフォーラムブースでも展示している。iPhoneやiPadへのストリーミング配信や、マルチスクリーン型放送研究会の展示でもあるように、実サービスとして提供できるところまでようやく来たかなと実感している。マルチスクリーン型放送研究会では、民放37社が集まり『セカンドスクリーン』のプラットフォームを作るべく研究をしている。また、日本ならではのサイネージとして、放送とサイネージを組み合わせたサービスも検討しており、この辺りを狙っていきたいと考えている」

コミュニティ・サイマルラジオ・アライアンス(CSRA)は、コミュニティFMの自主制作番組をネットで配信するサイマルラジオの全国組織。FM放送波は、電波の性格上、視聴範囲に限られるが、IPで配信することにより、より広い地域での視聴を可能とした。こうしたIPでの展開により、コミュニティFMは、災害時における地域密着型の情報メディアとしても注目を集めている。CSRAは現在、IPDCの方式を採用している。

CSRA代表/逗子・葉山コミュニティ放送株式会社代表取締役

の木村太郎氏は、コミュニティ放送において、IPDCを採用する以前、「当初我々はデータカールセル方式を使って防災情報を配信することを考えていた」と述懐する。しかしその後、「IPDCを使ったかどうかという話が中村伊知哉氏からあり、IPDCが我々のやりたいことに対して非常に使いやすいこともあって、手段としてIPDCを利用することにした」と経緯を説明した。

木村氏は、IPDCを評価しつつ、「IPDCとデジタルコミュニティラジオにおける最大の課題」として、「(IPDCで)デジタルコミュニティラジオとして、(他のメディアとの差異化を図るためのコンテンツとして)何を届けるか」を掲げる。携帯電話にも提供が可能なIPDCであるが故に、その他の多くの放送・配信コンテンツと比べた独自性が求められる。また、ラジオでありながら、技術的には映像の配信も可能な点で、コンテンツをデザインする際の選択肢は大変に幅広い。「映像ソースは世の中に沢山あり、映像圧縮技術も進化しているため、ラジオだからといって映像も無視できない」と木村氏は話す。

■双方向型がもたらす新たなビジネスモデルの可能性

木村氏は、IPDCによるビジネスの可能性にも期待を寄せる。

「我々がサービスやビジネスモデルを考える中で、必要な制度があれば、作ってあげればよいと思っている。例えば、IPDCを使うとスマートフォンユーザー向けにピザの宅配サービスというのも簡単にできてしまうと思う。また、自動車に標準搭載しているカーナビにあるコンシエルジュ機能もIPDCによって、コミュニティ放送として実施が可能だ。音声で問い合わせるとレストランの紹介や予約、さらにそのお店までのルート案内を提供するといったことが技術的にはできる」(木村氏)

こうしたカーナビのV-Lowマルチメディア放送対応によるビジネスへの期待もあるが、「より広くV-Lowマルチメディア放送を普及させるためには、スマートフォンだと考えている」と木村氏は言う。中村氏もV-Lowマルチメディア放送の普及には、「魅力ある、目に見えるリアルなサービスの開発と、ビジネスモデルが重要」であり、「ビジネスが動いているスマートフォンをどう取り込んでいくかが大事だと思っている」と説明した。

木村氏は「最近の広告(CM)は成果報酬型がほとんどになってきている。双方向サービスはビジネス的に大事だ。儲かる仕組みを考えていかないといけない」と説明し、V-Lowマルチメディア放送の双方向対応の重要性と、それに対応した収益モデルの確立の必要性を説いた。

■2020年の東京オリンピックに向けた取り組み

中村氏は、2020年の東京オリンピックに向け「全世界から東京にこられる方々に、放送できめ細かなサービスができないかと考えている」と述べ、オリンピックへ向けたIPDCの活用法を検討していることを明かした。その「一つのあり方」として、木村太郎氏が提案した「オリンピック・ラジオ」を挙げる。

また、災害時の情報共有の手段としても、IPDCが役立つと指摘する。「コミュニティ放送とIPDCを組み合わせると防災に使えるため、全国で大きな危険なことが起きても確に情報を届けるようにする」(中村氏)

具体的には、IPDCを放送で利用することにより、マルチスクリーンを活かした情報表示や、スマートフォンや防災ラジオ、4K/8Kサイズのテレビなど、多様なメディアに対して、地域の情報化や地域の防災化にも役立てる情報を的確に提供できる」(中村氏)

総務省大臣官房審議官の渡辺克也氏は、こうした中村氏の説明に賛同し、「災害対策の先進国として、オリンピックへ向けたメディア対策は、日常生活における国民の安心・安全とともに重要なテーマでもある。海外から来日する多くの方々にも、安心して東京オリンピックを楽しんでいただき、万一の災害時にも対応できる

態勢が必要。事前の情報発信も含め、マルチランゲージでの情報発信はとても意義がある」と指摘する。

渡辺氏はさらに、全国の郵便局を利用したパブリックビューイングについて、以前、総務省の南審議官が述べたことを例に挙げ、「全てをIPDCで放送するというのではないが、全国の郵便局をパブリックビューイングの拠点として、オリンピックの8K視聴環境を整える。これにより、全競技を全国の国民が8Kでリアルタイム視聴でき。同時に、IPDCの機能を用いれば、全国のパブリックビューイングの拠点で、安心安全な防災情報を流す機能を提供できる」と説明した。

渡辺氏はさらに続け、「8Kの番組の提供方法については、技術的な面も含め、現在の地上波放送・衛星放送の可能性の検証とともに、インターネットを活用して伝送していく仕組みについても検討していくことが重要になるだろう。また、郵便局だけではなく、東京以外の地域でも見ることができるようになるためにもインターネットを活用していくことも議論が必要と思っている」と語った。





Inter BEE 2013 オープニング 過去最高の昨年をさらに上回る 918社が出展 2020年へ向けての序奏が始まる

11月13日、音と映像と通信のプロフェッショナル展「InterBEE 2013」が開幕した。開催に際して、国際展示場中央エントランスにおいて、開会式が開催され、関係者、来賓が集い、開会宣言、祝辞、テープカットが行われた。

冒頭、主催者である一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）の設案哲理事が挨拶をした。Inter BEEを「米国のNAB、欧州のIBCと並び、世界トップレベルの映像、放送機器、音響機器、照明機器などが一堂に会するアジア最大級の放送機器展」と位置づけ、「今年で49回を迎えるInterBEEは、出展企業数が過去最高

の918社。うち海外からの出展も30カ国・地域から過去最高の536社」と述べ、昨年の最高記録をさらに上回ったことを報告。「今年の展示会への国内外から関心の高さが反映された」と強調した。（昨年は出展企業数が871社、うち海外から491社）設案理事は最後に「本日から3日間で3万人の高感度ユーザーをお迎えする予定。出展企業、来場者にとって、今回のInter BEEが情報交流やビジネス創出の場として、その役割を果たし、一年に一度のこの機会を効果的に活用され、十分な成果を得ていただきたい」と締めくくった。



テープカット登壇者(左から)
金山 一宏 委員長
2013年国際放送機器展実行委員会
ジョン・アイヴ氏
Director of Business Development & Technology, IABM
間宮 淑夫 氏
経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長
南 俊行 氏
総務省 大臣官房審議官(情報流通行政局担当)
松井 房樹 氏
一般社団法人電波産業会 専務理事
設案 哲 理事
一般社団法人電子情報技術産業協会

■総務省 大臣官房審議官(情報流通行政局担当)
南 俊行 氏

「東京オリンピックは放送業界・ 機器業界にも大きな転機に」



続いて、来賓として開会式に参加した、総務省 大臣官房審議官(情報流通行政局担当) 南俊行氏と、経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長の間宮淑夫氏が祝辞を述べた。南氏は、昨年のInterBEEの開会式にも来賓として参加し、地デジの移行完了や、放送サービスの高度化へ向けた取り組みについて決意を述べたことを回想し、その後1年のうちに、具体的に4K/8K放送に関するロードマップの策定や、NexTVフォーラムの設立、補正予算の成立など、急展開で進めてきたことを示した。続いて「本格的に動き出そうとしていたところに飛び込んできたのが、2020年の東京オリンピック開催という、大変嬉しいニュースだった」と述べ、「東京オリンピック開催の2020年は、ある意味で放送業界や関連する放送・映像機器業界にとっても、大きな転機となる年になるのではないかと指摘した。1964年の東京オリンピックも「放送にとって非常に大事な年だった」とし、マラソンの衛星中継による国際放送などを例にあげ「次の二回目の東京オリンピックは、パラリンピックも含め、地上波だけでなく、BSもCSも、あるいはケーブルもIPTVもインターネットも、いろいろな媒体で、24時間にわたり、感動できるコンテンツが提供されるだろう」と述べた。最後に「今回のInter BEEに参加される方の熱気が違うと感じている。4K/8Kに向けた関係者の皆さんの技術と意気込みを競い合うことで、7年後、多くの方に勇気と感動を与えられるすばらしいコンテンツを提供していただきたい」と締めくくった。

■経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長
間宮 淑夫 氏

「放送技術の進歩が 社会の仕組みを変える可能性も」



経済産業省 商務情報政策局 情報政策課長の間宮淑夫氏は冒頭、「昨今、放送のありかたは激動の時期を迎えている。双方向メディアの登場、新しい端末の普及、4K/8Kテレビの登場などにより、新しい放送のあり方が模索されている。こういった状況の中、InterBEEの重要性はますます増してきている」と述べた。また、「中長期的な放送のあり方を考える際、キーファクターとなるのが2020年、東京オリンピック」とし「世界中にオリンピックの感動を存分に届けるためには、高画質で臨場感のある映像、高音質な音響、これまで培ってきた技術が必要。経産省としては総務省と協力し、技術革新を生む研究開発の促進、設備投資を促進する税制導入、ITのさらなる利活用のための環境整備、クールジャパンを通じた魅力あるコンテンツの育成等に今後も傾注していく」と意気込みを示した。また、「放送技術は、人々の暮らしや経済活動の利便性、快適性、効率性を向上させるとともに、放送技術の進歩が世の中の仕組みや社会そのもののあり方を変えるという、大きな可能性を持っている。Inter BEEが、そうした動きを加速し、より良い方向に変えていくきっかけとなってもらいたい」と期待を示した。この後、2013年国際放送機器展実行委員会 金山一宏委員長が開会宣言を行い、最後に、総務省、経産省、電波産業会、IABM、電子情報技術産業協会、実行委員会から、代表者が参加してテープカットが行われた。





放送・通信 連携の機は熟した 東京オリンピック開催は 次世代放送を加速させる 絶好の機会

開催初日の11月13日午後6時、会場の幕張メッセに隣接するAPAホテル東京ベイ幕張において、Inter BEE レセプションパーティが開催された。レセプションパーティは、Inter BEEの開催に際して協力を得た後援団体、協力会社、日本放送協会、民放各局、出展企業各社の幹部を招き、B2Bの交流の場として開催されるもので、放送業界、映像業界から500人を越えるキーパーソンが参加した。昨年4年ぶりに開催し、続いての開催となる今回、地上波デジタル後の動向として、4K/8Kの普及促進や、2020年の東京オリンピック開催へ向けての展開など、放送業界の新しい展望について、会場の各所で活発に意見が交わされた。

開催に先立ち、冒頭の挨拶としてInter BEE 2013 実行委員会の金山一宏委員長が登壇したほか、来賓として、一般社団法人 民間放送連盟 事務局長の青木隆典(たかふみ)氏による挨拶があり、乾杯の音頭を日本放送協会 理事・技師長の久保田啓一氏が行った。



Inter BEE 2013 国際放送機器展実行委員会
金山 一宏 委員長



一般社団法人 民間放送連盟 事務局長
青木 隆典 氏



日本放送協会 理事・技師長
久保田 啓一 氏



「3日間で3万人超が来場 世界31カ国・地域から918社が出展」

レセプションパーティの開催に際し、Inter BEE 2013 実行委員会の金山一宏委員長が主催者を代表して挨拶に立った。

金山委員長は冒頭、Inter BEE が今年で49回目となり、来年が記念すべき50回となることを紹介した。今年の展示会場での注目テーマとして、「4K/8Kなどの超高精細映像技術」「セカンドスクリーン、スマートテレビなどの新しいビジネスの可能性」に加え、「V-Lowなど電波の有効利用、デジタルサイネージやプロジェクションマッピングという新たなビジネスモデル」などを挙げ、放送・映像・通信に関わる幅広い、最新のテーマや課題が集まる展示会であることをアピールした。

「大型国際イベントの開催は 放送の革新と深い関係」

祝辞の挨拶に立った一般社団法人 民間放送連盟 事務局長の青木隆典氏は、初日の会場を視察した感想として、「プロのための展示会がこれだけ華やかに開催されるというのは、景気が回復してきたのだと感じさせる」、また、「放送業界が新たな道を歩もうとしていると感じ、大変うれしく感じた」と述べた。

また、Inter BEE 開催の2カ月ほど前(2013年の9月7日のIOC総会)に決まっただけの、2020年オリンピック/パラリンピック 東京開催決定について、「私たちにとっても大変明るいニュース。盛り上がり大いに期待する」とし、「国際的な規模のスポーツイベントは、放送・映像のイノベーションと深い関係を持っていることは、前回の東京オリンピックにおいても、多くの機材が利用され、それによって斬新な映像や感動を呼ぶ映像手法がたくさん実現し、視聴者のみなさまの期待に応えてきた」と期待をにじませた。

青木氏は、続いて、放送局内の設備投資に話題を転じ「まさにファイルベースの時代が到来しようとしている」とし、2003年に3大都市を中心に始まった地上デジタル放送への対応から10年を経て「地上波放送局は」そろそろ、マスター設備の更新期を迎え

ようとしているところ」と指摘。「素材の収録から編集、送出といった行程におけるファイル化の動向を見ながら、あるいはまた、次世代の放送サービスへ向けて、より高品質で効率的なシステムの導入をしていくことになる」と述べ、多くの放送局が更新時期にさしかかり、次世代放送をにらみながらの検討がなされていることを示唆した。

青木氏は、最後に「そういった局にとっては、今年のInter BEEは、技術情報の宝庫であり、貴重なイベント」と述べ、「メーカー各社には、放送局のわがままな要望を聞いてもらい大変感謝している」と、謝辞で締めくくった。

「地上デジタル後の新たな局面 さらなる飛躍のチャンスに」

乾杯の発声で登壇した、日本放送協会 理事・技師長の久保田啓一氏は、「放送と通信の融合したサービス」と、「4K/8K」の二つが今、放送業界での大きなテーマであるとし、次のように述べた。

「放送と通信の融合については、ようやく、機が熟してきた。NHKもハイブリッドキャストをはじめたばかりだが、どのようなサービスを充実させることが放送コンテンツに新たな価値を付加し、新しいニーズを捉えることができるか、検討を進めている」

「4K/8K放送は、2013年に入り、世界各地で新しいコンテンツをつくる試みがなされ、放送局における議論も始まっている。我が国もロードマップをつくり、オールジャパンでさまざまな準備を進めている。スーパーハイビジョンは、裾野のとても広い技術で構成されている。応用分野は放送に限らず大変広い。こういったものを実現することで、我が国の放送をはじめ広い産業分野に貢献できる」

久保田氏は最後に、「このように、地上デジタル放送の完了のあと、放送業界はまた、高らかな局面にさしかかり、そこから飛躍しようとしているが、それを2020年の東京オリンピックがますます加速している」と分析。「Inter BEEという場が、大勢の国内外の専門家の方が、議論をしたり意見を交換する有意義な場となることを願う」と述べ、乾杯の音頭をとった。

ポストプロ、CGプロダクションの 横のつながりや広がりをも！ 「Production & Creator's Night」

めったに会えないトップクリエイターとの交流の場

■シアターの講演者をはじめ クリエイターが交流を行える場を

Asia Contents Forumの各種パネルで招かれた国内外のゲスト。そして、ポストプロやCGプロダクションの方々に、プロモーションおよびリクルーティング用に設けさせていただいたブース。これら、VFXに関わる業界のプロフェッショナル、および学生に向けてInter BEEの2日目夜に開催されたのが、「Production & Creator's Night」だ。

■国内外のトップクリエイターと直に情報交換！

2013年のAsia Contents Forumのコンセプトは「VFXスペシャル」。

そのため、アメリカを中心としたVFXのプロフェッショナルのための組織・VESからのゲスト、ハリウッド大作を手がけるプロダクション、Double NegativeやMethod StudiosからVFXスーパーバイザーを招いての講演など、Inter BEEならではのプログラムを揃えた。

日本からは、日本ポストプロダクション協会の協力のもと、オムニバス・ジャパン、デジタルガーデン、マックレイのそれぞれが手掛けた特殊映像&最新技術をメイキングと共に披露。

時間がいくらあっても足りないほど、濃密なスケジュールだった。

そうした、CG/VFX関係者の注目が集まった日の晩、すべてのプログラムが終わった直後、Inter BEEの会場が閉まっていく中で「Production & Creator's Night」は行われた。業界に関わり、チケットを持った者のみが参加できる特殊な場だ。



■Inter BEE だからこそ 意味のある交流会に

国内のゲストはもとより、海外のゲストと直接話すことができ、また、ブースを出展したプロダクションをはじめとした各社の方々と自由に交流ができるこの場は、今年で2回目。

Inter BEEが機器展の枠を超え、映像を制作するクリエイターサイドにも強くアプローチできる場として開催され、Inter BEE閉場後のクローズドな会にもかかわらず、参加者は110名と大盛況。

参加者の方からは、以下のようなコメントをいただいた。「Inter BEEには毎年来ているんですが、ついこの間まで3Dムーブメントだったのがあっという間に消えて、今回は4K/8K一色でした。デジタルテクノロジーの進化にコンテンツはどう追いつい



Inter BEE=VFX、という場にしたい

ていくのか、制作側としてはそこになにを提供していくか。周辺の準備がだんだんと整いつつある中、オリンピックが拍車をかけると思います」

「セミナー楽しかったです。こういう場ではないと1つのパッケージについての技術をまとめて披露できないので、プロモーションとして絶好のチャンスでした。実際、既存のお客さんにも「こういうことをやられてるんですね」と認知していただいたのも、とてもよかったです」
「初めてパーティに参加したんですけど、非常に盛り上がっていてびっくりしました！」

予定されていた時間は1時間ほどにも関わらず、思わぬ盛り上がりを見せたこともあり時間を延長するほど。次回のAsia Contents Forumでもさらなる仕掛けを用意していきたい。





8K技術で業界をリード、 200インチ大画面でリアル8K映像を表示

アストロデザインのブースでは、約200インチ相当の大画面と、同社が開発した8Kビデオウォールプロセッサ等を組み合わせて、世界ではじめて8Kをリアル画質で表示できる大型映像システムを開発し展示を行った。表示装置には、クリスティ・デジタル・システムズ製のタイル型LED光源DLPリアプロジェクションユニット「マイクロタイル」を96枚(縦8×横12)使用。「マイクロタイル」は20インチの小さな画面でできており、これを組み合わせて自由な形状をつくることができる。会場では、NHKやアストロデザインが独自に制作した8K動画映像のほか、スカパーJSATなどの4Kコンテンツもあわせて上映した。自社作品では、東京都立川市の国営昭和記念公園の日本庭園やコスモスの丘で撮影を行った作品が上映された。これは、同社が開発した8Kスーパーハイビジョン用カメラで撮影したもの。会場内のブースでは、このときに用いられた同社のスーパーハイビジョンカメラシステムが展示された。8Kカメラヘッド「AH-4800」、8KカメラCCU「AC-4802」、8K_SSDレコーダ「HR-7512」、4Kモニター「DM-3432」など、いずれも自社での開発によるもので、8K映像制作における同社の先進性をうかがわせるデモとなった。アストロデザイン第一営業部マネージャーの佐野道則氏に来場者の反響やInter BEEの位置づけなどを聞いた。



アストロデザイン株式会社
第一営業部 マネージャー
佐野 道則 氏



8Kの超高精細映像を全面的にアピール

■今回の出展の狙い、テーマは何か。

当社は、10年以上前から、主にNHKと協力してスーパーハイビジョン(8K)の高精細映像に関する各種の機材の開発を行ってきた。この展示会でも4Kに関しての各種のソリューションや機材の展示は年々増えてきているし、今年もさらに4Kが増えてくるとは予想された。そこで当社では、4Kのさらに先を行く8Kの技術開発に長年取り組んでいる企業としてアピールしたいと考えた。8Kができれば当然ながら4Kもできるものである。当社は4Kの一步先を行く8Kクラスの超高精細映像のリーディングカンパニーである点を今年の展示会では大きくアピールすることが最大の狙いであった。8Kをアピールするためにはネイティブ8K画質をステージの大画面で来場者に見てもらおうことが一番と考え、これまで当社のプライベート展示会などで4Kのデモ映像を表示したクリスティ製のマイクロタイルに注目した。マイクロタイルであれば8Kの大画面もユニット数を増やすことで構築可能で、フロントプロジェクターのように部屋を暗くする必要もないためオープンスペースで明るい場所で多くの人に8Kの大画面をアピールすることができる。メーカーやレンタル会社と相談の上、約200インチの8Kの大画面表示システムを構築、これに当社の8K送出系機器や8Kカメラで収録したリアル8Kコンテンツも表示、当社の8Kに対する取り組みが大きくアピールできたと思う。これまでNHKでしか見るこ

のできなかったスーパーハイビジョンのリアル8K大画面映像がアストロデザインブースでも再現できたということで当社としても新たな顧客開拓にも手ごたえを感じている。

迫力の大画面 200インチリアル 8K映像に 来場者の目は釘付け

■来場者の反応はどうか。

200インチという大画面でネイティブ8Kの映像を表示していたブースはインタービュ広しと言えども当社だけだったのでアイキャッチ効果とともに当社ブースへの誘導という点でも大きく役に立った。もちろん、ブース内の展示も8Kそして4Kに重点をおいたものが多かったので来場者には大いに関心を持ってもらったと思う。初日にはクリスティさんの協力を得て、200インチ8K大画面のプレス発表を行った効果もあり、当社のブースを訪れた人は例年以上に多かったと実感している。

海外、プライベートショーを含め、 最も大切でもっとも大規模な展示会 集客力アップに期待

■Inter BEEをどのように位置づけているか。

NABや当社のプライベートショーなどにも力を入れているが、そ

の中にあっても最も大切で最も大規模な展示会である。当社の主要顧客である放送業界の方々に当社の取り組みを知ってもらうには絶好の機会である。今後もInter BEEには大いに期待している。当社としては38年間、この展示会が当社の取り組みを世の中に対して大きくアピールできる場として存在することに多大な感謝をしている。今後もさらに集客力のアップをめざしさらに大きな展示会へと拡大して行ってみたい。





池上通信機は「Broadcast Innovation —より豊かな映像表現を目指して—」をテーマに出展した。最新のカメラでは、デジタルシネマで世界的に実績のあるARRI社とのコラボレーションにより生まれたSuper 35mm Format HDTV Camera System「UnicamHD HDK-97ARRI」を出展した。画素数よりも画素の大きさにこだわったSuper35mm CMOSセンサの採用により、高S/N、高感度、広ダイナミックレンジを獲得。現行放送システムの中でシネマテイストな映像表現ができるHDTVカメラとして展示した。さらにシステムカメラに加え、情報カメラなどに威力を発揮し、星明かり程度でもカラーフル動画撮影が行える3CMOS 超高感度HDTVカメラ「HDL-4500」も紹介した。モニターでは、FHD有機EL (OLED)をデバイスに採用したカラーモニターHEM-2570W (25型) /1770WR (17型)を出展した。広視野角を誇り、広ダイナミックレンジ、高速動画応答性による高コントラストでシャープな動画の再現を可能にし、安定した黒の階調を映し出すマスタモニターである。スイッチャーでは、ユニットの組み合わせにより、用途に合わせた大規模ルーティングスイッチャーやライブ制作スイッチャーをシステムアップできる「MuPS-4000 series」を出展した。またNHKとの共同展示により、非圧縮スーパーハイビジョン(8K)信号伝送用120GHz帯FPUも展示し、次世代放送技術へのアプローチも具現化してみた。池上通信機の開発本部製品戦略部部長の小山田一弥氏に来場者の反響やInter BEEの位置づけなどを聞いた。

Broadcast Innovation

—より豊かな映像表現を目指して—



池上通信機株式会社
開発本部 製品戦略部 部長
小山田 一弥 氏

NHKと共同で、非圧縮スーパーハイビジョン(8K)信号伝送用120GHz帯FPUを展示

■今回の出展の狙い、テーマは何か。

今年の展示のテーマは「Broadcast Innovation —より豊かな映像表現を目指して—」だった。注目は次世代放送スーパーハイビジョンへ向けた8Kのソリューションであるが、当社は撮影用のカメラメーカーとしてNHKが推進しているスーパーハイビジョン用カメラの開発を継続して行っている。当社が製造した8Kスーパーハイビジョン用カメラで撮影したコンテンツを8.5型液晶ディスプレイによって大画面高精細のネイティブ8K映像の表示を行った。NHKとの共同展示により、非圧縮スーパーハイビジョン(8K)信号伝送用120GHz帯FPUも展示し、2016年のリオデジャネイロ五輪でのスーパーハイビジョン試験放送開始へ向けての取り組みの成果を披露した。スーパーハイビジョン映像撮影用のカメラは当社は10年以上前からNHKと共同開発を行っており、多くの8K素材が当社のカメラによって撮影されている。長年8Kなどの高精細映像に取り組んできた当社にとって、昨年や今年の展示会あたりから4Kや8Kの具体的なスケジュールが見えてきたことで展示にも力を入れた。当社としては8Kに長年取り組んできており、4Kから8Kへという流れを展示の中で具現化させている。有機ELの2.5型と1.7型のマスターモニターも当社としては今回初展示した。有機ELのマスターモニターは他社からも商品化されているが、池上らしさを出すために特にCRTライクな絵作りにこだわった。有機ELならではの応答スピードの速さやコントラストの高さも追求したモデルとして訴求した。有機ELモニターのラインアップの拡大でユーザーの選択肢を広げた。来場者からも有機ELモニターへの関心は高かったと思う。



海外からの池上ブース見学者が増える

■来場者の反応はどうか。

今年はお客様に例年以上に多くきていただいた。中でも海外、特にアジア各国からのお客が多く、ワールドワイドで次世代放送に関心が集まってきていることを実感した。機材の展示に関する質問も数多く寄せられ、例年以上に真剣に展示をご覧いただけているという手ごたえを感じた。全体的にも昨年以上に盛り上がりを見せていたのではなかろうか。4Kや8Kなどの次世代高精細放送に対する本格的な放送局の取り組みが感じられる展示会となったと思う。

■日本では最大の放送機器の展示会として全力投球

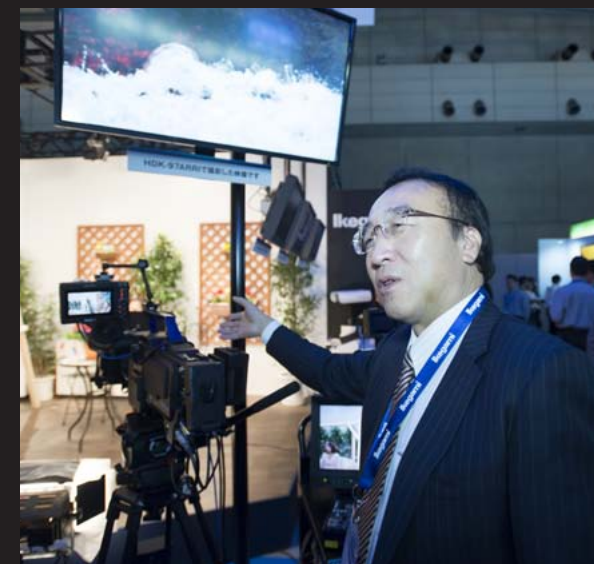
■Inter BEEをどのように位置づけているか。

年度初めの展示会として米国のNABも重要な展示会ではあるし、欧州のIBCなど放送機器展には当社も力を入れているが、中でもインタービーは国内の放送局をはじめとする顧客向けの展示会としては最大規模の展示会であり最重要の展示会として位置づけている。展示の規模も最大で池上として総力をあげて取り組んでいる展示会である。池上の考え方を多くの来場者に示す展示会として毎年全力投球でのぞんでいる展示会である。

■入場カードにICタグなどの導入も期待

■事務局への要望は何かありますか？

昨年よりも通路が広くなったので搬入時の混雑はいくらか解消されていたかと思う。要望点としては東京モーターショーなど他の展示会でもやっているような入場カードにICタグのようなものをつけて、受付時にどのような人が入場してきているのかよくわかるようなデータが取れるとなお良いかと思う。IT時代にふさわしい入場者把握システムの導入を期待したい。





「音と映像のプレゼンテーター」である ヒビノグループが 総合力をアピールする製品を数多く展示

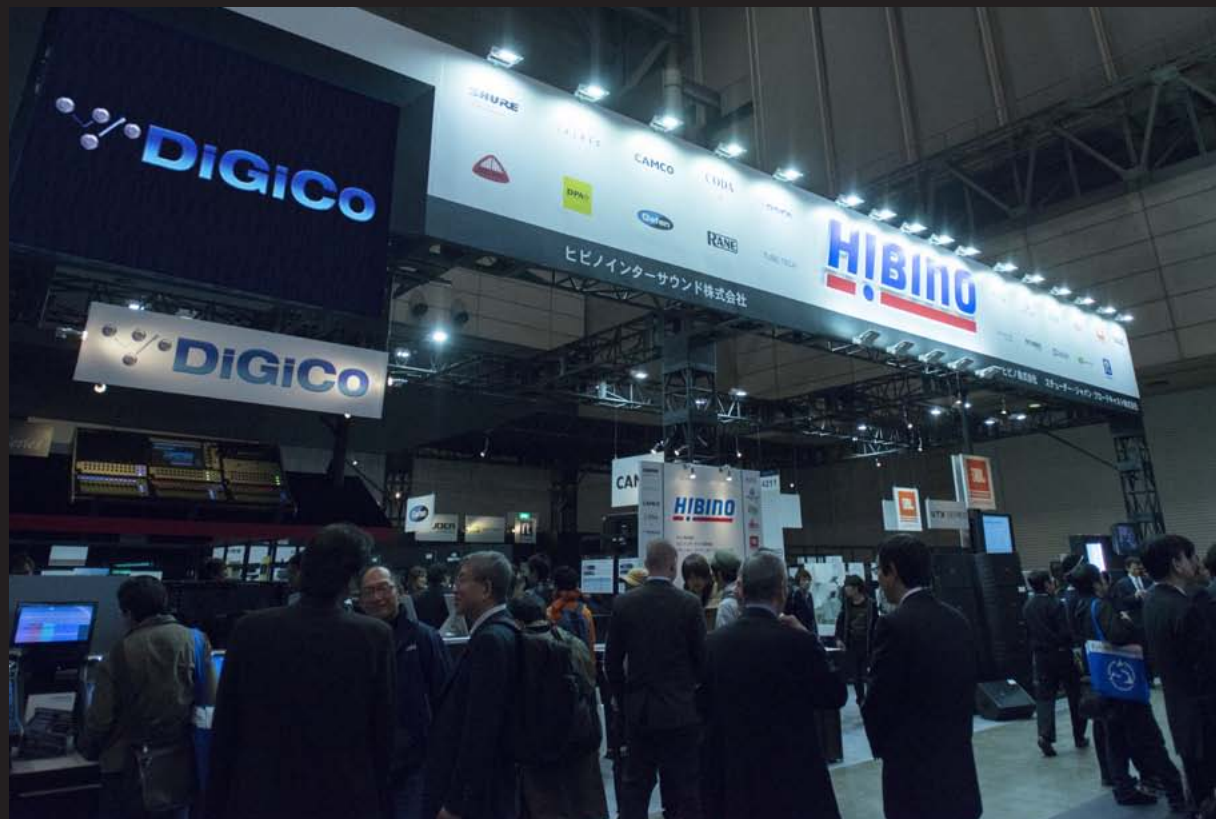
ヒビノグループでは、ヒビノ、ヒビノインターサウンド、スチューダー・ジャパン・ブロードキャストの3社共同でプロオーディオ部門に出展した。

ヒビノプロオーディオセールス Div.は、ヒビノで最も長い歴史を持つ事業部。ヒビノ創業当時（昭和39年）の日本は高度成長期へ駆け上がる途中の真っ只中だった。海外からの演奏をライブに体験できる機会はまだまだ少ないという時代環境と消費者の心理をいち早く察知し、ヒビノは「本物」に限りなく近いサウンドを日本人に伝えようと、サウンドの送り手となるプロフェッショナルをターゲットとした音響機器販売事業に着手した。事業スタート以来今日まで、業界トップクラスを維持し続ける実績は、プロフェッショナルからの厚い信頼を得ている。

ヒビノインターサウンドは独立した法人として音響機器の輸入代理および販売業務を主業務としている。輸入ブランドにはShure（アメリカ）マイクロホン、CALREC（イギリス）放送用ミキシングコンソール、CAMCO（ドイツ）パワーアンプ、CODA AUDIO（ドイツ）SR用スピーカー、DiGiCo（イギリス）ミキシングコンソール、DIS（デンマーク）デジタル会議システム、DPA Microphones（デンマーク）マイクロホン、Gefen（アメリカ）映像周辺機器、など多数ある。

今回の展示会ではイギリス DiGiCo 社のデジタル・ミキシングコンソール製品を中心にアピールした。





「音と映像のプレゼンター」ヒビノの音響機器販売事業部門の総合力を展示で生かす

■今回の出展の狙い、テーマは何か。

内野：ヒビノインターサウンドでは、イギリス DIGICO 社のデジタル・ミキシングコンソールを中心に展示した。新製品の放送用ラックマウント/テーブルトップコンソール「SD11B」をはじめ、フラッグシップモデルの「SD7」まで全てのラインナップを揃えた。DIGICO 社の SD シリーズは幅広いニーズに応えられるうえ、全モデルが同じオペレーションなので、一度操作を覚えれば他のモデル



ヒビノインターサウンド株式会社
営業部 営業企画チーム
内野 亜香 氏

も難なく操作できることをアピールした。そのほか、DPA Microphones は新製品の「d.fact」や定番のミニチュアマイクを展示し、お客様に新たなご提案もさせていただいた。また、Gefen の映像関連機器はモニターを多用して、機能の有用性を実感していただけるようにした。

寺田：ヒビノは、来場者に可能な限り最新鋭の機器をご覧いただきたいと思い、新商品を中心に展示した。JBL PROFESSIONAL ラインアレイ・スピーカーの最上位モデル「VTX SERIES」、最高水準のラージモニター性能をコンパクトに実現するリファレンスモニター「M2」、水平 160° の広いエリア をカバーする設備用スピーカー「CWT128」をはじめとして、Soundcraft のデジタル・ミキサー「Si Expression」や AMCRON の設備用パワーアンプ「DCi Series」など、これまでにない画期的な技術を備えた商品を揃えた。

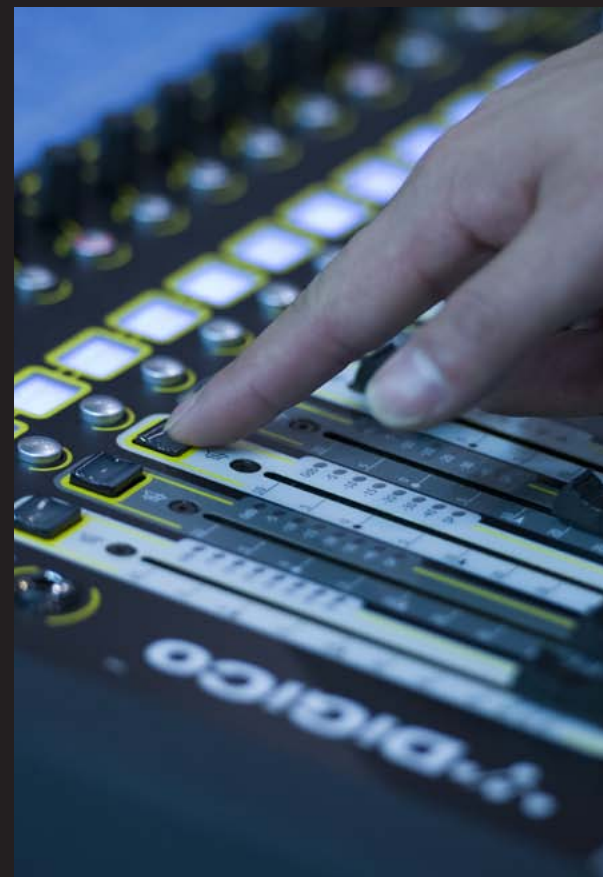
ヒビノのオーディオブースには昨年の1.5倍以上の来場者

■来場者の反応はどうか。

寺田：来場者の反応は上々である。展示会全体では昨年に比べ微増というところだったが当社のオーディオブースには昨年の1.5倍以上の来場者があった。新製品を数多く出展したこともあり、積極的に質問する人も多く、例年以上に熱心な人が印象で充実した展示会だったと思う。



ヒビノ株式会社
ヒビノプロオーディオセールス Div.
ハーマンプロフェッショナル営業部
マーケティングチーム
寺田 崇 氏



プロオーディオ業界から見ても最大規模の展示会

■Inter BEEをどのように位置づけているか。

内野：日本ではプロオーディオ専門の大規模な展示会はないため、インタービーがプロオーディオ業界から見ても最大規模の展示会となる。新規の顧客の獲得と既存のお客様への挨拶の場としても重要な展示会といえる。大きなスペースを割いて毎年、力を入れた展示を行っている。また当社は大型映像などの映像機器も別なブースで出展している。音と映像のプレゼンターとしてのヒビノの総合力を示すことのできる場でもある。

さらなる来場者の増加を期待

■今後のInter BEEへなにか要望は何かありますか。

寺田：これまで以上にたくさんのお客様に会場に来ていただけるように、インタービーの知名度をさらに高めて欲しい。



ヒビノ副社長の野牧幸雄氏「高画質映像になるほど増す音響の重要性」

このインタビューの取材時に会場でヒビノ副社長の野牧幸雄氏にお会いした。野牧氏は「当社はこの音響ブースのほかにも映像のブースも構え高精細の大型LEDシステムなどを展示した。さらに会場入り口に大型LEDビジョンを設置、来場者への案内も行き大手レンタル会社としての実力もアピールした。4Kや8Kなどの高画質映像になればなるほど高画質に伴う音響の重要性も増す。良い映像に良い音響、これらをトータルで実現できる会社として当社ヒビノの総合力を今年のインタービーでは例年以上にアピールできたのではないと思う」と述べ、高精細映像の時代には高品質の音響も重要であることを強調していた。



次世代4K/8K放送を視野に 実績を重ねる 映像伝送ソリューション

富士通は次世代技術への取り組みとして最新コーデックを活用した映像伝送ソリューションの提案と、富士通の次世代映像伝送技術を紹介した。新製品の4K/8K時代につながるIPコーデックの最新最上位モデル「IP-9610」による映像伝送ソリューションやH.265/HEVCへのマイグレーションなどを紹介、来場者の注目を集めた。また新規に提供するライブ映像切替ソフトウェアを活用した運用効率化ソリューションをはじめ、富士通が持つ映像処理技術を応用したさまざまなソリューション、次期制作支援システムなどを提案した。情報カメラ/素材伝送運用効率化ソリューション、情報カメラ収録・送出ソリューション、クラウドを活用したトランスコードサービス、次世代制作支援システム「MediaPool」などの最新機器やソリューションを実演を交えて紹介した。富士通サービスビジネス本部ビジネスイノベーション統括部セキュリティビジネス推進部マネージャーの船橋俊男氏に来場者の反響やInterBEEの位置づけなどを聞いた。



サービスビジネス本部
ビジネスイノベーション統括部
セキュリティビジネス推進部
マネージャー
船橋 俊男 氏





4K/8K時代につながる最新のコーデック等を紹介

■今回の出展の狙い、テーマは何か。

「4K/8Kの次世代放送、ファイルベースシステムに向けて富士通が取り組むメディアプラットフォームの紹介」と「放送局で導入が増えてきているIPコーデック装置をお客様が効率的、効果的に運用するためのソリューションの提案」の2つにポイントをおいた。

「IP-9610」は、双方向伝送やIP/ASI同時伝送に加え、4Kライブ伝送にも既の実証実験などで利用されており、次世代コーデックとしての期待は大きい。

また、H.265/HEVCへのマイグレーションでは、リアルタイムエンコーダの開発、8Kへの拡張を視野に次世代放送を支える富士通のH.265製品への取り組みを紹介した。

「MediaPool」はコンテンツ制作業務（収録からアーカイブ）における、映像素材のライフサイクルを管理し、業務効率化を図りたいお客様に提案。ファイルを意識せずに収録からアーカイブまでを実現する点を特長とする。

コーデックの柔軟な連携で操作性を高めた複数拠点カメラ/素材伝送運用効率化ソリューション

複数拠点カメラのライブ映像のコーナーでは、パソコン上で簡単にライブ映像の接続切替、最大18マルチ画面表示が行なえる新商品を紹介した。主に放送局のお客様を対象に、当社の放送機器の最新ソリューションを実際に体験し、理解してもらえるようにお客様ごとの提案を行った。



蓄積映像を速やかに取出し、オンエアに即時活用

情報カメラ収録・送出ソリューションでは、全拠点のライブ映像と24時間収録映像をプレビュー、送出できる「VideoCasterPro」を紹介。

地震等災害の際には、簡単操作で蓄積映像を速やかに送出し、オンエアに即時活用可能であることをわかりやすく展示し説明した。

新しい技術展示、次世代のソリューションにより関心が集まる

■来場者の反応はどうか。

昨年よりも来場者が多いという印象を受けた。初日から当社ブースにも例年以上のお客様が集まっていたという実感があつた。今回はお客様のニーズにあわせ、各ソリューションごとの提案・展示を行ったため、それぞれのテーマに関心のある方がより多く集まったと思われる。特に4Kなどの次世代映像ソリューションには注目が集まった。当社としても十分に手ごたえを感じる展示会であった。

放送業界では年に1回、最大規模の専門展示会 2014年は具体的なビジネスの方向を提案

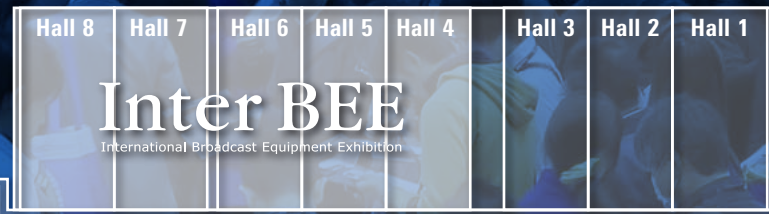
■InterBEEをどのように位置づけているか。

富士通はIT事業をはじめ数多くの事業を手がけているが、放送部門からみれば最大規模、国内では唯一の放送業界の専門展示会として位置づけている。放送のビジネスに関わる方であればほとんどの人が足を運ぶ展示会と考えており、当社の放送機器部門の最新のソリューションを発表できる場として考えている。

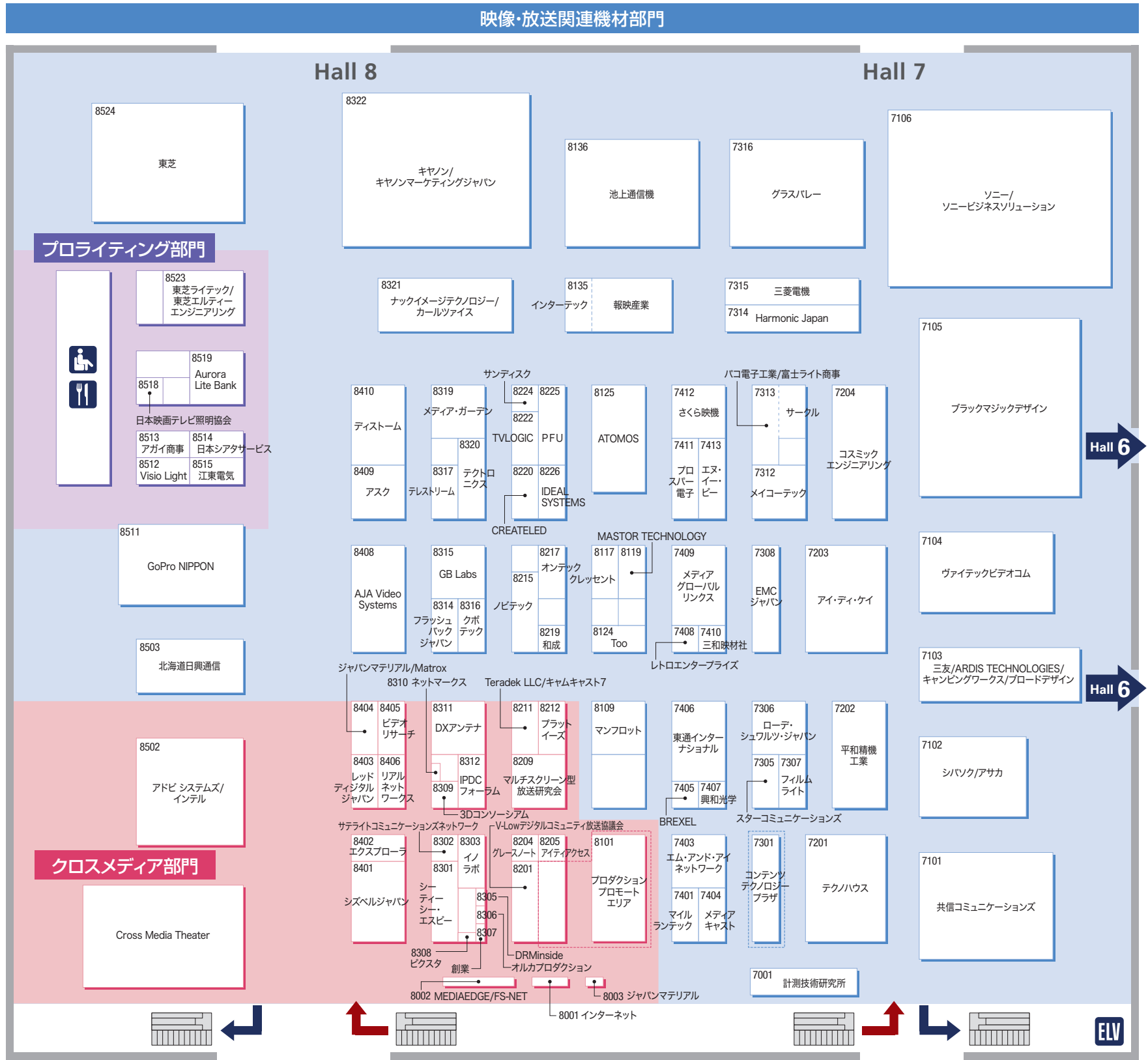
UHD (4K/8K) 放送は4K放送 (2014年試験放送、2016年リオ五輪中継)、8K放送 (2016年リオ五輪・実用化試験放送、2020年東京五輪中継) というスケジュールが見えてきている。

来年以降はさらに4Kや8Kなどの高精細映像に関心が集まるだろう。お客様の期待に応えられるような提案・展示を行ってきたい。

Makuhari Messe



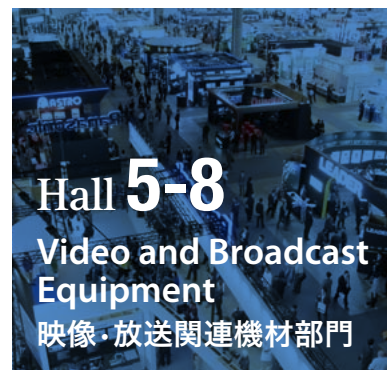
Inter BEE
International Broadcast Equipment Exhibition





- Hall 4-5
Professional Audio Equipment
プロオーディオ部門**
- 4201 (株)アイコニック
 - 4504 (株)アコースティックフィールド
 - 4410 アスニクス(株)
 - 4413 アツデン(株)
 - 4102 アプローズシステム(株)
 - 4415 ANTELOPE AUDIO
 - 4104 AMPHENOL AUDIO
 - (株)イースタンサウンドファクトリー
 - 4204 (株)イーブイアイ オーディオ ジャパン
 - 4101 今井商事(株)
 - 4501 ウェタックス(株)
 - 4010 ウェルクラフト(株)
 - 4520 (株)エイ・ディー・エル
 - 4520 (株)エス・シー・アライアンス
 - 4509 エタニ電機(株)
 - 4207 エヌティエイジャパン(株)
 - 4513 (株)エムアイセブンジャパン
 - 4503 エムアイディー(株)
 - 4120 (株)MTS&フランニング
 - 4116 (株)エレクトリ
 - (株)オーディオテクニカ
 - 4306 (株)オーディオブレインズ
 - 4309 オタリテック(株)
 - 4206 音響特機(株)
 - 4005 カナルワークス(株)
 - 4102 Catch Me(株)
 - 4615 グラフイカ(株)
 - 4409 クリプトン・フューチャー・メディア株式会社
 - (有)グルーヴ ミュージックライブラリー事業部
 - 4403 (株)クレセント
 - 4601 (株)コスモサウンド
 - 4202 コモドマッティーナ(株)
 - 4402 コンチネンタルファーマーイースト(株)
 - (株)サザン音響
 - 4006 三研マイクホン(株)
 - 4521 (株)サンミュージク
 - 4304 ZEAL(株)
 - 4011 (株)J.TESORI
 - 4412 (株)シグマシステムエンジニアリング
 - (株)静科
 - 4210 シュア・ジャパン・リミテッド
 - 4513 (株)シンタックスジャパン
 - 4401 (株)スタジオ イクイブメント
 - 4211 スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト(株)
 - 4303 (株)須山齒研
 - 4308 ゼンハイザージャパン(株)
 - 4414 ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株)
 - 4504 (株)タイムロード
 - 4606 タックシステム(株)
 - 4307 (株)タムラ製作所
 - 4208 ティアック(株)
 - 4411 (株)ティーアンドエムホールディングス
 - 4514 ティーエスピージャパン(株)
 - 4302 TCグループ・ジャパン(株)
 - 4605 TOA(株)
 - 4010 テクノシステム(有)
 - 4505 (株)テクノハウス
 - 4003 (株)デジタル・ラボラトリー
 - 4603 (株)トライテック
 - 4203 (株)ドリーム
 - 4004 一般社団法人700MHz利用推進協会
 - 4416 日東紡音響エンジニアリング(株)
 - 4301 日本エレクトロ・ハーモニクス(株)
 - 4201 日本テックトラスト(株)
 - 4407 一般社団法人日本舞台音響家協会

- 4607 ノイトリック(株)
- 4608 (株)ハイ・リゾリューション
- 4517 花岡無線電機(株)
- 4405 (有)ハルス
- 4211 ヒビノ(株)
- 4111 ヒビノインターサウンド(株)
- 4121 (株)フォービット
- 4404 フォスター電機(株)フォステクスカンパニー
- 4508 フラウンホーファーIIS
- 4209 ベステックオーディオ(株)
- 4510 ベン アプリケーション ジャパン(株)
- 4506 ボーズ(株)
- 4610 松田通商(株)
- 4604 (株)ミウラ
- 4002 (株)宮地商会 M.I.D.
- 4001 (株)宮地商会 プロオーディオ事業部
- 4518 (株)メディア・インテグレーション
- 4205 (株)メディアプラス
- 4519 (株)モアソフジャパン
- 4408 (株)モリダイラ楽器
- 4305 ヤマキ電気(株)
- 4310 (株)ヤマハミュージックジャパン
- 4611 ライブギア(株)
- 4208 Line 6 Japan(株)
- 4125 ラウドネスワークショップ
- 4010 楽休 コリア
- 4513 レゾネット合同会社
- 4616 ローランド(株)



- Hall 5-8
Video and Broadcast Equipment
映像・放送関連機材部門**
- 7103 ARDIS TECHNOLOGIES
 - 6207 RFデザイン(株)
 - 6112 IABM
 - 6206 アイ・エス・エックス(株)
 - 5404 アイ・コマース(株)
 - 6501 (株)アイ・ディー・エクス
 - 8226 IDEAL SYSTEMS
 - 7203 (株)アイ・ディ・ケイ
 - 6111 IBC
 - 8312 IPDCフォーラム
 - 5508 アイベックステクノロジ(株)
 - 7102 (株)アサカ
 - 8409 (株)アスク
 - 5317 アストロデザイン(株)
 - 6116 ATEME
 - 8125 ATOMOS(株)
 - 4617 アビッドテクノロジ(株)
 - 6601 (有)アフエクトロジック
 - 5615 AMAGI MEDIA LABS PRIVATE LIMITED
 - 6114 Alpermann+Veite EE GmbH
 - 6001 アルピクス(株)
 - 5208 (株)アルモア
 - 6201 アンリツ(株)
 - 7308 EMCジャパン(株)
 - 5105 (株)イーブイアイ オーディオ ジャパン
 - 8136 池上通信機(株)
 - 5407 (株)石川トランク製作所
 - 6602 イッティウム・システムズ(株)
 - 5406 伊藤忠ケーブルシステム(株)
 - 5309 (株)イノコス
 - 6407 (株)IMAGICA
 - 6407 (株)イマジカデジタルスケープ
 - 6503 (株)イメージニクス(株)
 - 8135 (株)インターテック

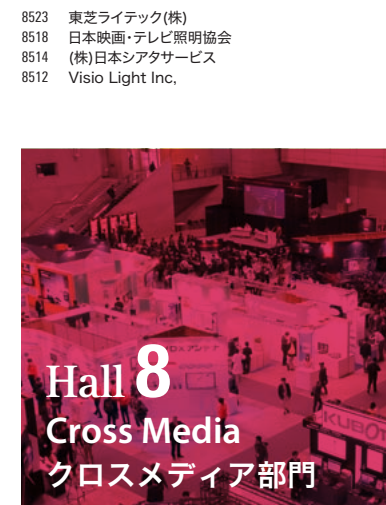
- 5310 イントピックス・アイランド(株)
- 5116 インフィニテグラ(株)
- 7104 ヴァイテックビデオコム(株)
- 5310 (株)ヴェレックアイランド
- 5614 EIZO(株)
- 5507 営電(株)
- 6314 ATENジャパン(株)
- 5517 エイム電子(株)
- 6402 エーアンドエー(株)
- 2639 AJA Video Systems
- 6404 エーティ コミュニケーションズ(株)
- 6310 (株)イーディテクノ
- 5518 Extron Electronics, Japan
- 6601 エステイビーシー映像システム社
- 5603 (株)エックスライト
- 6122 NEC
- 7413 エヌ・イー・ピー(株)
- 6214 (株)NHKアイテック
- 6119 NAB
- 5408 (株)NKI/Grip Factory Munich
- 6121 (株)エヌジーシー
- 5403 NTTアドバンステクノロジ(株)
- 5305 NTTアドバンステクノロジ(株)
- 5305 NTTエレクトロニクス(株)
- 6303 (株)エミミック
- 7403 (株)エム・アンド・アイ ネットワーク
- 5206 エル・エス・アイ ジャパン(株)
- 5503 (株)エルグベンチャーズ
- 6306 (株)エレクトリ
- 5103 (株)エンルート
- 6121 オートデスク(株)
- 5312 (株)オカダインターナショナル
- 6210 OTICOM CORPORATION
- 6108 OPHIT CO.,LTD
- (株)オンテック
- 8217 カールツァイス(株)
- 5401 カナレ電気(株)
- 5302 カベラシステムズ
- 6315 カモ井加工紙(株)
- 5302 カリーナシステム(株)
- 5122 (株)ガンズイ
- 8322 キヤノン(株)/キヤノンマーケティングジャパン(株)
- 5005 CABSAT
- 7103 (株)キャンピングワークス
- 7101 共信コミュニケーションズ(株)
- 5608 銀一(株)
- 5316 クオンテル(株)
- 8316 クボテック(株)
- 7316 グラスバール(株)
- 8220 CREATELED
- (株)クレセセント
- 5215 (株)K-WILL
- 7001 (株)計測技術研究所
- 6405 (株)ケンコー・トキナー
- 6405 (株)ケンコープロフェッショナルイメージング
- 6311 興和光学(株)
- 7407 興和光学(株)
- 8511 GoPro NIPPON
- 5112 コーンズテクノロジ(株)
- 7204 (株)コスミックエンジニアリング
- 6117 KOBA
- 6103 小峰無線電機(株)
- 7313 (株)サークル
- 5114 (株)サードウェーブテクノロジーズ
- 6215 (株)サイバネテック
- 7412 さくら映機(株)
- 5113 サンインソルメント(株)
- 6502 三信電気(株)
- 8224 サンディスク(株)
- 5611 (株)サンミュージク
- 7410 (株)三和映材社
- 5315 CCBN
- 8315 GB Labs LLP
- 5211 ジェーアールサウンド(株)
- 5512 (株)JBSクロス
- 6217 シグマイティエス(株)
- 5001 (有)シネマックス
- (株)シバソク
- 6604 (株)昌新
- 6504 (株)昭特製作所
- 5408 (株)スウィッシュ・ジャパン
- 6309 (株)須川映像技術研究所
- 7305 スターコミュニケーションズ(株)
- 5001 (株)ストロベリーメディアアーツ

- 6312 住友電気工業(株)
- 6405 スリック(株)
- 6305 西華デジタルイメージ(株)
- 6406 摂津金属工業(株)
- 5002 SET
- 6602 Z3ジャパン株式会社
- 5213 セムテック ジャパン
- (株)Cerevo
- 6208 (株)扇港産業
- 6101 ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株)
- 7106 (株)ソリトンシステムズ
- 5308 ダイキン工業(株)
- 6204 高橋建設(株)
- 5402 タキゲン製造(株)
- 5111 タックスシステム(株)
- 6301 田中電気(株)
- 5106 (株)谷沢製作所
- 6115 DALET DIGITAL MEDIA SYSTEMS
- 5610 CHIEF
- 6213 津幡技研工業(株)
- 6109 (株)TBSテレビ
- 8410 (株)テストーム
- 8222 TVLOGIC
- 8320 テクトロニクス
- 5201 (株)テクノネット
- 7201 (株)テックハウス
- 5609 (株)デュープレックス
- 5107 テルフトハイテック(株)
- 5314 TELE-satellite Magazine
- 8317 テレストリーム
- 5612 (株)テレフォース
- (株)テンノー
- 6403 (株)電波新聞社
- 8124 (株)Too
- 8524 (株)東芝
- 7406 (株)東通インターナショナル
- 5207 (株)東通クリエイティブ・ビジョン
- 5211 トモカ電気(株)
- 5504 (株)トラフィック・シム
- 8321 (株)ナックイメージテクノロジ
- 5301 ナモト貿易(株) 計測器事業部
- 6102 ニッキャビ(株)
- 5118 日鐵住金溶接工業(株)
- 6203 日本アンテナ(株)
- 6106 日本開閉器工業(株)
- 6304 日本通信機(株)
- 6501 (株)日本ビデオシステム
- 5203 日本無線株式会社
- 6105 ネットワークエレクトロニクスジャパン(株)
- 8215 (株)Vビテック
- 7314 Harmonic Japan 合同会社
- 5616 (株)バイオス
- 5607 ハイパーツールズ(株)
- 7313 パコ電子工業(株)
- 5418 パナソニック(株)
- 5418 パナソニックシステムネットワークス(株)
- 5304 ビーエスイターナショナル(株)
- 8225 (株)PFU
- 6206 ViiTA Technology Co., Ltd.
- (株)ピーテック
- 6107 ビジュアル・グラフィックス(株)
- 5505 (株)日立LGデータストレージ
- 5617 (株)日立国際電気
- 5121 (株)日立システムズ
- 5121 (株)日立ソリューションズ
- 5408 (株)ビデオサービス
- 6503 ビデオロン(株)
- 6209 Video Plus
- 5120 ヒビノ(株)
- 5601 平河ビューテック(株)
- 5516 ヒロテック(株)
- 5120 (株)ファーストエンジニアリング
- 7307 フィルムライト株式会社
- 5101 (株)フェイス
- 6316 (株)フォトロン
- 5306 フォレスタデザインシステムズ(株)
- 5119 フォントワークス(株)
- 5511 フジコフ工業(株)
- 5124 富士通(株)
- 6505 富士フイルム(株)
- 6505 富士フイルム(株) イメージング事業部
- 6505 富士フイルム(株) 記録メディア事業部
- 6505 富士フイルム(株) 光学・電子映像事業部
- 5602 (株)フジミック

- 7313 富士ライト商事(株)
- 5501 (株)府中技研
- 5613 (株)芙蓉ビデオエイジェンシー
- 7105 ブラックマジックデザイン(株)
- 8314 (株)フラッシュバックジャパン
- 6102 (有)ブランネット
- 7405 BIREXEL, Inc.
- 5004 Broadcast Asia
- 5003 Broadcast India
- 7103 ブロードデザイン(株)
- 7411 (株)プロスパー電子
- 7202 平和精機工業(株)
- 6506 (株)朋栄
- 8135 報映産業(株)
- 6307 (株)ポーンデジタル
- 5204 北陸電話工事(株)
- 5109 穂高電子(株)
- 8503 北海道日興通信(株)
- 6212 香港貿易発展局
- 5603 (株)マイクコム
- 5117 (株)マイクボード・テクノロジ
- 7401 (株)マイルランテック
- 6202 (株)マウピック
- 8119 MASTOR TECHNOLOGY LIMITED
- 5307 (株)松浦機械製作所
- 4610 松田通商(株)
- 8109 マンフロット(株)
- 7315 三菱電機(株)
- 7103 三友(株)
- 6308 ミハル通信(株)
- 5603 武蔵(株)
- 7312 (株)メイコーテック
- 5115 メタデータ
- 6104 メタルトイズ
- 8319 (株)メディア・ガーデン
- 7404 (株)メディアキャスト
- 7409 (株)メディアアグリグローバルリンクス
- 6401 ユアサ工機(株)
- 6205 (株)ユニテックス
- 5212 横河デジタルコンピュータ(株)
- 6603 (株)よしみカメラ
- 5614 (株)ライトアップ
- 6216 (株)ラグナビルズ
- 6313 (有)ラテック
- 5416 (株)ラムダシステムズ
- 6118 ランサーリンク(株)
- 5417 リーダー電子(株)
- 5209 (株)RIP-TIE
- 6110 リマージュジャパン(株)
- 5202 リンクステックジャパン
- 5210 レディオ フレクンジー システムズ
- 7408 (有)レトロエンタープライズ
- 6504 (株)レントアクト昭特
- 7306 ローデ・シュワルツ・ジャパン(株)
- 4616 ローランド(株)
- 6302 Rovi Corporation
- 6307 (株)ワークスコーポレーション
- 8219 和成(株)



- Hall 8
Professional Lighting Equipment
プロライティング部門**
- 8513 アガイ商事(株)
 - 8519 Aurora Lite Bank Co.
 - 8515 江東電気(株)
 - 8523 東芝エルティエエンジニアリング(株)



- Hall 8
Cross Media
クロスメディア部門**
- 8205 アイディアアクセス(株)
 - 9312 IPDCフォーラム
 - 8502 アドビ システムズ(株)
 - 8303 イノラボ
 - 8001 (株)インターネット
 - 8502 インテル(株)
 - 8402 (株)エクスプローラ
 - 8002 FS-NET(株)
 - 8306 (株)オルカプロダクション
 - 8204 グレースノート(株)
 - 8302 (株)サテライトコミュニケーションズネットワーク
 - 8301 シューティーシー・エスピー(株)
 - 8401 シズベルジャパン(株)
 - 8404 ジャパンマテリアル(株)
 - 8003 ジャパンマテリアル(株)
 - 8309 3Dコンソーシアム
 - 8307 (株)創業
 - 8305 DRMinSide
 - 8311 DXアンテナ(株)
 - 8211 Teradek LLC/(株)キャムキャスト7
 - 8310 (株)ネットマークス
 - 8308 ビクスタ(株)
 - 8405 (株)ビデオリサーチ
 - 8201 V-Lowデジタルコミュニティ放送協議会
 - (株)プラットフォーム
 - 8404 Matrox Electronics Systems Ltd.
 - 8209 マルチスクリーン型放送研究会
 - 8002 MEDIAEDGE(株)
 - 8406 リアルネットワークス
 - 8403 レッドデジタルジャパン(株)



- 8101
Production Promote Area
プロダクションプロモートエリア**
- (株)NHKメディアテクノロジー
 - エヌ・ティ・ティ ラーニングシステムズ(株)
 - (株)玄光社
 - (株)コロサス
 - Double Negative
 - (株)TYOテクノカルランチ
 - マーザ・アニメーションプラネット(株)
 - (株)ルーデンス
 - (株)ワークスコーポレーション



- 7301
Contents Technology Plaza
コンテンツテクノロジープラザ**
- (株)インターネットテレビジョン
 - (株)EVC
 - (株)ケルケ電子システム
 - (株)ユニバーサルコンピュータ研究所

音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

INTER BEE ONLINE

www.inter-bee.com

Inter BEEでは、出展情報や国内外の関連展示会情報を独自に取材するチーム「Inter BEE ニュースセンター」を設置しています。出展製品、展示会情報は、取材チームにより記事・映像コンテンツとなり、会期前、会期中、会期後と年間を通じて、Inter BEE Online内のOnline MagazineやInter BEE TVによって発信されました。



Inter BEE Online 掲載記事 (一部/抜粋)



Magazine InterBEE TV

Film Light 2013.10.31UP

4K TV 番組対応のカラーグレーディング最新技術を展示 日本法人を設立し国内4K放送市場へ本腰



Magazine InterBEE TV

サンインストルメント(株) 2013.11.6UP

韓国Opticis社製の光Display Port延長機や光HDMI延長機、最長30kmまで延長可能な光3G SDI延長機などを出展



Magazine InterBEE TV

シュア・ジャパン・リミテッド 2013.11.13UP

特定ラジオマイクの新周波数帯対応のワイヤレスマイクやDSLR用ショットガンマイクを出展



Magazine InterBEE TV

(株)ライトアップ 2013.11.13UP

Redrock micro製ワイヤレスフォーカスシステムや被写体を固定したまま背景を動かすような映像を撮影できるカメラ移動装置「ワンマンクルー」



Magazine InterBEE TV

(株)IMAGICA 2013.11.8UP

Inter BEEに初出展 4Kワークフローから映像資産活用まで実績を元にした提案を実施 Def Techの4K MV 上映も



Magazine InterBEE TV

エタニ電機(株) 2013.11.9UP

音響計測器「ASA-10mkII」による音場改善のデモを実施 良い「音作り」に貢献する実用的システムを提案



Magazine InterBEE TV

EIZO(株) 2013.11.13UP

11月22日発売の色調整機能つきモニターを出展 フォーカス確認用の画像拡大ソフトも参考出展



Magazine InterBEE TV

ミハル通信(株) 2013.11.13UP

IPリニア放送向け H.264 エンコーダーを参考展示



Magazine InterBEE TV

(株)アイ・ディ・ケイ 2013.11.13UP


HDCP対応デジタルポイントマーカーや32ch×32chのDVI信号対応マトリックススイッチャーなどを出展



Magazine InterBEE TV

(株)テクノハウス 2013.11.13UP

SSDに4K RAWデータ収録可能な有機ELディスプレイ搭載「ODYSSEY 7Q」を出展



Magazine InterBEE TV

(株)エム・アンド・アイ・ネットワーク 2013.11.13UP

ポケット・インサイズのSDIリピーター「VP-633/VP-634」を出展 電源供給機能も充実



Magazine InterBEE TV

リーダー電子(株) 2013.11.13UP

4K波形モニター「LV5490」を中心に展示



Magazine **InterBEE TV**

キヤノン(株)/キヤノンマーケティングジャパン(株) 2013.11.13UP

30型4K液晶ディスプレイほか4K製品と実績を重ねたHDの各種ソリューションをデモ




Magazine **InterBEE TV**

報映産業(株) 2013.11.13UP

独IHSE社製KVMシステムを出展 応答速度の速さを実演 マウスの横スクロールにも対応




Magazine **InterBEE TV**

(株)メディア・インテグレーション 2013.11.14UP

ネットワークベースのプラグインDSPとオーディオインターフェイス DiGi Gridを出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)ソリトンシステムズ 2013.11.14UP

HD映像ライブ中継ソリューション「Smart-telecasterHD」を出展 新機能のファイル同録機能をデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)計測技術研究所 2013.11.13UP

FE超解像ユニット「FE-B1」をベースにF55の4K映像を8Kで体感




Magazine **InterBEE TV**

(株)タムラ製作所 2013.11.13UP

デジタルオーディオミキサーとデジタルワイヤレス関連新製品を展示




Magazine **InterBEE TV**

富士フイルム(株) イメージング事業部 2013.11.14UP

映画「清洲会議」に採用されたIS-100の効果を、実際の比較映像で紹介




Magazine **InterBEE TV**

(株)アイ・ディー・エクス 2013.11.14UP

ワイヤレスHDビデオ伝送システムCW-3をデモ 遅延2ミリ秒以下で伝送距離約50メートルを実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)日立LGデータストレージ 2013.11.14UP

光ディスクを用いた大容量データ向けストレージを提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)メディアキャスト 2013.11.14UP

DataCasterM3 ハイブリッドキャスト用コンテンツ制作ツールなどハイブリッドキャスト向けの各種提案、デモを展開




Magazine **InterBEE TV**

カリナシステム(株) 2013.11.14UP

低消費電力の超高感度HDカメラシステムを展示デモ 0.005ルクスで30fpsカラー映像撮影が可能に




Magazine **InterBEE TV**

DXアンテナ(株) 2013.11.14UP

「IPDC WORLD 2013」をテーマに、IPDC技術を用いた展示を3つのコーナーで実施




Magazine **InterBEE TV**

(株)東通インターナショナル 2013.11.14UP

Miranda社製4K/60p対応マルチビューワーを出展 大型スイッチャーとの連携運用をデモ 4K/8Kのソリューションを提供




Magazine **InterBEE TV**

(株)コモドマッティーナ 2013.11.14UP

コンパクトデジタルミキサー Qu-16を出展 コンパクトで使いやすさを追究 USB HDDの接続で16chマルチトラックも可能




Magazine **InterBEE TV**

カベラシステムズ 2013.11.14UP

Cambria Live Studio オールインワンインターネットライブ配信システムをデモ





Magazine **InterBEE TV**

GoProNIPPON 2013.11.14UP



GoPro Hero3+を展示 小型軽量、多機能化を実現




Magazine 

(株)東芝 2013.11.14UP

新テレビマスターシステムを4つのコンセプトで展示
業務用4K UHDモニターのプロトタイプも出展

Magazine  InterBEE TV

ビデオロン(株) 2013.11.14UP

4K対応スーパーインポーズ機能付き
キャラクタージェネレーター「ST-350V4K」を
参考出展




Magazine  InterBEE TV

Aurora Lite Bank Co. 2013.11.14UP

LEDベースライトや
発光面積の大きなタイプも展示





Magazine  InterBEE TV

(株)JBSクロス 2013.11.14UP



4Kクロスプラットフォームのワークフローを実演
RED、BMCCのRAW収録からDaVinci Resolve編集、
納品までをデモ




Magazine 

イメージクス(株) 2013.11.14UP

初のマルチ信号対応シームレススイッチャーを出展
16入力4出力で2系統のシームレスモードを搭載

Magazine  InterBEE TV

(株)朋栄 2013.11.14UP

世界初のフル4K高速度カメラ「FT-ONE」など
4K対応製品群と、ファイルベース、アーカイブ、
ベースバンド関連新製品を紹介




Magazine  InterBEE TV

オートデスク(株) 2013.11.14UP

VFXソフトウェアの最新版
「Flame Premium 2014」を中心にデモを実施中





Magazine  InterBEE TV

(株)日立国際電気 2013.11.14UP



マラソン中継等で使用する伝送装置
「FR-ZU200/ZU400」を展示
周波数移行に対応




Magazine  InterBEE TV

松田通商(株) 2013.11.14UP

TV、FM、AM放送局向けの
高品質オーディオプロセッサ
ORBANシリーズを出展

Magazine  InterBEE TV

ソリッド・ステート・ロジック・ジャパン(株) 2013.11.14UP

初のSR用コンソール「Live L500」を
国内初展示




Magazine  InterBEE TV

共信コミュニケーションズ(株) 2013.11.14UP

同一タイムラインで編集・合成・ペイントから
フィニッシングまで可能なツールボックス
「MISTIKA」を出展 連日デモを実施




Magazine  InterBEE TV

(株)メディア・ガーデン 2013.11.14UP

LITE PANELS社のLED照明システムを展示
350Wで光量2KWを実現




Magazine  InterBEE TV

西華デジタルイメージ(株) 2013.11.14UP

REDカメラによる4Kワークフローをデモ
4Kカメラのピント合わせ用 レンズコントロールシステム
「Focun View」も展示




Magazine  InterBEE TV

ゼンハイザージャパン(株) 2013.11.14UP

周波数再編に対応したデジタルワイヤレスマイクロホン
D9000シリーズを展示
非圧縮伝送で高品質な音声を伝送




Magazine  InterBEE TV

伊藤忠ケーブルシステム(株) 2013.11.14UP

4K対応のファイルベースソリューションによる
各種新製品を紹介




Magazine  InterBEE TV

カールツァイス(株) 2013.11.14UP


フルフレーム対応のマニュアルフォーカスレンズを
多数出展 来年中頃に発売予定のズームレンズ
15-30mmを参考出展




Magazine **InterBEE TV**

ATOMOS(株) 2013.11.14UP

コンパクトなキャリブレーションツール
Atomos Spyder展示 主要カメラメーカー全製品で
実機デモ 会場内にスタジオを設置してニュース配信も

Magazine **InterBEE TV**

さくら映機(株) 2013.11.14UP

新製品 PRUNUS P.P.Rを初披露
リニア編集なみの素早いつなぎを実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)創業 2013.11.15UP



「しゃべるポスター」のサイズ豊富に




Magazine **InterBEE TV**

三信電気(株) 2013.11.15UP

LiveU社のライブ映像伝送システムを展示

Magazine **InterBEE TV**

(株)ナックイメージテクノロジー 2013.11.14UP

ワンマンオペレーション向け「AMIRA」優れたスキントーンと
自然な色再現性、14ストップ越えるダイナミックレンジと
低ノイズを実現




Magazine **InterBEE TV**

(株)NKL 2013.11.14UP


特殊機材の最大手NKL 撮影を強力にサポートする
独自開発、海外輸入の各種防振装置を実機デモ




Magazine **InterBEE TV**

メタルトイズ 2013.11.15UP

「あまちゃん」で使用した小型ドリル
「BEETLE」(ビートル)を展示デモ




Magazine **InterBEE TV**

ブロードデザイン(株) 2013.11.15UP

ハイエース多目的車、2.8KVA 電源搭載の
「軽電源車」などを展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)ケンコープロフェッショナルイメージング 2013.11.14UP

Tokina CINEMA ATX レンズを出展
PL・EF両マウントタイプを提供 新開発非球面レンズで
高次元の描画性能




Magazine **InterBEE TV**

EMCジャパン(株) 2013.11.14UP

EMC アイシロン スケールアウトNASを用いた
4K映像制作対応 大容量コンテンツ制作ワークフローを
デモ 15日には招待講演も




Magazine **InterBEE TV**

クオンテル(株) 2013.11.15UP

進化を続けるハイエンドカラー&
フィニッシングシステム「Pablo Rio」を紹介
新製品レンジ「Pablo Rio 2KO」も展示




Magazine **InterBEE TV**

ビジュアル・グラフィックス(株) 2013.11.15UP

映像編集・フィニッシングソリューションを各種デモ
非圧縮4Kに対応する高速データ転送ニアラインサーバー
「WIRED SERVE」を実演




Magazine **InterBEE TV**

ブラックマジックデザイン(株) 2013.11.15UP

6G-SDIテクノロジーを採用した
Ultra HD 4K製品を中心に各種新製品を展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)プロスパー電子 2013.11.15UP

android携帯の会話をインカムに取り込む
アダプターを展示




Magazine **InterBEE TV**

池上通信機(株) 2013.11.15UP

シネマテイストな映像を表現する「HDK-97ARRI」、
有機ELを採用したマスターモニターなどを出展




Magazine **InterBEE TV**

マルチスクリーン型放送研究会 2013.11.15UP

民放37社で「セカンドスクリーン」の
プラットフォーム構築を推進




Magazine **InterBEE TV**

(株)オーディオブレインズ 2013.11.15UP

会場全体に理想的な視聴環境を創り出す
マーチンオーディオ MLAスピーカーの小型版新製品
「MLA mini」を出展




Magazine **InterBEE TV**

ヒビノインターサウンド(株) 2013.11.15UP

Gefen社製マルチビュー対応シームレススイッチャー展示
最大100画面表示・機器間で100m延長可能な
デジチェーンHDシステムも出展




Magazine **InterBEE TV**

アドビ システムズ(株) 2013.11.15UP

プレミアプロなど Creative Cloudの最新機能紹介
4Kワークフローの機能充実 4K/59.94p出力に
対応ほか各種RAWデータに対応




Magazine **InterBEE TV**

アビッドテクノロジー(株) 2013.11.15UP

「Avid Everywhere」に基づく各種ソリューションを紹介
映画『スター・トレック イントゥ・ダークネス』の
アーティストが来日セッション




Magazine **InterBEE TV**

コンチネンタルファーイースト(株) 2013.11.15UP

ドイツ・ベルリンのADAM AUDIO製品の
ラインアップを紹介 高品質なツイーターが
国内外で高い評価




Magazine **InterBEE TV**

(株)エス・シー・アライアンス 2013.11.15UP

Wheastone社の新製品3機種を
国内初披露




Magazine **InterBEE TV**

(株)テクノネット 2013.11.15UP

4K対応リアルタイム3Dグラフィックシステム
「スポーツコーダ4K」を出展




Magazine **InterBEE TV**

銀一(株) 2013.11.15UP

STEDICAMのシネカメラ対応製品から、GoPro専用まで
各種新製品が登場 合成撮影に最適のカナダ CINEVATE社製
モーターユニット搭載スライダーもデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)ノビテック 2013.11.15UP



4K対応1000フレーム/秒(33倍速)撮影可能な
最新版「Phantom」を国内初披露




Magazine **InterBEE TV**

TCグループ・ジャパン 2013.11.15UP

新構成のSYSTEM6000MkIIを展示
ステレオ5.1chのアップコン・ダウンコン製品
「UpCon」を初披露

Magazine **InterBEE TV**

東芝ライテック(株) 2013.11.15UP

フルLEDシステムをコンセプトに
拡張LEDシステムを紹介




Magazine **InterBEE TV**

ローランド(株) 2013.11.15UP

4K/8K対応可能なイベント映像演出 非圧縮映像の
マルチフォーマット・ビデオ・プレゼンター
「PR-800HD」を出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)エクスプローラ 2013.11.15UP

4K対応リアルタイムHEVCコーデックをデモ
NEDOのイノベーション実用化ベンチャー支援事業で
開発を推進 独自技術「レート制御機能」も紹介




Magazine **InterBEE TV**

(株)ディーアンドエムホールディングス 2013.11.15UP

Ethernet対応ソリッドステートレコーダーの
新製品をデモ




Magazine **InterBEE TV**

NTTグループ / NTTアドバンステクノロジー(株) 2013.11.15UP

最新の映像コーデック製品を国内初出展




Magazine **InterBEE TV**

(株)トラフィック・シム 2013.11.15UP

ポータブル TSレコーディングの新バージョン
「HACOBEE2」を発表 地デジ / BS変調機能を追加




Magazine **InterBEE TV**

Extron Electronics Japan 2013.11.15UP

HDMI対応ペーパーレス会議支援システムや、多様なビデオ信号に対応したHDCP対応ビデオウォールプロセッサ展示




Magazine **InterBEE TV**

ローデ・シュワルツ(株) 2013.11.15UP

4K放送メディア・プロダクション・ハブ「VENICE」や4K HEVC伝送装置、TSモニタリングなど4K伝送関連ソリューションを展示




Magazine **InterBEE TV**

(株)PFU 2013.11.15UP

高精細映像伝送装置「QoolTornado QG70」を展示マルチキャスト双方向伝送と4K蓄積・編集ワークフローへの活用を提案




Magazine **InterBEE TV**

(株)シバノク 2013.11.15UP

同期信号発生器「TS800A」信号発生部を2つ搭載し障害時にも停止せずに同期信号を出力 4Kテスト信号発生器「TG4000」も出展




Magazine **InterBEE TV**

三菱電機(株) 2013.11.15UP

HEVCコーデックを小型基盤1枚で実現




Magazine **InterBEE TV**

タックシステム(株) 2013.11.15UP

Mac Pro対応 Thunderbolt-PCI-E 拡張シャーシを展示




Magazine **InterBEE TV**

マンフロット(株) 2013.11.15UP

ブリッジテクノロジーヘッドやDSLR用三脚、日本人体型に適した小型・軽量リグなどを出展




Magazine **InterBEE TV**

コスミックエンジニアリング 2013.11.15UP



独自の可搬型ラックを採用した小型HD中継・伝送車を展示 最大6カメのマルチカメラオペレーションが可能




Magazine **InterBEE TV**

平和精機工業(株) 2013.11.15UP

フラグシップモデル RSPLUS 750 / 850を展示 7段階トルク 無段階カウンターバランスシステムの体験コーナー、修理相談コーナーも設置

Magazine **InterBEE TV**

パナソニック(株)/ パナソニックシステムネットワークス(株) 2013.11.15UP

新カメラレコーダー「AG-HPX600」を出展 10ビットフルHD記録可能なAVCイントラを採用タブレットで遠隔編集・送上の参考デモ実施




Magazine **InterBEE TV**

三友(株) 2013.11.15UP

ファイルベースをコンセプトにトータルワークフローを展示 新ウェブサービス「Totte」スタートに伴うイベント実施 iPad mini Rentiaが当たる!




Magazine **InterBEE TV**

日本エレクトロ・ハーモニクス(株) 2013.11.15UP

RED収録の4K映像をHEVC 60Pで15Mbpsによる再生をデモ




Magazine **InterBEE TV**

音響特機(株) 2013.11.15UP



世界初のAV専用イーサネットAVB搭載DSP TESIRA サーバ 10を出展 420x420のオーディオ伝送が可能に




Magazine **InterBEE TV**

ダイキン工業(株) 2013.11.15UP

映像編集エフェクトシステム SMOKEやノードベーステキストチャット「Genetica」などをデモ

Magazine **InterBEE TV**

北海道日興通信(株) 2013.11.15UP



世界初の4KフルバーチャルスタジオをはじめNIXUSの主要製品を4Kで体験 クラウドシステムとのシームレスな連携をデモ




Magazine **InterBEE TV**

(株)ヤマハミュージックジャパン 2013.11.15UP

「Connect with Experience」をテーマに、Yamaha、Steinberg、NEXOの各社ブランド製品を展示

Magazine **InterBEE TV**

エル・エス・アイ ジャパン(株) 2013.11.15UP

自社開発のリアルタイム字幕入力システムを用いたワークフローをデモ




Magazine **InterBEE TV**

トモカ電気(株) 2013.11.15UP

ENGカメラに光伝送機能を付加する光カメラランシーバー「CopperHead」など光伝送関連製品を多数出展




Magazine **InterBEE TV**

興和光学(株) 2013.11.15UP

新製品のHDMIスイッチャや最大180mまで延長可能なツイステアケーブル延長分配機などを出展




Magazine **InterBEE TV**

ライブギア(株) 2013.11.15UP

設置の自由度を高めた蛇のような柔らかく長いスピーカー「K-array KAN200 アナコンダ」を出展




Magazine **InterBEE TV**

アスク 2013.11.15UP

AJA社製の4K映像リアルタイム切り出しソフトを出展 Thunderbolt2対応のI/O新製品も参考出展




Magazine **InterBEE TV**

ポーズ(株) 2013.11.15UP



大規模空間向け製品ラインの新製品展開を積極化 スピーカー、アンプ、プロセッサの新製品を多数出展




Magazine **InterBEE TV**

ジャパンマテリアル(株) 2013.11.15UP

12入力2出力対応マルチカメラライブ映像制作システム「VidiGo Live」を日本初出展

Magazine **InterBEE TV**

(株)カムキャスト 2013.11.15UP

H.264エンコーダ搭載 3G/4G/LTE対応ライブ配信ユニット「BOND」、見通し伝送距離90mワイヤレスハイビジョン伝送システム「BOLT」など




Magazine **InterBEE TV**

(株)ユニテックス 2013.11.15UP



世界初USB3.0接続LTO-6搭載ポータブルLTO映像アーカイブシステム「HandyLT」4K映像撮影現場の作業時間を大幅に短縮




Magazine **InterBEE TV**

ピクスタ(株) 2013.11.15UP

在庫画像・映像600万点の素材マーケットプレイスサイト「PIXTA」フルHDの映像素材を9,450円から販売 デジタルサイネージなど用途拡大中

Magazine **InterBEE TV**

FS-NET(株) 2013.11.15UP

EDIUS Pro 7を搭載した4K再生対応編集機「4K Work Station for EDIUS」を出展




Magazine **InterBEE TV**

クリプトン・フューチャー・メディア(株) 2013.11.15UP



無償のサウンド管理ソフト「MUTANT」を展示 キーワードやイメージからサウンド素材の検索、購入が可能に




Magazine **InterBEE TV**

(株)ストロベリーメディアアーツ 2013.11.15UP

テレビスタジオ向け再撮用大型映像システム 画面の上を人が歩いても大丈夫な床面設置用高精度LEDディスプレイなど展示

Magazine **InterBEE TV**

アストロデザイン(株) 2013.11.15UP

アストロデザイン&クリスティ パブリックビューイングを想定した200インチ相当の大画面をつくりだす"リアル8K"ビデオウォールを世界初展示




Magazine **InterBEE TV**

レッドデジタルジャパン(株) 2013.11.15UP

6K RED DRAGONセンサー搭載「RED EPIC-M Dragon」を国内で初公開 4K映像作品の上映も実施




Magazine **InterBEE TV**

シーティーシー・エスピー(株) 2013.11.15UP

未来につながる映像エコシステムテーマにエレメンタル社4K/HEVCエンコードシステムを一般初公開




Magazine 

Rovi Corporation 2013.11.15UP

DivX HEVC コーデックによる4K再生をデモ
SDKによるモバイルデバイス上での
HEVC再生も紹介




Magazine 

ユアサ工機(株) 2013.11.15UP

コンパクトな車載型 伸縮ポール
油圧システムの小型化も実現




Magazine 

CHIEF 2013.11.18UP

シーリングタイプの9面マウントブラケットや
耐荷重136kgの85インチ液晶ボードの取り付け可能
キャスター付きスタンドも出展




Magazine 

(株)サンミュージク 2013.11.18UP

イスラエル Sound Radix社製 EQプラグイン
「Surfer EQ」を出展 ボーカルなど基本周波数の変化
しやすい音に効果的なイコライジング




Magazine 

セムテックジャパン 2013.11.15UP

3G-SDI 関連製品をデモ
6Gソリューションによる4Kテレビ出力も紹介




Magazine 

(株)昌新 2013.11.18UP

光ファイバーにより4K非圧縮映像とKVMを
40km(東京-川越/戸塚)の遠隔操作可能に




Magazine 

(株)ヴァレッジアイランド 2013.11.19UP

4K60P再生可能な「VillageSTUDIO 4Kプレイヤー」
出展 HEVC、XAVC等各種フォーマットに対応




Magazine 

(株)エンルート 2013.11.19UP

国内開発の空撮用マルチコプター
「Zion」シリーズを出展
折りたたみ式で運搬しやすさを向上





Magazine 

(株)フラッシュバックジャパン 2013.11.18UP



4K時代にマッチした肌のしわや染みを自動除去できる
スキンタッチソフト「Beauty Box Video」を出展




Magazine 

デルフトハイテック(株) 2013.11.18UP

PCI-E 2.0対応 Thunderboltの約2倍速
Accusys社製高速RAIDストレージ
最大8台のSSD搭載可能

Magazine 

(株)フォトロン 2013.11.19UP

各種デジタル・ワークフローを提案
4K RAWやドルビーアトモスに対応した
DIマスタリングシステムも展示




Magazine 

ソニー(株)/ソニービジネスソリューション(株) 2013.11.19UP

4Kライブ中継向けソリューションなど
4K製品を一堂に展示





Magazine 

ディストーム(株) 2013.11.18UP


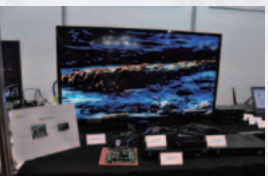
米NewTek社の新ラインナップ「TriCaster410」や
現行製品の機能拡張モデルを初披露




Magazine 

Z3ジャパン(株) 2013.11.18UP

USB3.0対応のUSBメモリーから
4K映像のリアルタイム・デコードのデモを実施

Magazine 

(株)エムアイセブンジャパン 2013.11.19UP

PreSonusのデジタル・ミキシング・システムの最新モデルを
日本初公開 人工能で狙い通りの音づくりを支援する
Zynaptiq製品最新版も展示





Magazine 

エーティコミュニケーションズ(株) 2013.11.19UP



SWEDISH社製衛星中継システムを展示
トヨタ FJクルーザーに搭載し、可搬/車載の
切り替えにより幅広いエリアをカバー




Magazine 

MEDIAEDGE(株) 2013.11.20UP

関西テレビが導入 災害発生後即時オンエアに適した「多チャンネルループ収録システム」出展 1サーバーで21ch同時収録 ライブ映像の9画面一括表示も可能





Magazine 

(株)ポーンデジタル 2013.11.20UP



NUKEなど英 The Foundry 社の各種ソフト紹介





Magazine 

(株)メイコーテック 2013.11.20UP

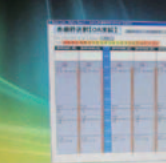

ウィンドウを無制限に表示できる業界最高クラスの「マルチビデオウォールシステム」を出展 484画面同時表示をデモ

Magazine 

(株)デジタル・ラボラトリー 2013.11.21UP

JASRACへの全曲報告業務を省力化する月額定額制サービスを出展 複数サービスの組み合わせで、全曲報告にかかる業務をトータルにサポート





Magazine  

アイティアアクセス(株) 2013.11.20UP



4K60P対応 HEVCアナライザーなどHEVC関連 4製品のほか、セカンドスクリーン・ソリューションなど海外最新製品を出展





Magazine 

(株)静科 2013.11.20UP



機械音の遮音技術を応用した音響調整パネルを国内初出展 ハニカム構造+独自開発の新素材発泡樹脂で高い吸音効果 米NYのAES展で大好評

Magazine 

カナルワークス(株) 2013.11.21UP


完全オーダーメイドの“純国産”業務用カスタマイザーモニターを出展 約3週間で“自分だけ”のカスタマイザーモニターを製作

Magazine 

ZEAL(株) 2013.11.21UP

日本初上陸となるHoneywell社製シーリングスピーカーとボックス型スピーカーを国内初展示 店舗や商業施設での利用を提案 低周波の音域でもブレのない高い音響




Magazine  

シズベルテクノロジー 2013.11.20UP

立体3D映像生成の独自技術「3DZ タイルフォーマット」ロシア Triaxes 社と共同開発






Magazine  

スチューダー・ジャパン(株) 2013.11.20UP



デジタルミキサー VISTA 5の最新版M3を出展 ラウドネス装置RTQ TM7を内蔵 オートミキシング機能などソフトもバージョンアップ




Magazine  

V-Low デジタルコミュニティ放送協議会 2013.11.22UP

デジタルラジオの活用方法を紹介 災害時の緊急連絡など実機によるデモも実施





Magazine  

アンリツ(株) 2013.11.22UP



光ファイバーケーブルの保守・故障探索用測定器など各種測定器を出展





Magazine 

(株)メディアグローバルリンクス 2013.11.20UP



あらゆる映像信号を長距離伝送可能なマルチメディア伝送システムMD8000の省コスト版や、NHKと共同開発のIPベース 光ルーターを出展

Magazine 

グレースノート(株) 2013.11.20UP

視聴中の番組情報やお勧め情報提示の「eyeQ」をソニーが採用 28カ国以上1万9800チャンネルカバー 番組認識と連動のセカンドスクリーン技術も提案






Magazine  

(株)ファーストエンジニアリング 2013.11.22UP

仏アイルトン社製ムービングライト「マジックパネル」を出展 15ワットLED36個搭載 360度パン・チルトをエンドレスで動作可能




Magazine  

(株)エレクトリ 2013.11.22UP

ノイマン「U-47」の影響を受けた米Peluso社製真空管マイク4機種を出展 ビンテージタイプ、メタルチューブ、ガラス三極管など真空管で異なる音を演出




Magazine **InterBEE TV**

グラスバレー(株) 2013.11.22UP

ノンリニアプロダクションセンター「GV Director」を展覧
ライブカメラソース、ビデオサーバー、キャラクター
ジェネレーター の3機能を統合




Magazine **InterBEE TV**

日本通信機(株) 2013.11.22UP

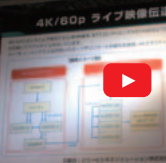
FM放送波中継対応の100W FM送信機システム
30W 非常用FM送信機を展覧 500W、1KWの
FM送信機開発にも着手




Magazine **InterBEE TV**

NTTエレクトロニクス(株) 2013.11.23UP

ソニーブースの4Kカメラ映像をエンコードし、
自社ブースに光伝送しリアルタイムにデコード
～4K表示デモを実施




Magazine **InterBEE TV**

オタリテック(株) 2013.11.23UP

メーカー各社の最新製品を多数展覧 LAWO社製
ビデオプロセッサ「V_Pro8」はマルチフォーマット変換、
色補正、エンベディング/デエンベディング機能搭載




Magazine **InterBEE TV**

ATENジャパン(株) 2013.11.22UP

8入力8出力 HDMIマトリックススイッチャーと
4K映像を100mまで延長可能な新製品の
HDMI延長分配器を展覧




Magazine **InterBEE TV**

(株)マウビック 2013.11.22UP

超小型ポータブル可搬局「MSAT」を展覧
航空機手荷物として持ち込み可能 初動中継、緊急報道、
イベント中継等に効率的




Magazine **InterBEE TV**

摂津金属工業(株) 2013.11.23UP

危機管理に着目した19インチラックや木目調ラック、
欧州NATO軍にも採用された防水・防塵に優れたトランク
ケース「EXPLORERケース」を展覧




Magazine **InterBEE TV**

NEC 2013.11.23UP

「Feel the Innovation」をテーマに
近未来の放送機器・システムを紹介




Magazine **InterBEE TV**

ARDIS TECHNOLOGIES 2013.11.22UP

Ethernet 高速共有ストレージ「DDP」
G-Ethernet接続で100MB/秒を実現
稼働中に利用者の帯域制御機追加




Magazine **InterBEE TV**

日本テクトラスト(株) 2013.11.22UP

新電波法に対応した米レトロソニック ワイヤレス
マイクロホンシステム 独自技術による高品位な音質で
米ENG市場で90%近いシェアを獲得




Magazine **InterBEE TV**

富士通(株) 2013.11.23UP

全拠点モニター / 映像切り替えソフトウェア
メディア・アセット・ソリューション
Media Pool をデモ




Magazine **InterBEE TV**

テクトロニクス 2013.11.23UP

4K対応のビデオ信号測定 /
HEVC解析ソリューションを展覧
各種新製品をデモ




Magazine **InterBEE TV**

エヌ・イー・ピー(株) 2013.11.22UP

USBポートを装備したVマウントバッテリー、
タッチパネルによる調光・色温度設定が可能な
LEDライトの各種新製品を展覧




Magazine **InterBEE TV**

アルピクス(株) 2013.11.22UP



業界初 オンエア字幕ラウドネス監視システムを展覧
ワンセグの普及、総務省の字幕CM放送拡大方針など
による字幕 多様化の時代に対応




Magazine **InterBEE TV**

カナレ電気(株) 2013.11.26UP

IBC 2013の最優秀賞を受賞したActive BNCコネクタを
展覧 伝送距離向上した細軽光カメラケーブル、
3G-SDI光コンバータなども展示

Magazine **InterBEE TV**

エーアンドエー(株) 2013.11.26UP

舞台照明・美術・音響計画向けのCADソフト
「Vectorworks Spotlight」を展覧
思い通りの「光」と「音」を視覚化






一般社団法人 次世代放送推進フォーラム
元橋 圭哉氏

株式会社NHKアート取締役
國重 静司氏

2025年、放送の新たな「世紀」へ向けて 社会が「より豊かに」「より便利に」なる放送を

11月15日に開催された映像シンポジウムでは「新たな放送メディアサービスの現状と今後の展開～スーパーハイビジョン(4K、8K)・スマートTV・ラジオのコンテンツへの期待～」と題した講演とパネルディスカッションが開催された。テレビ、ラジオの最前線で新しい番組づくりに携わる人々が参加するとともに、2013年5月に発足した次世代放送推進フォーラム(NexTVフォーラム)の元橋圭哉氏が登壇し、最新状況と今後の展望を語った。本稿では、同シンポジウムのプロデューサーの一人である國重静司氏が、元橋氏にNexTVフォーラムの現状や今後の課題、展望について、放送局の制作者の立場から聞いている。

國重氏は、NHKで長年にわたり、テレビ番組におけるコンピュータグラフィックスの活用を試みてきたほか、データ放送など新しい放送の形態を探ってきた。その後、NHKアートに移籍後は、コンテンツ制作やさまざまなステージ演出へと活動の場を広げ、放送で培った技術力、企画力を注いでいる。元橋氏は、NHKにおいて、マルチメディア・コンテンツの制作や欧米アジア地域への映像発信のためのTVジャパン事業、インターネット展開やBS/地上デジタル放送の普及・開発などを担当してきた。元NHKの先輩、後輩という立場から、忌憚のないインタビューが行われた。



SHVとスマートTVは一体で実現

國重: 今回の映像シンポジウムは「新たな放送メディアサービスの現状と今後の展開」というテーマでした。スーパーハイビジョン(SHV)とスマートTVについての全体像を知ることができる、大変わかりやすいものになったと思います。とりわけ、元橋さんが事務局を務められているNexTVフォーラムの役割の重要性を良く理解してもらえたと思います。

テレビ、ラジオといった放送メディアは、長い歴史の中で、技術の進化に伴い進展して来ました。これまでは放送事業者が主導でしたが、今、SHV、スマートTVを中心とする新たな放送メディアサービスのフェーズを迎え、放送事業者だけでは新たなサービスの確立へ行き着かないんじゃないか。まずは放送事業者が、多様なメディアの特性や特徴を理解した上で「新しい放送メディア」が生まれるのではないかと。そうした中で、次世代放送推進フォーラム(NexTVフォーラム)の活動はとても重要な意味があると思います。

元橋: 国の「放送サービスの高度化に関する検討会」の報告書で発表されたロードマップでは、2014年に4Kの試験放送を、また2016年に8Kの試験放送を実施し、2020年には、いわゆる本格的な商用サービスとして始まると描いています。こうした「スーパーハイビジョン」放送の実用化とともに重要なのは「スーパーハイビジョンと次世代スマートTVのサービスや機器の開発は、可能な限り一体の物として推進すること」と書かれている点です。「スーパーハイビジョン=高画質化」と「スマートTV=高機能化」を別々に考えがちですが、実は「放送サービスの高度化に関する検討会」の中では、一体のものとして捉えているのです。2020年、テレビは高画質な番組が放送局から送られるだけでなく、ネットとの連携の中で色々なサービスができるようになるでしょう。そうした時代へ向けて、利用者が充分に楽しめるような環境をつくることを目指しているという意味で、重要な点だと思います。

國重: 放送という切り口の中で、具体的に今のスーパーハイビジョンと次世代スマートTVとを連携させ、区切りをなくし

ていく。具体的には、どういう仕組みを検討しているのでしょうか。

元橋: フォーラムでは、2014年から16年の衛星放送の技術を基本に、魅力的なスマートTVのサービスを検討しています。例えば、家庭のテレビで受信したチャンネルを旅先や出張先で楽しめる「リモート視聴」といったサービスもその一つです。また、番組と連動したアプリのようなものも考えています。「次世代スマートTV」と呼び、番組コンテンツをさらに深掘りするために、ネットから関連情報を伝えたり、あるいはテレビやタブレットを通じて、放送のコンテンツに関連した情報を、お互いに発信しあってソーシャルで繋がるといったものです。これらが実現すると、従来の電波を使った放送の枠からはみ出すことになるのですが、我々はそのときに、何ををもって「放送」と定義するかを考えていかねばならない。

私は、ネットを含めた技術の進歩と一般への浸透によって、一般の人々のメディアの利用環境は、放送局の提供するコンテンツを視聴する態勢を遙かに超えており、放送局が活動領域として、視聴者との関係性の中でビジネスをしていくときには、もうネット抜きには語れないと思っています。そういう意味でも、このロードマップが描かれた意味は凄く大きいと思います。

制作の量産化とVODの実現

國重: NexTVフォーラムは、行政が示したロードマップをリードしていく役割を担っていると思いますが、まずは2014年

における試験放送が直近にありますね。これまで4Kはデジタルシネマの技術がベースでしたが、それが放送となると、要求条件や技術がまた大きく異なりますね。

元橋: はい。確かに、NexTVフォーラムは、2014年、2016年の試験放送の主体として、「放送責任」を担っていきます。試験放送の段階では、放送局の集まりである私達が「放送主体」であり「編成主体」になっていきます。その先、何年か後に、商用サービスとして、放送局が自ら一本立ちして行くという図式になると考えています。

2つの方向性があると思います。1つは、制作をどれだけ量産化できるか。コンテンツ・番組を量産化できるかっていう視点ですね。もう1つは、いわゆる放送以外の伝送力として、VOD的なサービスなどを並行してやっていくということ。

1つ目の番組制作については、現在の4Kのプロ用制作機材は多くがデジタルシネマ用として開発されたものです。今まで放送で4Kという動きはなかったのが当然です。そういう意味で今は、テレビ番組をたくさん、リーズナブルなコストで作っていくには、まだまだ改良・改善の余地があります。スポーツ中継に代表されるように10台位のカメラを同時に配置しておいて、今現場で起きていることをスイッチングしながら切り取って、生放送で使ったりとか収録をしたり。スポーツにしる音楽にしる、スタジオショーにしるそうなんですけど。そういう作り方をするように、今の4Kの仕組みは作られてないわけです。

しかし、映画の機材をベースにしながら





らテレビ用に改善、改良が進んで来つつあります。フォーラムに参加する各放送局は、とりあえず今の機材で番組を作り始めて、トライアルをし、演出上のノウハウを溜めるとともに、いろいろな意見を出し、課題を共有して、そういう機材の改良を諮っていく、促していく、ということもやっています。いずれ、機材が低廉化し、使い勝手が良くなれば、番組制作コストも徐々に落ち着いて来るだろうと期待しています。

日本の放送文化・放送ビジネスが、4Kで留まらずに8Kのさらに素晴らしいものを目指していくためには、仲間を作ったりとか、皆が色々なトライアルができるいろいろなジャンルのいろいろなテイストの番組のトライアルができるという環境が必要です。プロデューサーを仲間につけなきゃいけない。そのための機材開発はNHKが主体でやるでしょうが、フォーラムがそれを皆で使えるような環境作りをしていく、ということですね。

もう1つ、VODのサービスとしては、4K

の番組が何本かでもVODで視聴できるようにすれば、4Kテレビを持っていらっしゃる方がネット経由でセレクトして自分の好きな時に観られる。放送が始まるのと共に、放送だけじゃなくVOD的なものもできるだけ早期に並行してサービスインできれば、4Kの普及になると思います。

スマートTVは新しい事業、表現の可能性

國重: スマートTVはまだ、始まったばかりで課題山積と思いますが、「連携」ということを考えた場合の戦略は、どういったものをお考えですか。

元橋: フォーラムの参加者も、非常に関心がありますので、今年度の調査事業のテーマとして挙げています。放送局の制作者の方の中には、慎重な声もまだあります。放送のビジネスモデルが損なわれるんじゃないか、というような警戒も未だに根強くあります。しかし、逆にいえ

ば「新しいビジネスの可能性」でもあるし、新たなクリエイティブ表現の可能性でもある。何か1つ成功事例が見つければ。「自分の局でだったら、こんなことができるかも知れないね」とか、「自分がやっているジャンルの番組だったら、こんなサービスができるかも知れないね」という、上手く回り始める気はするんです。ネットユーザーの人たちの方が、どんどんメディアの利用の仕方が上手くなっているので、従来の放送だけをやっていたのでは、どんどんプレゼンスが低下していくと思うんですね。放送の特性・放送局の持っているコンテンツやクリエイティブのノウハウをもっと広げて行くためには、やはりネットの力を上手く活用していった方が絶対に得だし、それは必須だと思うんですね。

國重: 今後、課題をいくつか明確にしてその後それをどう解決していくか、という。それこそ元橋さんの旗振りのしがい所だと思えますけれども。

元橋: まあ、せっかくそういう場ができたので、「皆さんのモチベーションをいかに高めて行くか」ということに、私等は意を用いるべきで。個々のビジネスをどう設計するかとか、4Kの番組をどのぐらい作るかとか、テレビをどういうタイミングで出して行くかっていうのは、個々の企業の戦略に関わることなので、そこはあんまり口出しすべきことでは無いと思っています。要は、サービスをやりたい人が、一斉にドン!じゃなくてやりたい人がやれるような環境を作っていく。という中で、やる気のある人たちがどんどん前に進めるっていうのが大事で。皆で足並み揃えて行きましようっていうこと

は一見美しいんだけど、それって下手をすると「皆が準備が整うまでチョボチョボでいいよね」みたいなことに成りかねないので。できるだけそういうモチベーションの有る人たちが全体を引っ張っていて、又それが次に続く人たちにも刺激になる、というようなのがいいのかな、と。

オープンな情報共有を目指す

國重: それは、「フォーラム」の外に対しては何か恩恵はあるんですか？

元橋: 私達のフォーラムは、会費を払って自ら汗をかいて色々な貢献をしたりという人たちの集まりであるとともに、フォーラムに入らない人も含めて、日本のテレビのサービスとかメディアのサービスを高度化させたい、発展させたい、っていうことではいえるだけオープンであるべきだと思っているので。入らない人たちに対しても、ちゃんと情報は提供をしていきます。例えば、4K8Kの放送の為の規格が決まったら、それはオープンにして。最初はまず会員の人たちが情報共有するんですが、それに留まることなく、ある一定の時間が経ったらちゃんとオープンにして皆がその技術を使える。あるいは、その技術を使ってネットのサービスをやるという人たちがでてくるとか、そういうことに広がりを持たせていかないといけない。いつまで経っても会員の

人たちだけしかその恩恵に与れません、ということでは駄目だと思うんですね。ある種、志をもってそこに入ってきた人たちは、皆で汗をかきながらそれを業界全体、あるいは社会全体のメディアをリードしていく、ということが求められているんだと思うんです。私達が目指すのは、個々の放送局が儲かるとか儲からないとか、それも大事だけど。デジタルのベネフィットやテクノロジーの恩恵を、ちゃんと視聴者・ユーザーに還元し、社会が「より豊かに」「より便利に」していけるかどうか、だということです。4K8K、スマートTVはそのためのツールであって、それを通じて今までのテレビのサービスとは違う感動や共感、情報が届くことがすごく大事なことだと思っているんです。

國重: メディアを作る側からすると、クリエイティブというものの飛躍的な進化に繋がるんじゃないか、と思うんです。それについての思いはどうですか？

元橋: 現場のプロデューサーやディレクター、色々なジャンルの番組とかコンテンツの作り手の人たち・クリエイターの人たちが、「この道具をどう面白がって自分たちの仕事の中で活かしていくか」ってのは、正にやりながらいろいろな知恵がでてくると思います。本当にネットとの連携の中で今までのテレビとは違うフィールドに乗り出していけるんじゃないかな、って凄く期待感があります。

2020年、そしてその先の2025年へ

國重: 最後に、今後へ向けた抱負を。

元橋: 2020年は、ロードマップの1つの目標になっているとともに、東京オリンピックの開催年ですね。メディアの発展の1つの大きなジャンピングボードであるイベントが日本で開催される2020年に大きく成長しているような準備を、今から進めて行きたいですね。さらに、その先の2025年、この年は放送が100年を迎える年になります。ラジオから始まった放送が、その時々テクノロジーを使ってどんどん進化して、社会の役に立って、人々に感動や文化といった豊かなものを届けることができた。そのための技術の積み重ねが4K8KやスマートTVなんだという風に思っています。だから、今はまだスタート地点ですけど、少しずつ力をあわせていきたいと思っています。

國重: 思いは100年ということなんで「放送の新たな世紀」「新世紀」というか。そこに向けて大役を果たしてやる、ということですね。

元橋: 大役かどうかは(笑)ともかく、これは本当に面白い時代に入ったなあ。これだけ技術の進化が激しくて、色々な競争環境も含め、ダイナミックに動いている状況を活かして新しいサービスができるのは、本当に得がたいチャンスだし、これは活かさない手は無いなあ、という風に思いますね。





聞き手
沢口音楽工房 サラウンド寺子屋塾代表 Fellow AES/IBS
沢口 真生 氏
東京芸術大学 音楽学部 音楽環境創造科 教授
亀川 徹 氏
コーディネータ
TC グループ・ジャパン株式会社 チーフテクニカルオフィサー
京田 真一 氏

話し手
TC Electronics 社 CTO Broadcast & Production
トーマス・ルンド 氏

Inter BEE 2013 初日の11月13日(水)、「ラウドネス・コントロールがもたらすオーディオ業界の変革」と題した特別講演が開催された。登壇したトーマス・ルンド氏は、デンマークに本拠を置くTC Electronics社の放送・プロダクション部門でCTOを務める。ルンド氏は、過去10年以上にわたり、デジタル音楽制作におけるラウドネスの課題について研究し、その影響について訴えてきた。また、自身が学んできた医学的な知識も動員し、EBUでの放送におけるラウドネスの標準化作業に貢献してきたほか、欧米各国でラウドネスの認知を広げるための講演を展開してきた。

2010年には、NABで「放送番組のラウドネスとラウドネスレンジ」と題した講演を行い、番組におけるラウドネスの許容範囲に関する主観評価実験について報告。デジタル放送におけるラウドネス標準化の動きを後押しした。

インタビューでは、ルンド氏がラウドネスの基準策定に関わったEBUでの各国の状況と、現状の課題などについて、沢口真生氏と亀川徹氏が意見交換を行った。

沢口氏は、1971年NHK入局、国際的にも高い評価を得た数々の受賞作を担当。2003年には制作技術センター長に就任。サラウンド音響開発の功績でAES、ipsよりフェローの称号を得たほか、JASでは「音の匠」として顕彰。2005年NHK退職後は、パイオニア顧問を経て、東京芸術大学音楽環境創造学科で、教鞭を執るほか、自ら「サラウンド寺子屋」を主宰し、サラウンド技術の教

育・普及活動に務める。2007年から立ち上げたハイレゾ音楽制作UNAMASレーベルでは、2013年第20回日本プロ音楽録音賞に新設されたノンパッケージ部門で「黎明」が優秀賞を受賞。

亀川氏は、83年、NHK入局後、広島放送局を経て、放送センターで番組技術の音声業務を担当。2002年10月に東京芸術大学音楽環境創造科に就任し、録音や音響についての教育研究活動をおこなっている。CD、映画音楽、ゲーム音楽等のレコーディングにも携わっている。



視聴覚の 医学的研究から転身

沢口：Inter BEE 2013にスペシャルプレゼンターとして参加頂きありがとうございます。ご自分を紹介していただけませんか。

ルンド：まず、Inter BEEに参加できてとても嬉しく思います。これはとてもよい展示会ですね。私は元は医学教育と医科学の分野にいました。また、デンマークでは、ミュージシャン、そしてレコーディングエンジニアもしておりました。医学教育、特に聴覚と視覚を専門にしていました。オーディオの世界に入る前の数年間、病院で働き、研究を行っていました。

沢口：病院で働いていたのは何歳のときでしたか。

ルンド：28歳から31歳ぐらいの時です。90年代の初めに、TC Electronics社の設立者と出会い、その方とオーディオのことを多く話し合い、その後、彼の会社に勤めるよう招待を受け、現在に至ります。TC Electronicsで働くのは本当に面白いです。もう17年間くらい在籍しています。

沢口：現在はどのような事を専門にしているのでしょうか？

ルンド：今の正式な肩書きは最高技術責任者(CTO)ですが、最初は製品管理から始め、その後、研究や技術の責任者となりました。

沢口：TC Electronicsに、技術専門の職員は何人いますか？

ルンド：開発部には41~42人ほどいます。プロオーディオの会社にしては多いでしょうね。



ディストーション研究から 生まれたラウドネス

沢口：いつごろ、どのようにしてラウドネスに関わられたのですか。

ルンド：実を言うと、私はもともと音質のほうに興味がありました。90年代半ば、当時の多くの新しいPOPSは、すでに少しアグレッシブな音づくりがおこなわれていました。私たちは、そのような音作りの要望に応えられるエフェクターを開発していましたが、ユーザーの中には、この機器を用いて必要以上に音を大きく派手にする方がいました。そこで我々は、ユーザーがそのような過剰な使い方をしないようなガイドラインを作ることにしたのが、このラウドネスの問題に取り組み始めたきっかけです。

その時、作成時のレベル競争によってCDなどの再生機器側でディストーション(歪み)が生じていることを発見しました。これは97年頃の出来事で、私と同僚はこれについての論文を書いてAESで発表しました。これが、音量や録音の際のレベルやディストーションについての問題がAESの論文として出版された先駆けの一つだったと思います。

だからラウドネスは、派生的な問題であったのです。もちろんこの問題を解決することは最終目標ですが、私自身が最初に興味を持った直接の理由ではなかったのです。

我々は、このレベル競争の原因が、皆がわざと音を歪ませようとしていたわけではなく、他のCDよりも単に大きな音にしたいと考えていることだと理解し、そこで生じるピークがディストーションの原因であることを突き止めました。そして2000年ご

ろから、その点が私たちの研究のメインテーマになったのです。

沢口：印象に残っているのは、2000年にロサンゼルスで行なわれたAESコンベンションです。あなたのOdBFSオーバーレベルに関する論文発表を聞きました。興味深かったですね。OdBFSを超えていなくてもTrue-peakによって歪みが生じるといふ、新しい観点です。この論文には感心しました。(FSはフルビット・スケール)

ルンド：それはよかったです。



試行錯誤を続ける 日米欧の放送局

亀川：欧州では、いつごろからラウドネスの規制を始めたのですか。

ルンド：EBUがガイドラインを発行した少し後ですから、2008年ですね。欧州では、テレビの音に関しては大きな進歩を遂げていますね。これにより、平均レベルが下がり、より歪みが少なく聞きやすい音になっています。すでにいくつかのラジオ局も運用を試みていますが、今のところ主にテレビ局での運用です。ガイドラインの導入を制作者側は歓迎しています。これまでは音量に対してのルールが無かったので、例えばCMを作る際、これくらいの音量で十分なのか、大きすぎないかどうか誰もわからなかった。放送局ごとに視聴者がうるさいと感じないかといった程度の独自のルールしかありませんでした。これらは全く明確な根拠は無かったのです。だから新しいルールは、皆が何を解決すべきかを理解しているので、非常に明確だと言えます。

ルンド：残念ながら欧州にもまだ、ラウドネス規制を始めている国は数カ国あり、デンマークはその一つです。



デンマークの民放は早期に採用しましたが、NHKのようなデンマークの公共放送は遅れています。音質以外のことを優先したからでしょう。例えば、新しい局の建物を建設したり、効率化によって多くのスタッフを解雇しました。ラウドネスのような問題が重要だと考えるスタッフがなくなったのです。

東欧諸国の中でもポーランドは早かったのですが、ブルガリアをはじめとした数カ国がまだ遅れています。ただ、欧州全体的にみると、良い方向に向かっています。

亀川：日本と米国、欧州、3地域それぞれの方向性に違いはありますか。

ルンド：米国は通常の番組のレベルに関する明確な規正がありません。米国ではアンカーエレメントと呼ばれるアナウンスコメントやセリフをレベルの基準として測定することになっています。コマーシャル制作会社や広告代理店だけがBS1770の規定ののっとなって測定していますが、一般の番組ではこのアンカーエレメントを何にするか決めて測定する必要があります。音楽番組なら音楽の部分を、トーク番組やニュースなら話の部分だけを測定することになる。もちろんこれではあまり正確な測定はできません。そのため番組によってある人はこの部分が重要だと言うし、他の人は違う部分が大事だと言うため、番

組と番組の間でレベルジャンプをしてしまう。現在の米国状況はこのように番組ごとに違っているのです。

ラウドネス導入で苦情が減少

亀川：日本では2012年に始まったばかりで、特にCM制作においては、ターゲットレベルを-24LKFSにするのに苦労しているそうです。また、ミキサーがそれを実行したくとも、クライアントに理解を得られないという点もあります。制作側でなにか打開策はありますか。

ルンド：欧州で使われている-23LKFSは、それほど問題にはなっていません。以前のピークメータレベル管理でのミキシングと比べて1dBあるいは2dBほど小さくなる程度の違いです。ラウドネスメーターによるレベル管理は、ヘッドルームが十分確保されているため、エンジニアたちプロフェッショナルは喜んでますね。問題は、いくつかの局やエンジニアたちが、常に-23LKFSでないといけなくて誤解している点です。結局それではソーセージのような波形(编者注：日本で言う「羊羹波形」)になってしまいます。そうではなくミキシングの自由度が増すと考えてほしいですね。

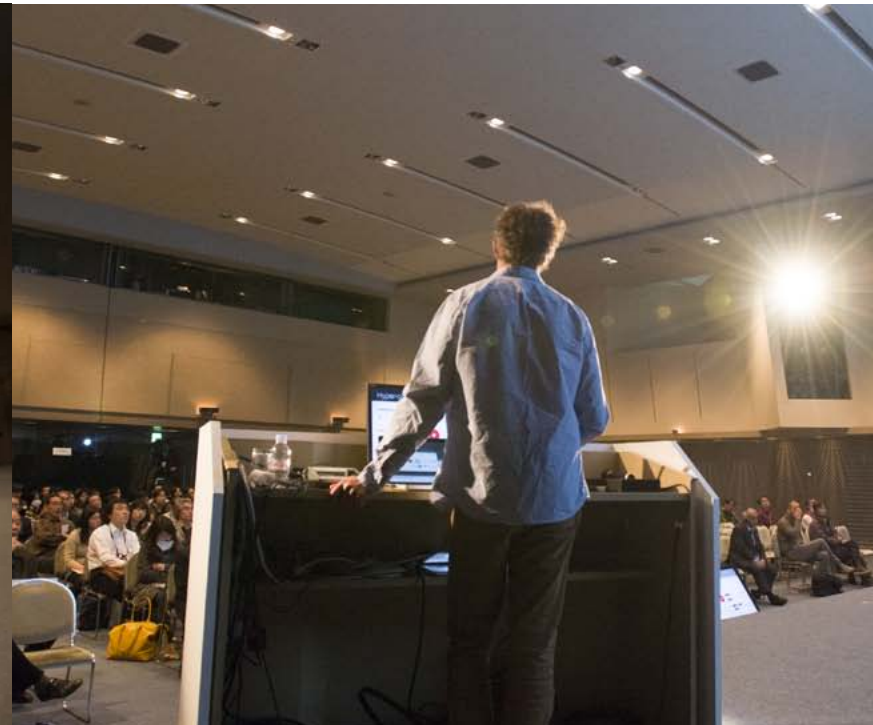
亀川：視聴者を対象に調査などを行った

事がありますか。新ルールを開始する前と後で何か違いがあったのでしょうか。

ルンド：私の会社では行なっていませんが、BBCといくつかのドイツの放送局で、そういった調査を行なっているようです。全体の印象では、ラウドネスのガイドラインによる運用を始めてからは、オーディオに対する苦情が60パーセントから70パーセントなくなりました。しかし、まだほかにも苦情があります。例えば、言葉が聞こえないという場合、それは言葉の音声レベルではなく、音声明瞭度が低いという点です。

亀川：日本の放送局では、レベルを規正する事と、番組制作上の表現の自由度との間でバランスをどうとるかが課題となっています。もっと議論する必要があるでしょう。米国と欧州諸国の状況についてはどう思われますか。

ルンド：欧州のソリューションは、一貫性のあるものだと思います。なぜなら、通常の番組でレベルが上がりすぎて下がりすぎても、問題となっている一部分をガイドラインに沿って直すだけです。一方、米国のように、通常の番組に決まった制限がないことは、放送局にとっては利点であるかもしれませんが、誰かがこの番組の音が大きすぎると、あるいは小さすぎると言っても、放送全体として解決する手段があり



ません。これは視聴者が抱えている問題を実際に解決することができないということです。

番組形態ごとのラウドネスガイドライン

亀川：講演のトピックは、ラウドネスレベルでしたが、その中でもふれられていたラウドネスレンジ(音量の幅)は今後の課題ですね。番組ごとのラウドネスレンジをどう管理すればいいでしょうか。

ルンド：ラウドネスレンジは、番組の音に関する客観的な特徴を記述するひとつの方法だと思います。オーディオの世界では、これまでこのような番組の音に関する記述語があまりありませんでした。どのように番組をミックスしたか、送信したか話し合うための共通の言語がないのです。だから、平均的ラウドネス、番組用ラウドネスなど、ラウドネスレンジといった用語ができたことは、制作サイドにとって便利なことだと思います。

ドラマなどでは、演出上の観点から、レンジを拡げることが求められる場合もあります。しかしラウドネスレンジをあまり拡げると、一般の聴取環境では、小さい音が聞こえなくなる場合があります。ただ、拡げすぎても狭くしすぎてもダメというこ

ともあり、それを最適に調整するためにスタジオでミキシングを行うのです。自動プロセッサですべての番組を機械的に調整するのではなく、番組ごとに最適なレンジに設定すべきだと思います。

亀川：欧州では、ニュースやドキュメンタリー、ドラマなど各番組に対してのラウドネスレンジのガイドラインを作る計画はあるのですか。

ルンド：EBUは、あまりに厳しい規制はなくてよいと判断しています。しかし、さまざまな番組に対するガイドラインはでてるでしょうね。特に、ドイツのいくつかの放送局は、様々な番組におけるラウドネスレンジを調査しており、どのような番組でラウドネスレンジをどの程度の値にすればよいか検討をおこなっています。欧州のガイドラインには、これらのドイツの結果が基本的な値として採用されると思います。ルールというより、EBUのガイドラインということですね。



規制の濫用が逆効果となる場合も

亀川：ラウドネスの将来、あるいはサウンドクオリティーの将来についてはどのようなビジョンをお持ちですか。その将来のために私たちは何をすべきでしょうか。

ルンド：現在ハイレゾリューションメディアが注目されていますが、その前にまず解決しなければならないのが、サウンドクオリティーの問題です。インターネット上のストアで手軽に高品質のサウンドを楽しむことができるようになったのはもちろん喜ぶべきことですが、実際には圧縮された低音質のサウンドのほうが、容量が少なく比較的容易にダウンロードすることができてしまうため、大部分の人は高音質の良さを享受することができていません。この問題を解決し、本物のサウンドを聴く喜びを人々に与えることができると考えています。

ラウドネスの規正や高圧縮は適切に使われるべきだと考えており、できればなくてもよいものだと思っています。可能ならいかなる規制も受けけない状況で問題なくよい音が聞けるような状況になればと思っています。

欧州ではCENELEC(欧州電気標準化委員会)という団体が設けた規制があります。これは聴覚ダメージを防ぐための規制で、もちろんこれ自体は悪いものではありませんが、問題はこの規制がiPodのような個人の音楽再生機器の再生レベルにのみ適用されていることです。電子的なゲインのみを規制すれば、メディアに録音される際の平均レベルを押し上げることに繋がり、制作側が音量で競い合う「音量戦争(ラウドネス・ウォー)」に陥ることを意味しています。このような馬鹿げたルールは避けるべきです。このような規制は、結果的にオーディオのクオリティーを損なっているということを理解すべきです。しかし、人々にこれらの問題に対して注意を喚起するには大変な努力を要します。先週私はロンドンでのCENELECのミーティングに参加してこの問題について議論しました。そこでは、この規制がこのように実際には悪影響を及ぼしていることにひどく驚いた様子でした。この問題を解決するためには、まだまだやらなくてはならないことがあります。



JPPC 2013「第一回 ポスト・プロダクション研修会議 2013」 米国最先端のプロ向け 映像制作トレーニングを日本で実施

日本人の向上心に感銘

Inter BEE 2013最終日の11月15日、NAB Showで9年間同時開催されている、プロフェッショナル向けのトレーニングイベントが開催された。「第1回 ポスト・プロダクション研修会議 2013」(英題: Japan Post Production Conference 2013 (JPPC 2013))と呼ぶこのイベントのために米国から3人の関係者が来日した。NAB Showで毎年実施されている一流講師陣によるセミナーを日本に居ながらにして、しかも逐次通訳つきで受講できるこのイベントに、多くのクリエイターが集まった。

今回登壇したジェフ・グリーンバーグ氏、リチャード・ハリントン氏と、このイベントの主催会社であるFuture Media Concepts社の共同創設者であるベン・コズチ氏の3人に、同イベントのねらいと特徴、日本での開催についての印象を聞いた。

インタビュー (写真左から)

Future Media Concepts Instructor
Jeff Greenberg
ジェフ・グリーンバーグ氏

Future Media Concepts President, Co-Founder
Ben Kozuch
ベン・コズチ氏

Future Media Concepts Instructor
Richard Harrington
リチャード・ハリントン氏

Q:みなさんのお仕事、 役割を教えてください。

〔ベン・コズチ〕 私は、共同創設者のJeff Rothbergとともに、1994年にFuture Media Concepts社を設立し、RothbergとともにPresidentとして運営に携わっています。Future Media Conceptsは、ニューヨークを拠点としており、デジタルメディア分野に向けてトレーニングを提供する会社です。今年で設立20周年を迎える事ができました。

我々のトレーニングスタイルは、2種類あります。1つは、米国7カ所にある当社のトレーニングセンターで、少人数グループで3日間の集中ハンズオンコースを受講してもらう方法です。このコースは、AppleやAvid、Adobe、Autodeskからトレーニングセンターとしての承認を受けており、これらの製品を中心に学ぶことができます。

もう1つのスタイルは、展示会などイベントでトレーニングを開催するものです。今回のInter BEEもそうですが、イベントでのトレーニングは大人数を対象として、大型スクリーンを前に、さまざまなトピックスを紹介します。内容は、コンテンツクリエイション、プロダクションなどワークフローに沿ったトレーニングをします。会場も大きいのでカンファレンスのような形となりますが、ハンズオンセミナーの要素を取り入れるようにしています。

我々にとって最も大きなイベントは、毎年4月にラスベガスで開催されるNAB Showです。NABとはパートナーシップ協定を結んでおり、NAB Showでのトレーニング開催は2014年で10年目となります。毎年規模も大きくなっています。2013年の開催の際には、トレーニングルームを13室確保し、5日間通して200以上のセッションを行いました。参加者も1,500名を超えています。



〔ジェフ・グリーンバーグ〕 私は、Future Media Conceptsのインストラクターの1人であり、また個人でThe Editor's Retreatというイベント業も手がけています。以前は映画製作に携わっていました。しかし、父親が病気となり、自分が不規則な生活を続けるには父親のことが心配で、映画製作の仕事から退職しました。代わりに今まで映画製作に携わって培ってきた知識を教える職業につこうと思ったのです。その思いは実現し順調に進みました。

Richardと私は、マスターインストラクターという資格を持っています。マスターインストラクターとは、AdobeやApple、Avidから、ほかインストラクターの教育を任されているということです。

それぞれのツールについての我々の意見も、取り入れられています。

〔リチャード・ハリントン〕 私は、放送局でニュース番組のディレクターとして働いていました。しばらくニュース番組で働いたのち、私は健康に関するNPO法人で、メディアやデジタルツールを駆使して、情報発信や教育などコミュニケーションの促進をする仕事に従事しました。私は、家族みな教育者であるという環境に育っています。妻も教育の仕事についています。そのような状況の中、今から13~14年ほど前に、Benがカンファレンスで壇上に立つことを提案してくれ、今まで続いています。今は、長い期間に培った知識を人々の役に立てたいと思っています。





「よりよい映像づくりのため」4つのテーマを厳選

Q: 今回のInter BEEでは、お二人ともそれぞれ2項目選ばれましたね。

Greenbergさんは、ビデオ圧縮とカラーコレクションを、また、Harringtonさんは、Adobe Premier Proとカメラトラッキングについてですね。どのようなねらいでこれらのテーマを選ばれたのでしょうか?

[ジェフ・グリーンバーグ] 私がテーマに挙げたのは、ビデオ圧縮技術とカラーコレクションについてです。ビデオ圧縮のほうは、計算式を行わない画期的なものです。

ビデオ圧縮は、編集者にとっては非常に難しく、ブラックボックスの中のことです。たまにビデオ編集者から「ボタンは押しているが、それが実際に何を処理しているのかよくわからない」というぼやきを聞きます。私はもっと理解しやすいようにしたいのです。

カラーコレクションも同様で、編集者はいくつかのツールを使用します。しかし、結局のところ、あまりよりよい使い方がわかっていません。修正をかけ、こんな感じの見栄えでよいか、で終わります。しかし、それが本当によい結果なのかどうか、本人達もわかっていません。

私は、なぜそれがよい結果と見えるの

か、あるいはそう見えないのか、を理解してもらいたいです。ビデオ圧縮とカラーコレクションの技術は、ビデオ編集者にとって、一番最初に必要となる知識です。見栄えある素晴らしい編集が終わり、ほかの人に渡ってもさらに見栄えある素晴らしい作品を作る。そのためにこの2項目は重要であると思い、今回選択したわけです。



[リチャード・ハリントン] 私が担当した2つのセッションの1つめは、Adobe Premier Proについてです。Premier Proは、この2年ほどでビデオ編集への普及が加速してきました。しかし、編集者は、

まだ扱いに苦労している部分があるようです。よって、まずは正しいスタートの方法から、キーの違いまで解説していきます。

2つめは、カメラトラッキングです。カメラトラッキングはご存知のように、コンピュータがビデオ撮影時のカメラ位置を自動計算します。それにより、テキストやロゴなど、撮影時に実在していなかったもののインサートができ、あたかも実在していたかのように見せかける事が可能です。また、例えばスケートボードをやっている人に設置されたカメラでの撮影など、かなりな手ぶれを起こしている素材に対しても、手ぶれを軽減し観やすることができます。



プロほど、さらにどん欲に学ぶ姿勢

Q: 日本のクリエイターに対してどのような印象がありますか?

[ジェフ・グリーンバーグ] この分野で活躍している人たちは、情熱を持ち、自分のイメージを熱く語り、聞いている者を惹き付けるので楽しかったです。

実は、以前は、異国間の創造性に微妙に違う点があるのではないかと推測していました。我々が少し違う観点から話をしてみてディスカッションを行った結果、結局は、それほどの違いがないという理解にたどり着いたのです。

プロフェッショナルな人たちは、プロフェッショナルです。それぞれさまざまな異なったチャレンジを行ってきた経緯があります。しかし面白いことに、熱心なプロフェッショナル達はさらにどん欲に学ぶ姿勢を持っているということです。さまざまな国の人と接してきましたが、日本人ほど感性が強く、またスキルアップに熱心な人種には今まで出会った事

がありません。だから、インストラクターとして、生徒が非常に熱心であることは喜びを感じます。

[リチャード・ハリントン] 今回、ショーフロアでプレゼンテーションを行った際、いくつか受けた質問に感銘を受けました。非常に賢い点をつけてくるのです。このように、ほんのちょっと日本人に接しただけで感銘を受けているのに、例えば映画の世界では、私は黒澤明監督を尊敬しています。黒澤監督のほとんどの作品を観ましたが、特に7人の侍、赤ひげ、天国と地獄を気に入っています。そのような監督を生み出した日本を今回訪問することができ、日本の文化に触れるチャンスを頂きました。自分の人生にとって、非常に重要な出来事となりました。

今回のInter BEEへの参加、そして日本のみなさんとお会いできた事が、我々にとっても非常に有意義なよい経験でした。嬉しく思っています。

Q: 今後の展開、ご計画についてお話しください。

[ベン・コズチ] 今回のInter BEEでのトレーニングセッションは、ほんとうに素晴らしいものでした。しかし、それに加えて日本のクリエイターの方々にも、ぜひNABのセッションにも訪れてみていただきたいものです。今回のInter BEEでのトレーニングセッションは、ほんの一握りのものです。NABで5日間を通して体験することは、クリエイターにとって非常に有意義な経験になると思います。



Japan Post Production Conference 2013

第1回 ポスト・プロダクション研修会議 2013 11.15 金 国際会議場1階「103会議室」 日英逐次通訳付 有料

今回はNAB Show 2013で展開した全185のプログラムの中から、特に人気の高かったトピックスを厳選して開催いたしました。

セッション-1	● アドビ・プレミア・プロ CC の最適活用法 :	リッチ・ハリントン
10:00 ▼ 11:30	ファイルを使ってメディアや作業内容を自由自在に整理する方法、アドビ・ダイナミック・リンクやネイティブ・グラフィック・サポートなどの機能によってワークフローのスピードを向上させる方法、ダイナミック・トリミング、マルチ・カメラ編集やオーディオ・ミキシングのような人気の高い機能の使用などアドビ・プレミア・プロの多彩な機能を解りやすく解説しました。	受講対象: アドビ・プレミア・プロを創造的且つ効率的に活用したいと考えている編集者やモーション・グラフィックのプロ
セッション-2	● プロのための画像圧縮技術 :	ジェフ・グリーンバーグ
12:40 ▼ 14:10	配信動画の見栄えを良くする方法、動画圧縮に関する最も重要なルールは何かなど圧縮技術の基礎から動画の最終的な仕上がりを向上させるための実用的なテクニックを講義しました。	受講対象: あらゆる種類のオンライン・メディアの発行に関し、圧縮技術を学びたいと思っている全ての人々
セッション-3	● カメラのトラッキングやスタビライジング :	リッチ・ハリントン
14:20 ▼ 15:50	スムーズで安定した動画を撮影するための実用的な技術や、トラッキング・マークの設定方法、スムーズ・カムやワーブ・スタビライザーなどの人気の高いノンリニア編集ツールや視覚効果ツールを使ってよりスムーズな動画を撮影する方法、などを学びます。さらに対象物のトラッキング方法やカメラのトラッキング方法を学び、そのデータを活用してシーンに対象物やテキストを挿入し、正確な合成やモダンな視覚的アプローチを実現する方法について講義しました。	受講対象: 編集者およびVFXのプロ
セッション-4	● ノンリニア編集における色補正の秘訣 :	ジェフ・グリーンバーグ
16:00 ▼ 17:30	どのような編集システムを使用している場合でも、色補正で最高の品質を実現する方法を講義します。またあらゆる編集ツールにおいてプライマリー・カラー・グレーディングを行う上での重要な要素やスコープの使用法についても学びました。	受講対象: RGBバレードを始め色補正の知識に自信のない全ての編集者

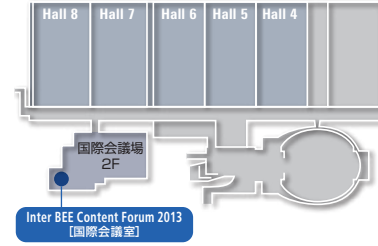
主催: 協力: 協力:

Inter BEE Content Forum 2013

会場：国際会議場2階 国際会議室
企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

次世代のコンテンツ ~信頼と創造~

国内外から映像・音響各分野で活躍する第一人者をプレゼンターに迎え、ユーザー・エクスペリエンスによって変わるコンテンツビジネスの最新動向を議論しました。



基調講演

11:00 ▶ 12:00

放送サービスの高度化に向けて

11.13
(水)



南 俊行 氏
総務省 官房審議官(情報流通行政局担当)

特別講演1

13:00 ▶ 14:30

ラウドネス・コントロールがもたらす オーディオ業界の変革

11.13
(水)



トーマス ルンド 氏
TC エレクトロニクス社 チーフテクニカル・オフィサー

特別講演2

HTML5時代における動画配信の最新動向

14:45 ▶ 16:05 Session 1

HTTPによる配信規格『MPEG-DASH』の解説

(第一部)
MPEG-DASH -
その誕生の背景と目的



丹羽 博幸 氏
NTTエレクトロニクス株式会社 デジタル映像・システム事業本部
マルチメディアシステム事業部 メディアソリューション部門 部門長

(第二部)
HTTPダイナミック・
アダプティング・
ストリーミング



マイケル ルービー 氏
クアルコム 技術担当副社長

11.13
(水)

16:10 ▶ 16:45 Session 2

注目のHTTP動画配信技術の応用例

(第一部)
プレイリスト編集による
即時動画クリップ作成



高野 雅晴 氏
株式会社ビットメディア 代表取締役社長

(第二部)
スポーツ演技の
映像分析に役立つ独自開発



宮地 力 氏
国立スポーツ科学センター
スポーツ科学研究部 副主任研究員

17:00 ▶ 18:15 パネルディスカッション

HTML5時代の動画配信の可能性と技術課題

モデレーター パネリスト



村井 純 氏
慶應義塾大学
環境情報学部長・教授



"Hybridcast"
武智 秀 氏
日本放送協会
放送技術研究所
ハイブリッド放送システム研究部
主任研究員



"JoinTV"
安藤 聖泰 氏
日本テレビ放送網株式会社
編成局メディアデザインセンター
メディアマネジメント部



"マルチスクリーン型
放送研究会"
濱口 伸 氏
株式会社毎日放送
経営戦略室
副部長



"マルチメディア放送
(V-Low)"
仁平 成彦 氏
株式会社エフエム東京
マルチメディア放送事業本部
副本部長

11.13
(水)

招待講演1

10:30 ▶ 11:30

放送ならびにメディア産業に於いて、 要となるビジネス展開と技術の進歩

11.14
(木)



ジョン アイヴ 氏
Director of Business Development and Technology
IABM

招待講演2

10:30 ▶ 12:00

SETの現状と産業の未来ビジョン

ブラジルのデジタルTV:その過去、現在、未来

11.15
(金)



オリビオ ホセ フランコ 氏
SET会長



フェルナンド ビッテンコート 氏
グローバルネットワーク 技術最高責任者

招待講演3

12:15 ▶ 13:00

4K-ライブTVワークフローのための 最適化されたストレージアーキテクチャとは

11.15
(金)



チャールズ セボア 氏
EMC Isilon Asia Pacific and Japan Regional HQ CTO



映像シンポジウム

13:00 ▶ 16:40

新たな放送メディアサービスの現状と今後の展開 ～スーパーハイビジョン(4K、8K)・スマートTV・ラジオのコンテンツへの期待～

●司会・進行



為ヶ谷 秀一 氏
女子美術大学 大学院 教授



國重 静司 氏
株式会社NHKアート 取締役

13:00 ▶ 15:30 第一部:プレゼンテーション

①“放送1世紀”に向けて～4K・8K・スマートテレビ時代への期待と課題～



元橋 圭哉 氏
一般社団法人次世代放送推進フォーラム

④マルチスクリーン型放送サービスで変わるテレビ広告



今谷 秀和 氏
株式会社電通 関西支社 テレビ局 局長

②スーパーハイビジョン(4K、8K)のコンテンツ制作について



一色 隆司 氏
株式会社NHKエンタープライズ 制作本部 ドラマ番組
エグゼクティブディレクター

⑤デジタル時代におけるラジオサービスについて



香取 啓志 氏
株式会社radiko 配信技術室長 兼 メディアセンター長

③NHKはなぜハイブリッドキャストを始めるのか



梶原 知久 氏
日本放送協会 編成局 編成センター 編成主幹

16:00 ▶ 16:40 第二部:パネルディスカッション

各プレゼンター、来場者による、スーパーハイビジョン(4K、8K)・スマートTV・ラジオのコンテンツへの期待についてのディスカッション

11.14
(木)

音響シンポジウム

13:30 ▶ 16:40

ラウドネス運用一年目の実際と課題

●司会・進行



沢口 真生 氏
沢口音楽工房 サウンド寺子屋塾 代表
Fellow AES/IBS



亀川 徹 氏
東京芸術大学 音楽学部
音楽環境創造科 教授

13:30 ▶ 14:10

ラウドネス運用は成功したか?

入交 英雄 氏
株式会社毎日放送 放送運営局 送出部 マネージャー



14:20 ▶ 15:00

今改めて“ターゲットラウドネス値を 目標にミックスする”事の意味を考える

野呂 博 氏
株式会社テクニカランド 技術部 技術部長



15:10 ▶ 15:50

ポストプロダクションからみた ラウドネスとMIXING:名古屋の現状

澤田 弘基 氏
株式会社東海サウンド



16:00 ▶ 16:40

ラウドネスメータ運用の現状

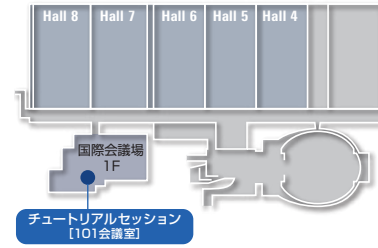
南澤 貞巳 氏
株式会社東海テクニカ 営業第一部 主任



Inter BEE チュートリアルセッション

会場：国際会議場1階 101会議室
 企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)

放送業界、映像・音響業界で働く若手、さらにこれらの分野に関心を持っている大学、専門学校の学生などを対象に、第一線で活躍する講師陣が、最先端技術動向、最新機器・システムの活用法、コンテンツ制作手法などを伝授しました。



音響セッション 現場で役立つ音響制作技術者のための基礎知識

有料：1セッション2,000円(消費税込)
 2セッション3,000円(消費税込)

11.14
(木)

13:00 ▶ 14:30

セッションA ビデオカメラマンやDSLRカメラでの高品質ロケ音声収録技法

1 カメラの小型化で映像は、進歩したが音が良くないのはなぜか?その原因など
 2 カメラ内蔵マイクでは、どうして良い音がとれないのか?
 3 ではどうするか?外部入力を使うには?
 ビンマイクでのインタビュー方法と注意点/ワイヤレスマイクの使い方/仕込みマイクの付け方とノイズ対策/簡易ブームマイクとの併用/本格的なブームマイクとノイズ風防対策 参考:土方流の収録プランをケース別で紹介 ポストプロであればべんりなノイズ除去プラグインとか izotope nuendoなど あったら便利なアクセサリや小型MIXER TEAC 4CH/レコーダZOOMH-6 DSLRカメラとの接続など、別録音した音と映像の編集例



フリーランス サウンドエンジニア
 一般社団法人日本映画テレビ技術協会会員 土方 裕雄 氏

15:00 ▶ 16:30

セッションB ポストプロの視点から見たファイルベースワークフロー・システムの運用と構築

映像・音声制作において、ファイルベースメディアが活用される機会が年々増えています。一方、テープメディアを中心としたフローが主流で、ファイルへの移行はこれからという作品分野も存在します。既にファイル中心、これからファイルに移行と様相ですが、今後ファイルベースワークフロー・システムを運用・構築していく上での考え方のポイントについて、ポストプロダクションの視点から整理し解説しました。



株式会社IMAGICA 技術推進室 システムソリューションチーム
 ワークフロー/システムコーディネーター 菊田 和弥 氏

映像セッション 現場で役立つ映像制作技術者のための基礎知識

有料：1セッション2,000円(消費税込)
 2セッション3,000円(消費税込)

11.15
(金)

13:00 ▶ 14:30

セッションC 4Kメディアのそもそも～デジタルシネマ4Kの今昔～

すでに全世界で2万スクリーンが4K対応となっているデジタルシネマの規格策定に至る経緯と技術的背景を紹介するとともに、今後の4K映像制作、配信、表示に関わる技術的問題点と課題について詳細に解説を行いました。特に、映像を構成する色信号のビット幅、サブサンプリング、そしてコントラストの問題について実例を交えながら4Kメディアの今後について解説しました。



米国SMPTE テクニカルコミッティーメンバー 川上 一郎 氏

15:00 ▶ 16:30

セッションD これから始めるHTML5のコンテンツ制作と実例

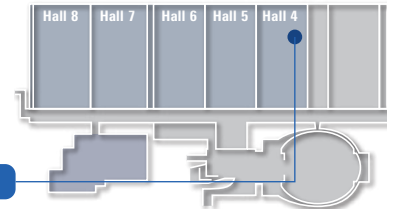
本講演はHTML5の基礎を理解し、HTML5に準拠しているウェブページを作成できるようにすることを目標とします。新規に追加された要素などを使って、簡単なウェブページのサンプルを作成しながら学んでいき、講演の前半ではHTML5の基礎を紹介し、HTML4とHTML5の違いをわかりやすく説明しました。また講演の後半では、新規に追加された要素を使って、簡単なウェブページの作成例を紹介しました。



株式会社アスキングシステム開発部 チーフ マーロン・ナンピー 氏

ラウドネスワークショップ

会場：展示ホール4
 後援：一般社団法人電波産業会、一般社団法人日本民間放送連盟、CMサウンド研究会
 協力：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会



制作現場におけるレベル管理の現状と課題

ラウドネスの運用が始まって約1年。音声制作現場では何が変わったのか。制作現場に問題点はないのか?音量感はそったのか?生放送、番組、CMの現場技術者が現状を報告。それぞれが持つラウドネスのノウハウや問題点を共有し、より質の高い音声制作を目指すために情報発信しました。

Session 1「ラウドネスの基礎」

ラウドネスとは何か。導入経緯、目的、知っておかなければいけない技術的内容をデモを交えてわかりやすく解説するラウドネス入門篇。
 講師：村越 宏之 氏(IMAGICA)

Session 2「ラウドネスの実際1『生放送』」

スポーツ中継、音楽番組、ワイドショーなど、生放送の現場ではラウドネスをどのように管理しているのか。現場のエンジニアから生のノウハウを聞く。
 講師：松永 英一 氏(フジテレビ)、飯島 康生 氏(テクノマックス)
 中村 寛 氏(WOWOW)、清水 秀明氏(日本テレビ)

Session 3「ラウドネスの実際2『番組』」

ポストプロダクションでMA作業を行う番組、特に特番などの長尺番組に焦点を当て、ラウドネス規定に準拠するミキシングノウハウや現状を探る。
 講師：濱田 豊氏、飯森 雅允 氏(東京サウンドプロダクション)

Session 4「ラウドネスの実際3『CM』」

短時間に情報を凝縮しより高い広告効果を追求するCM。ラウドネス導入でCMのミキシング現場はどう変わったのか。現状と対策を検証する。
 講師：村越 宏之 氏(IMAGICA)

Session 5「パネルディスカッション『Loudness NOW』」

生放送、番組、CM制作に携わるエンジニアが、それぞれの立場からラウドネスの円滑運用に向けてディスカッションを行う。
 講師：Session1～4にご登壇のみなさん

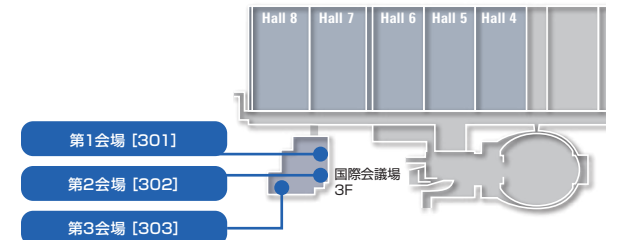
タイムスケジュール

11.13(水)	11.14(木)	11.15(金)
11:00 ▶ 11:40 Session 1	11:00 ▶ 11:40 Session 1	11:00 ▶ 11:40 Session 3
14:30 ▶ 15:10 Session 2	13:00 ▶ 13:40 Session 2	11:50 ▶ 12:30 Session 4
15:20 ▶ 16:00 Session 3	14:00 ▶ 14:40 Session 3	
16:05 ▶ 16:45 Session 4	15:00 ▶ 15:40 Session 4	
16:50 ▶ 17:30 Session 5	16:00 ▶ 16:40 Session 5	

第50回 民放技術報告会

会場：国際会議場3階
 主催・企画：一般社団法人日本民間放送連盟 (JBA)

技術報告	第1会場 [301号室]	第2会場 [302号室]	第3会場 [303号室]
11.13(水)	10:30 ▶ 16:20 送出部門	10:30 ▶ 15:05 ラジオ・音声部門 15:30 ▶ 16:20 画像技術部門	10:30 ▶ 14:15 データ放送・デジタルサービス部門 14:40 ▶ 16:20 情報・ネットワーク部門
11.14(木)	13:30 ▶ 16:00 ◆特別企画		11:00 ▶ 12:00 ◆関連企画
11.15(金)	10:55 ▶ 16:20 制作技術部門	10:30 ▶ 15:55 送信部門	10:30 ▶ 16:55 回線・伝送部門



関連企画 第3会場 [国際会議場303号室]

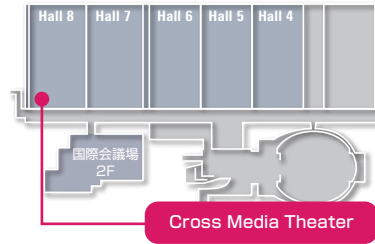
11.14(木) 11:00 ▶ 12:00
民放連技術規準T031改正内容説明会

特別企画 第1会場 [国際会議場301号室]

11.14(木) 13:30 ▶ 16:00
新たな撮影技術への取組み ～4Kの現在と展望～

Cross Media Theater

会場：展示ホール8
 企画：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会



11.13(水) 10:30 ▶ 12:00

V-LOWデジタル・コミュニティ放送協議会&IPDCフォーラム共同企画 「2020年にオリンピック・ラジオを立ち上げる」

渡辺 克也 氏
 総務省
 大臣官房審議官
 (情報流通行政局担当)



木村 太郎 氏
 Community Simul Radio Alliance(CSRA) 代表
 逗子・葉山コミュニティ放送株式会社
 代表取締役



中村 伊知哉 氏
 IPDCフォーラム 代表
 慶應義塾大学 大学院
 メディアデザイン研究科 教授



11.13(水) 13:00 ▶ 17:30

デザイン エクストリーム セミナー (DEXS) in Inter BEE

詳細レポートはこちらから ▶ <http://dexs-dexs.jp/>

【セッション1】13:00-14:00

「福岡から世界へ！
 KOO-KIの江口カンが語る、東京2020オリンピック・パラリンピック国際招致PRフィルム
 『Tomorrow begins』と連続TVドラマ『めんたいびりり』」

江口 カン 氏
 映像ディレクター／
 KOO-KI 代表



【セッション2】14:30-15:30

「連続TVドラマ『Woman』はこうして作られた！
 演出家・水田伸生とVFXスーパーバイザー・オダ イッセイが紐解く、TVドラマの未来形」

水田 伸生 氏
 演出家／
 日本テレビ放送網株式会社 制作局 専門局次長



オダ イッセイ 氏
 VFXスーパーバイザー
 株式会社ナイス・デー 常務取締役



【セッション3】16:00-17:00

「ハリウッドからクリーチャー・ディベロッパーの山口圭二が来日講演！
 ギレルモ・デル・トロ監督による映画『バシフィック・リム』のビハインド・ザ・シーンを解説」

山口 圭二 氏
 クリーチャー・ディベロッパー／
 ILM



11.15(金) 13:00 ▶ 14:30

IPDCフォーラムセッション
 「パーソナルデバイスによるテレビ視聴 (moreTV) の現状と今後」
 ～インターネットを飲み込み始めた米放送業界の逆襲！
 彼らの「あらゆる視聴デバイスでテレビ番組を！」戦略の現状や、
 国内での新たな取り組みなどをご紹介～

- 「全体趣旨説明(なぜ今このテーマなのか)」 今谷 秀和 氏(電通関西支社 テレビ局 局次長)
- 「海外における先進事例の紹介」 杉沼 浩司 氏(日本大学生産工学部講師/映像新聞論説委員)
 田中 勇樹 氏(IPDCフォーラム調査員)
- 「国内における先進的な取り組みの紹介」 保田 歩 氏(ガラポン株式会社 代表取締役)



Asia Contents Forum

アジアから世界に向けてのVFX動向をキャッチアップ！ アジアにおけるコンテンツビジネスの最前線をマレーシアの巨大メディアに何うの皮切りに、日本の最先端ポストプロダクションワークの紹介、大河ドラマ「八重の桜」における、ドラマ制作を超えた福島復興への想いまで網羅!!
 加えて、ハリウッドをはじめ世界のトップクリエイターが参加するVFXソサエティ「VES」やVFXプロダクションの方々をお招きし、VFX最前線のお話を伺いました。また、昨年同様、CG・VFXスタジオのリクルーティングブースを設置しました。
 業界の人材交流を目的としたCREATORS NIGHTも開催しました。クリエイターの方のみならず、映像業界の皆様にもプラスになるフォーラムをお贈りました。

結城 崇史 氏



Inter BEE アジアコンテンツフォーラムディレクター

11.14(木) 11:00 ▶ 12:00

「アジアのメディアビジネス最前線」 "The Malaysian Content Landscape."

powered by TBS DigiCon 6



Ms. Marini Ramlan
 HEAD, CONTENT INNOVATION, PRIMEWORKS STUDIOS



11.14(木) 12:30 ▶ 13:30

「Visual Effects Society」



Ms. Rita Cahill
 International Outreach Officer, Visual Effects Society (VES)

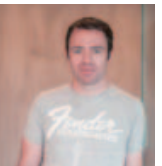


11.14(木) 14:00 ▶ 15:30

VFX "Now and Future" 「メソッドスタジオ × ダブルネガティブ」



Mr. Jason Schugaradt
 VFX Supervisor, Method Studios



Mr. Stuart Farley
 Head of 3D,
 Double Negative Singapore

11.14(木) 16:00 ▶ 17:30

一般社団法人日本ポストプロダクション協会 (JPPA) 会員 作品事例&メイキング

- ①「高解像度球体映像制作に関するソリューション」: オムニバス・ジャパン 今村 和宏 氏(技術開発部 部長)
 山本 信一 氏(コンテンツプロダクションセンター クリエイティブディレクター)
- ②「リアルタイムレンダリングとHMDによる、イメージシミュレーション」: デジタルガーデン 高橋 和也 氏 (CGI部 CGIプロデューサー)
 雲海 達志 氏 (CGI部 CGIデザイナー)
- ③「異機種間カメラ撮影後の色空間統一による、VFXムービー制作」: マックレイ 熊倉 春陽 氏(映像プロデュース部 クリエイターチーム ディレクター)
 黒部 尊仁 氏(制作技術部 テクニカルチーム カラリスト)
 前田 大輔 氏(制作技術部 テクニカルチーム)

11.15(金) 10:30 ▶ 12:00

「福島『八重の桜』プロジェクト」 ～東北復興への想い



内藤 慎介 氏
 日本放送協会
 制作局第2制作センター(ドラマ番組部)
 制作統括



菅山 明美 氏
 株式会社NHKエンタープライズ
 企画開発センター
 事業開発 部長



江川 忠 氏
 会津若松市
 八重の桜プロジェクト対策室
 室長



Production & Creator's Night at Inter BEE 2013

11.14(木) 17:30 ▶ 19:00 幕張メッセ 展示ホール 8 Cross Media Theater 内

映像機器のみならず、最新の映像作品そのものにも親しんでいただくために、日本を代表するCG・VFXプロダクションの皆様と、デジタルCG・VFXクリエイターとの交流パーティProduction & Creator's Nightを開催しました。



Result: Visitor Profile



■日別来場者内訳

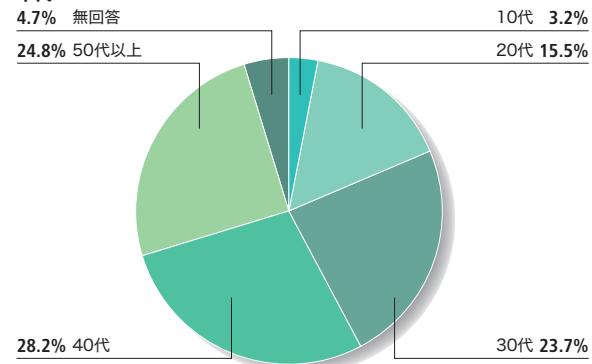
	11/13(水)	11/14(木)	11/15(金)	合計
国内登録来場者数	10,303	10,297	10,483	31,083
海外登録来場者数	603	222	71	896
合計	10,906	10,519	10,554	31,979

■登録来場者数の内訳

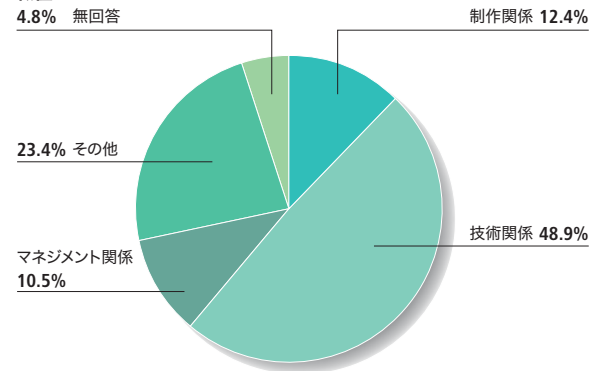
エリア	国・地域数/来場者数	国・地域別の来場者数
日本国内	1カ国/31,083名	日本 31,083名
アジア地域	12カ国・地域/729名	韓国 418名/台湾 75名/タイ 71名/中国 58名/インドネシア 36名/シンガポール 27名/香港 20名/フィリピン 10名/インド 5名/マレーシア 5名/スリランカ 3名/バキスタン 1名
北中南米地域	5カ国/86名	アメリカ合衆国 73名/カナダ 1名/ブラジル 10名/ペルー 1名/パラグアイ 1名
ヨーロッパ地域	10カ国/42名	イギリス 14名/フランス 7名/ドイツ 5名/ノルウェー 5名/スウェーデン 2名/オランダ 2名/イタリア 2名/ポルトガル 2名/エストニア 2名/オーストリア 1名
中東・アフリカ地域	6カ国/10名	イスラエル 2名/UAE 2名/リビア 2名/ナイジェリア 2名/コンゴ 1名/エジプト 1名
大洋州地域	1カ国/8名	オーストラリア 8名
不明		21名
	35ヶ国・地域	31,979名

◆来場者の属性

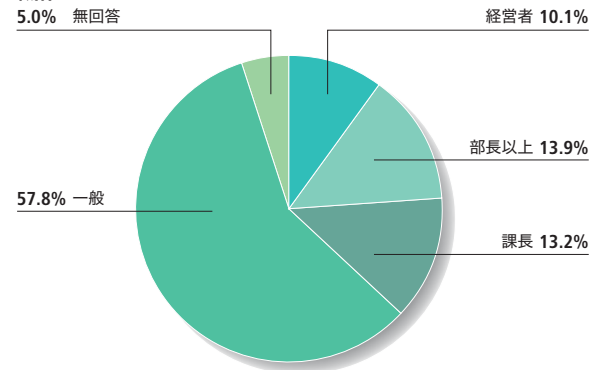
■年代



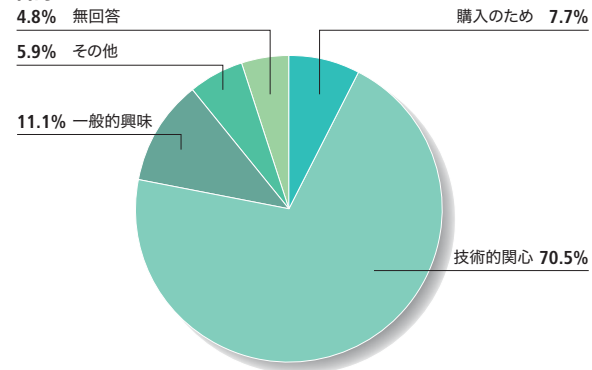
■職種



■職階



■目的



■業種

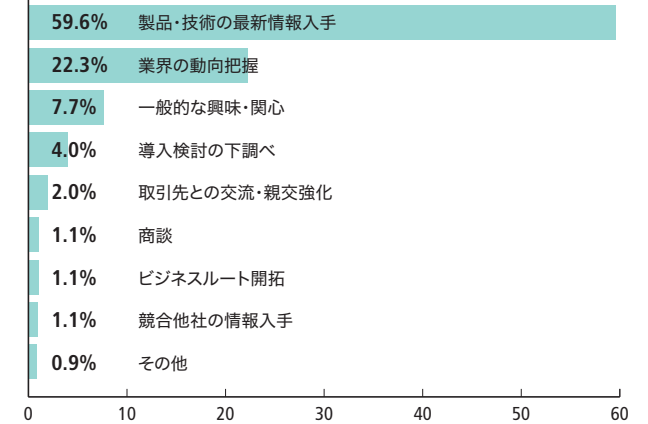
放送機器メーカー	13.6%	舞台・演出・美術・照明関連	2.6%
民間放送テレビ局	8.9%	コンテンツ制作関連	2.6%
商社	8.9%	CATV関係	2.4%
ポストプロダクション	7.9%	インターネット関連	2.2%
学生	7.2%	施設・店舗関係	1.6%
その他ゲスト	5.9%	官公庁・団体	1.6%
ビデオソフト制作会社	5.5%	映画・映像制作会社	1.2%
その他ユーザ	5.4%	広告代理店	1.0%
プロダクション	4.6%	コンテンツ配信事業者	0.9%
PA関係	3.8%	民間放送ラジオ局	0.8%
NHK	3.1%	レコード制作会社	0.7%
通信事業者	2.9%	無回答	4.6%

■関心(複数回答)

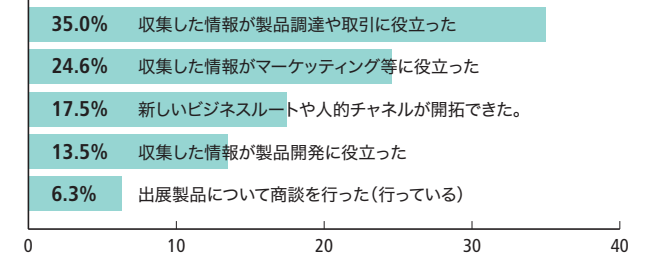
映像機器全般	52.9%	送出システム	8.2%
オーディオ機器全般	32.4%	デジタルシネマ	8.0%
カメラ	26.1%	マルチメディアシステム	7.9%
編集・制作装置	20.5%	送信システム	7.9%
映像モニタ	15.4%	各種特機・周辺製品	7.4%
ミキサ	12.0%	IPTV関連	7.2%
スピーカ	10.9%	3D	6.5%
ソフトウェア	10.8%	Mobile TV関連	5.9%
VTR・メモ리카ード・光ディスク	10.7%	測定機器	5.8%
マイクロホン	10.6%	製作管理システム	4.1%
サーバ・ストレージ	10.2%	電源装置	3.5%
中継システム	10.0%	美術・舞台演出関連	3.4%
デジタルサイネージ	9.0%	その他	2.1%
デジタルコンテンツ	8.8%	無回答	4.8%
照明機器	8.4%		

2013年来場者アンケート

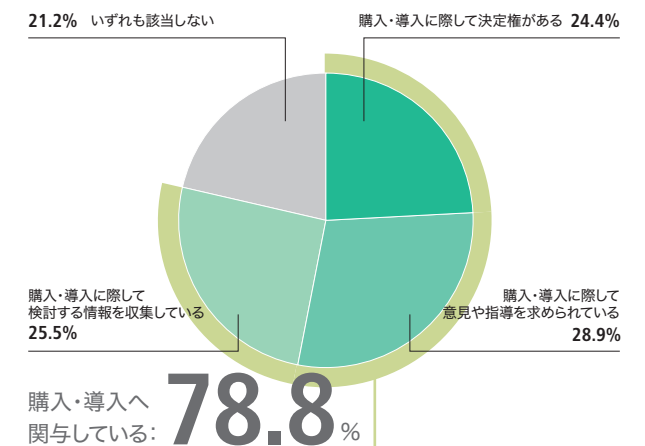
◆『Inter BEE 2013』にご来場された目的を教えてください。(複数回答)



◆『Inter BEE 2013』を見学して、その後のビジネスに役立ちましたか。(複数回答)

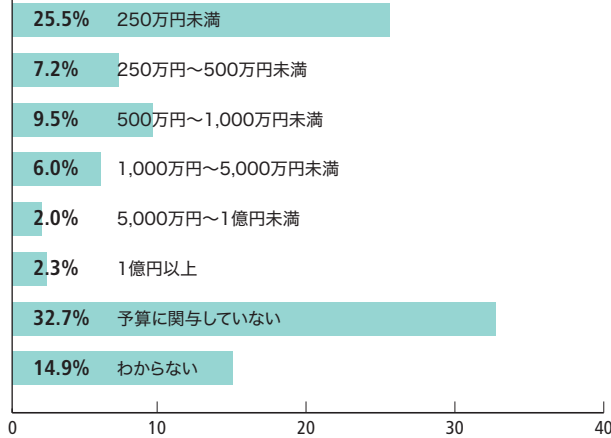


◆御社での製品・サービスの購入・導入にあたって、あなたはどの程度関与されていますか。

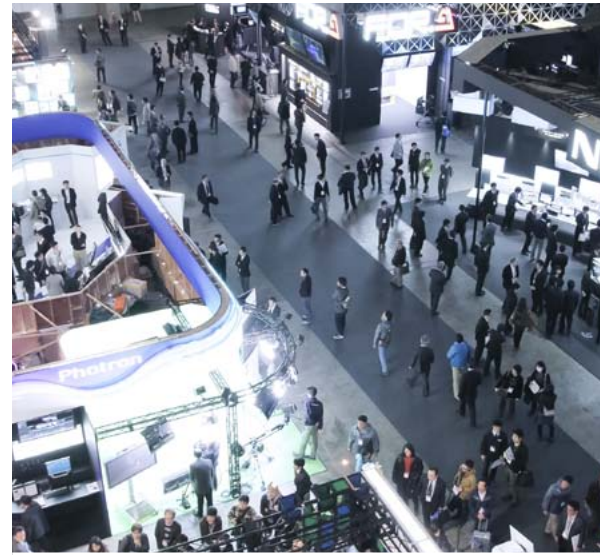
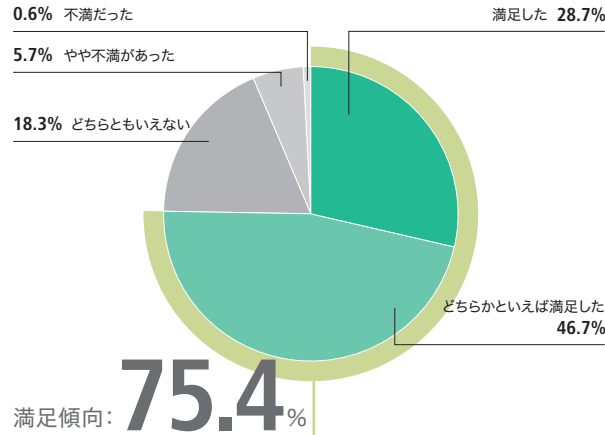


2013年来場者アンケート

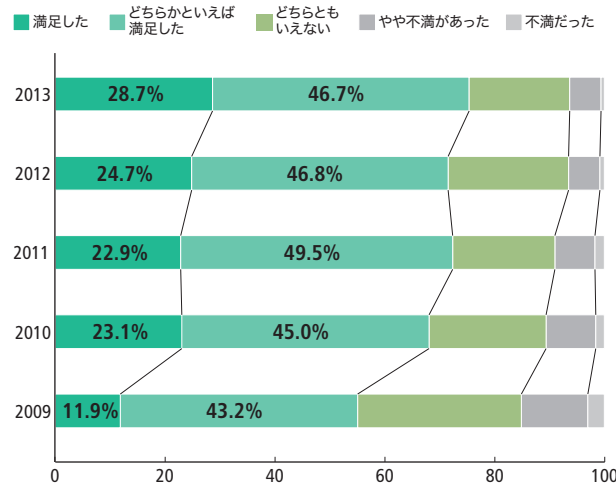
◆あなたが関与する製品・サービスの購入・導入に対する予算は、おおよそ年間いくらくらいですか。



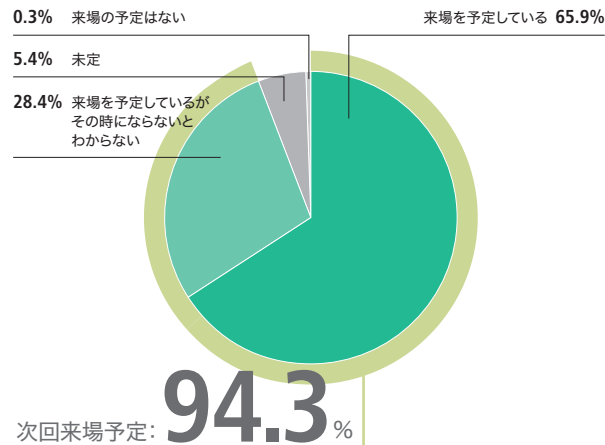
◆Inter BEE 2013全体を通して、どの程度満足しましたか。



■満足度の変遷



◆次回の『Inter BEE 2014』にご来場いただけますか。



Result: Exhibitor Profile

■出展者数

展示部門	出展者数	小間数
プロオーディオ部門	337社	278小間
プロライティング部門	16社	19小間
映像・放送関連機材部門	503社	1,112小間
クロスメディア部門	62社	82小間
合計	918社	1,491小間

出展者数: **918**社(過去最多)

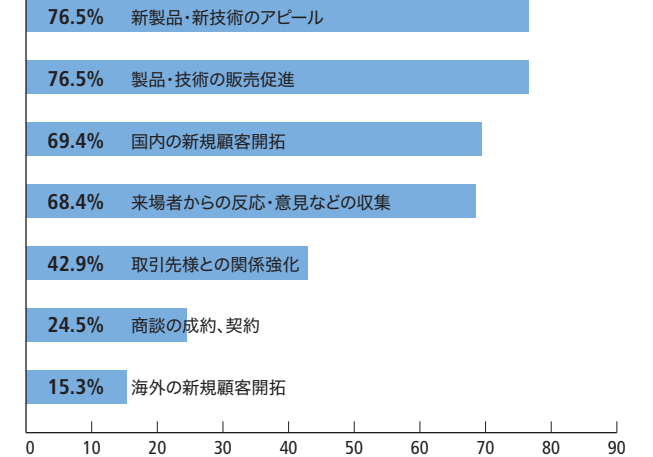
■出展者数の内訳

エリア	国・地域数/出展者数	国・地域別の出展者数
日本国内	1カ国/382社	日本382
アジア地域	6カ国・地域/77社	韓国28/中国22/台湾16/香港4/インド4/シンガポール3
北中南米地域	3カ国/205社	アメリカ186/カナダ16/ブラジル3
大洋州地域	2カ国/19社	オーストラリア18/ニュージーランド1
中近東地域	2カ国/10社	イスラエル9/トルコ1
ヨーロッパ地域	17カ国/225社	イギリス75/ドイツ58/フランス15/オランダ14/イタリア12/スイス9/スウェーデン8/スペイン8/デンマーク7/ノルウェー5/ベルギー5/オーストリア3/フィンランド2/ハンガリー1/ブルガリア1/ポルトガル1/リヒテンシュタイン1
合計	31カ国・地域	914社

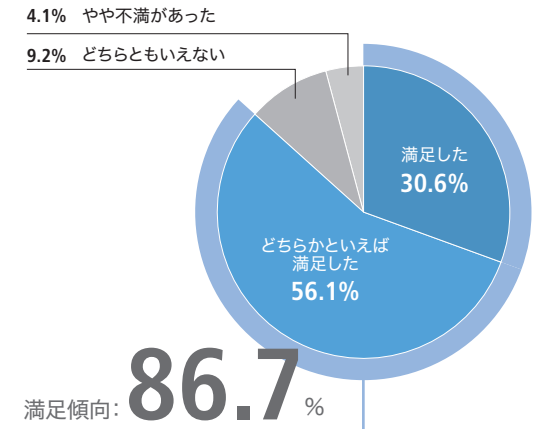
海外出展者数: **536**社(過去最多)

2013年出展者アンケート

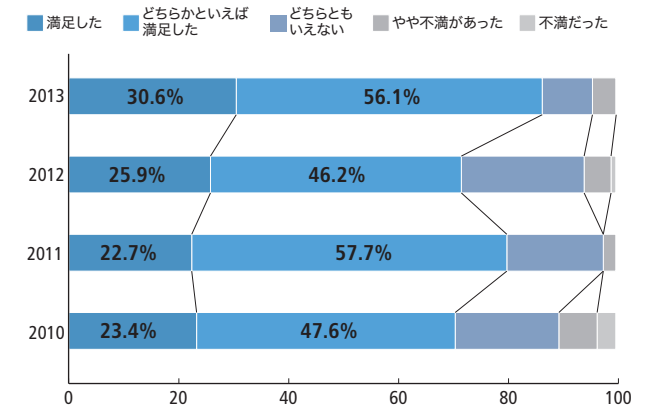
◆出展した目的【複数回答】



◆今回の目的達成の満足度



■満足度の変遷



Result: Publication and Promotion



1. 広報活動(リリース配信実績)

- *出展募集開始告知(2/28)
- *入場事前登録開始告知(8/12)
- *取材誘致案内(11/5)
- *開幕告知(11/12)
- *プレスルーム設置(11/13~15)
- *終了報告(11/15)

2. プレス登録者数

324名(うち海外31名)

3. 印刷媒体掲載記事数

	記事数
開催前	94件
開催中	27件
開催後	85件
合計	206件

※2014.1.20現在

4. 国内記事掲載(主な掲載実績)

掲載日	媒体名	内容
3/4	電波新聞	「Inter BEE 2013」出展募集開始 JEITA主催 幕張メッセで開催
3/4	家電流通新聞	「Inter BEE」 JEITA・11月開催 1日から出展募集を開始
3/6	電波タイムズ	「Inter BEE 2013」出展募集を開始 グローバル規模のメディア総合展
3/22	テレケーブル	「Inter BEE 2013」出展募集を開始
3/25	映像新聞	「Inter BEE 2013」出展募集を開始 最新トレンドの情報ハブ役に
6/24	映像新聞	出展者記事
8/14	電波新聞	11月に「第49回Inter BEE」 昨年の1423小間上回る見通し
8/19	ビデオ通信	Inter BEE 2013の開催概要を発表 Webサイトで入場事前登録開始
8/21	電波タイムズ	JEITA「Inter BEE 2013」開催概要を発表
8/22	電波新聞	話題豊富な今年の放送機器展 マルチスクリーン化も
8/26	映像新聞	「Inter BEE 2013」開催概要 放送・通信連携サービスを高度化
8/26	通信興業新聞	出展者記事
9月号	VIDEO JOURnAL	「Inter BEE 2013」開催概要決定
10/21	映像新聞	出展者記事
10/28	映像新聞	出展者記事
10/28	電経新聞	出展者記事
11月号	放送技術	Inter BEE 2013プレビュー 出展者リスト&会場案内図
11月号	OPTOCOM	開催告知Inter BEE 2013音と映像と通信のプロフェッショナル展
11月号	ビデオSALON	開催告知 4K、8Kなど放送や映像の最新技術と製品を展示
11月号	VIDEO JOURnAL	「Inter BEE 2013」開幕 メインテーマは4K
11月号	B-maga	Inter BEE 2013開幕直前特集! 次世代のテレビは4K/8K
11/1	電波新聞	出展者記事
11/4	映像新聞	出展者記事
11/4	電経新聞	出展者記事
11/5	日刊工業新聞	出展者記事
11/6	電波タイムズ	出展者記事
11/11	電経新聞	出展者記事
11/11	映像新聞	Inter BEE 2013 11月13-15日 幕張メッセで開催 Inter BEE 2013 展示会の見どころ 4K関連機器一気拡大 Inter BEE 2013 見どころ 多彩な放送ソリューション Inter BEE 2013 特集(出展概要①~⑨) Inter BEE 2013 特集(同時開催イベント①~③) Inter BEE 2013 特集(出展者一覧/展示会場図) 出展者記事
11/11	通信興業新聞	インター-BEE 放送・通信融合が鍵 13~15日、幕張で開催
11/12	電波新聞	あすから国際放送機器展 4K・8K、放送・通信連携サービス注目 出展者記事

掲載日	媒体名	内容
12月号	コマーシャルフォト	出展者記事
12月号	OPTOCOM	Inter BEE 2013 Preview ~放送サービスの高度化を支える伝送機器
12月号	放送技術	出展者記事
12月号	NEW MEDIA	Inter BEE 2013 必見のブースはこれだ Inter BEE 2013 「注目の技術トレンド」
11/13	日経産業新聞	国際放送機器展開幕 最先端のデジタルイノベーションが集結
11/13	日刊工業新聞	Inter BEE 2013 きょう開幕 音・映像・通信の最新技術
11/13	電波新聞	国際放送機器展(Inter BEE)きょう開幕 幕張メッセで15日まで 2013国際放送機器展特集(ブース見どころ) 出展者記事
11/13	電波タイムズ	Inter BEE 2013 特別インタビュー(東京五輪に向けてSHVは加速する) Inter BEE 2013 将来への拡張に向けた技術革新の数々 Inter BEE 2013 特集(出展メーカーの見どころ紹介)
11/13	オートレビュー	Inter BEE 2013 音・映像・通信のプロフェッショナル総合展
11/13	PRONews	Inter BEEの歩き方2013
11/14	日本経済新聞	放送機器「4K」主流に 東京五輪で盛り上がり
11/14	日経産業新聞	4K機器、出展相次ぐ 国際放送機器展、あすまで
11/14	日刊工業新聞	「Inter BEE」開幕 目玉は「4K」
11/14	電波新聞	「国際放送機器展」開幕 超高精細映像技術へ高い期待
11/15	電波新聞	国際放送機器展 4K取り組みなど訴求 7年後見据えた展示 出展者記事
11/15	電波タイムズ	Inter BEE 2013 幕張メッセに918社が集う Inter BEE 2013 特集 将来への拡張に向けた技術革新の数々
11/18	電波新聞	国際放送機器展2013レポート(上) 4K商戦突入の感
11/18	映像新聞	Inter BEE 2013 4K放送対応を模索 ライブ制作機器が前進 Inter BEE 2013 レポート 出展者記事
11/18	鉄鋼新聞	国際放送機器展 電線メーカーが出展
11/19	電波新聞	国際放送機器展2013レポート(中) 4K・8Kをキーワードに
11/20	電波新聞	国際放送機器展2013レポート(下) 東京五輪に向け開発に力
11/20	電波タイムズ	出展者記事
11/22	電波新聞	4K放送 計測器各社の動き加速 出展者記事
11/25	映像新聞	Inter BEE 2013基調講演 次世代TV推進策 4K/8K継続支援
11/25	映像新聞	Inter BEE 2013レポート
11/27	電波タイムズ	取材記事
12月号	Senka21	放送機器の急速な進化を肌で感じさせる4K到来

5. 国内テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月13日(水)	千葉テレビ	NEWSちば600
	千葉テレビ	NEWSちば930
11月23日(土)	フジテレビ	新・週刊フジテレビ批評

6. 海外テレビ放映

放送日	放送局	番組名
11月18日(日)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News
	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News(再)
11月19日(月)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News(再)
11月20日(火)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News(再)
11月21日(水)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News(再)
11月22日(木)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 News(再)
11月25日(日)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report
	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report (再)
11月26日(月)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report (再)
11月27日(火)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report (再)
11月28日(水)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report (再)
11月29日(木)	LCI	Plein Ecran - Inter BEE 2013 Report (再)

LCI (La Chaîne Info)は、フランス最大の放送局TF-1の配下のフランスのケーブルニュースチャンネル。24時間ニュースネットワークで視聴者数は720万世帯以上を有し、全フランスおよびフランス語圏内にニュースを提供している。フランス語放送のCNNと言われている。2013年9月から地上波でも観られるようになり、視聴者数が大きく増えている。

アジア		
12月5日(木)	Phoenix Television	Trendy Guide (Inter BEE紹介)
12月6日(金)	Phoenix Television	Trendy Guide (Inter BEE紹介)(再)
	Phoenix Television	Trendy Guide (Inter BEE紹介)(再)
12月19日(木)	Phoenix Television	Trendy Guide (4K特集)
12月20日(金)	Phoenix Television	Trendy Guide (4K特集)(再)
	Phoenix Television	Trendy Guide (4K特集)(再)

Phoenix Televisionは香港拠点の標準中国語テレビ放送。中国本土、香港、台湾、更に他地域の中国語視聴者を有する。(カンボジア: Cambodian Central Chinese Television、インドネシア: Metro TV、Da Ai TV Indonesia、マレーシア: ntv7、8TV、シンガポール: Channel 8、Channel U、Channel News Asia、タイ: TV5(BBTV)、CH7、Da Ai TV Thailand)

7. 広告掲載(国内)

発行日	掲載紙誌	発行日	掲載紙誌
8月2日	ステージサウンドジャーナル	10月15日	日本ポストプロダクション協会会報
9月1日	月刊 ニューメディア	10月21日	映像新聞
9月10日	CG World & Digital Video	10月27日	FDI
9月10日	MJ	11月1日	電波タイムズ
9月14日	サウンド&レコーディングマガジン	11月1日	映画テレビ技術
9月15日	ビデオジャーナル	11月4日	映像新聞
9月18日	PRO SOUND	11月6日	電波タイムズ
9月20日	ビデオサロン	11月6日	日経産業新聞
9月25日	テレコミュニケーション	11月8日	電波タイムズ
9月27日	FDI	11月13日	電波タイムズ
9月28日	放送技術	11月13日	日経産業新聞
10月10日	放送ジャーナル	11月13日	電波新聞

8. 広告掲載(海外)

発行日	掲載紙誌
8月15日	Panorama Audiovisual Brazil (ブラジル ポルトガル語)
8月19日	Broadcasting Equipment & Technology (BIRTV特集 中国語版)
8月19日	SET Magazine
8月21日	BIRTV Daily News
8月27日	Video Plus (韓国映像)
8月30日	PA (Pro Audio韓国音響)
9月1日	Asia Pacific Broadcasting (アジア放送)
9月6日	Broadcasting Equipment & Technology(IBC特集)
9月13日	IBC Daily (欧州)
9月15日	Broadcast & Production (中国放送・制作)
9月25日	Broadcast Engineering (米放送 US/Canada edition)
10月1日	ABU Technical Review (アジア)
10月9日	Broadcast India(インド)
9/15~10/31	AV-Specialist(英語圏 web広告)
9/15~10/31	科訊ネット(中国語圏 web広告)

9. Inter BEE Official Mail Magazine

過去の来場者データベースおよび、2013年の事前登録者に向けて、「Inter BEE 2013 OFFICIAL MAIL MAGAZINE」を配信。

約 **73,000** 件 **21** 回配信

※情報配信可能なデータ件数

10. Inter BEE 公式 Website

◆サイト訪問数: **146,442** 件(対前年比 **106**%)
(11月1日~30日)

Inter BEE Online Magazineでは、年間を通じてInter BEE出展者情報はもとより、関連展示会や業界最新ニュースなど、話題性の高い情報をいち早くキャッチアップしています。

出展者事前取材記事: **48**本

会場取材記事: **121**本

会場取材ビデオオンデマンド: **59**本
(Inter BEE TV)



11. 公式Facebook

◆会期終了直後の「いいね!」数:

2,420 件(対前年比 **191**%)

◆Facebookページから公式Websiteへのアクセス数:

15,757 件(対前年比 **386**%)



12. 公式Twitter

◆Twitterフォロワー数(最大):

340 件(対前年比 **252**%)

◆Inter BEE関連つぶやき件数:

4,610 件

※つぶやきに「Inter BEE」「インタービー」が含まれるもの



13. メディアパートナー

関連業界紙誌にはメディアパートナーとして

Inter BEEをサポートいただき、多くの出展者の記事を掲載いただいています。





音と映像と通信のプロフェッショナル情報サイト

INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com

Inter BEEをいつも手の中に!

本誌では、Inter BEE ONLINEで紹介された出展製品情報をご紹介します。(58ページから77ページ参照)
今回、各記事にQRコード(二次元バーコード)を付与していますので、
お手持ちのスマートフォンにQRコード読み取りアプリなどをダウンロードして、
QRコードを読み取っていただくと、Inter BEE ONLINEの各記事に簡単にアクセスできます。
Inter BEE TVのマークがついているビデオオンデマンドもご覧いただけます。是非、お試しください。

Inter BEE Onlineで
最新業界ニュースや展示会情報を
チェックしよう!



Twitter でつぶやこう!



Facebookの「いいね!」で
情報をシェアしよう!



YouTube で
Inter BEE TV を登録しよう!



50 ANNIVERSARY

Inter BEE 2014 International Broadcast Equipment Exhibition 11.19水 ≫ 21金 幕張メッセ

Inter BEEは、1965年に第1回を開催して以来、毎年開催を重ね、おかげさまで本年、50回目の節目の年を迎えました。

放送の歴史とともに歩んできたInter BEEは、これまでご出展いただきました出展者各位のたゆまぬ技術革新のご努力とその成果、また、ユーザの皆様の映像・音響制作に対する情熱に支えられた技術発表・情報交流の場でございます。これまでの皆様のご支援に深謝申し上げます。

今後も、出展者各位が生み出すイノベーションを、多くのユーザの皆様にご紹介し、さらに、広く世界に発信していただける、有益かつプレゼンスの高いInter BEEとなるよう尽力してまいります。

今回、50回の記念すべき開催を、皆様とともに、次のステップへ進展する機会として盛大に開催し、メディア産業のさらなる発展に貢献してまいりたいと存じます。

皆様からのより一層のお力添えをいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

一般社団法人電子情報技術産業協会
一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会



※2011/2012年版も下記サイトからダウンロードできます。

■お問い合わせ：一般社団法人日本エレクトロニクスショー協会 (JESA)
〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-1-3 大手センタービル5階
電話：(03) 6212-5231 FAX：(03) 6212-5225 E-mail：contact2014@inter-bee.com

INTER BEE ONLINE
www.inter-bee.com